

社会生活

はじめに

(一) 村落生活

左記のように分類し、特別な事項について若干の解説を加えながら排列してみる。



鎌原部落(昭和29年1月) (撮影都丸九十一)

1 村の起り、災害

浅間山が天明三年七月八日に大爆発をしたことは周知の事実である。その麓の沢谷にあった鎌原部落がその情岩の下に埋まった悲嘆の歴史は、わが国の火山災害史の中でも特筆される。またその泥流が吾妻川に押しこみ、河流を急増水させて下流利根川中流域に至るまで大災害をひき起した事実は、のちのちまでの語り草となって流域各地に伝承されている。本報

告では、それ等の具体的なものが詳記されていない。従ってこうした事実については、萩原進氏の「浅間山」等を参照すべきである。

2 村組織・階層・屋号

郷恋村で注目されるのは、大字から直ちに隣保班に連っていることである。他の地方において、中間に大組等の慣習的区分があつてその下に隣保班があるのは異なる。これは村落の発生に關係していると思われる。すなわち、密集した小村落の個々が独立した村となつたものである。それがあつた時点で急膨脹しても、大組等の構成をみず、隣保班を増設してすませているので、その適例を大抵にみることが出来る。だからその区長は、旧来の慣行に従つて最短期間でも三〇kmを通過して各隣保班への連絡をせねばならないのである。

階層の中には、若者組・奉公人も入れた。奉公人の報告の中には子守りのつらい境遇も語られている。

屋号の報告の中にはとりたてて興味をひくものはいくつもある。多くが職業や荷印等によつてつけられている。その中で大抵が特に多いのはここが宿場町となつていたからである。

3 村役・区費・村共有

村役の中で、区長の権限ないし所管事項が意外に多い。役場等に対する発言権が強いこと、また他地方では隣保班ぐらゐりに縮小されてしまつた婚礼や葬送の管理等が、未だに区長の所管事項に属している。すなわち、婚礼のとりもち役、葬送におけるジゴクデナンマ等がそれである。

村持ち地では、かつて南木山入会のような広大な土地があり、長野県側の村々と争つたことは記録も多く残され、歴史の問題である。現在は



御裁許写しと絵図(田代) (撮影都九十九一)



同上



山崎マケの墓地(袋倉) (撮影丑木幸男)

幾変更を重ねて、分割されて個人有となり、また官行造林が行われ、さらに牧野組合の結成をみている。しかしそのある過程を示すものとして「苜蓿干苜蓿取約定書」が採録されている。これによると、かつて袋倉では、利根郡各村にみられたような、山の口等の慣行があったのである。

4 村寄合・村入り・村柄

ワラジヌギをした家に親分になつてもらうのは、各地に共通した民俗だ。「顔を見ただけでこの部落のものかわかる」という村柄の報告はおもしろい。

5 村仕事

無報酬の村人足をオテンマというのは、宿駅制度の伝馬制度に起因することはいうまでもなからう。それが二種に分れ、村伝馬と地獄伝馬(ま

た穴掘り伝馬)とあることは珍しい。とくに後者があるのは、2においても述べたようにかつて村落が一狭小な共同体以来の慣習の残存と思われる。

6 贈答

特に変わって珍しいということもない。

(二) 家族生活

家族生活に関する民俗の報告は少い。とくに調査員の関心が少なかったわけではあるまい。注目すべき伝承に之しかったとみてよいと思う。

1 家族間の民俗

家族間称呼において第二人称目上の者におメエ、目下の者にワレ、中

兄(姉)の称呼ナカツツエーがあるなどは珍しい。また非家族の村人に對してアニイ、アネエ、オンジイ、オンバアを拡げて使用しているのは、利根郡にも共通する。

隠居・分家、また家族の私財等においても特に注目をひくものはない。

2 同族間の民俗

前述したようにこの村の民俗において注目すべきものが少い。土着伝承はあるにはある。しかし共通の氏神、禁忌、先祖祭り、共有財産等があまりみられず(報告されず)、同族意識はやや低いように観察された。このことは明治大学によって報告された袋倉部落の例においても同様で(日本民俗学83「上州の村」)「同族は(ハマケ)と呼ばれている。しかし全く知らない人もあり、またはっきりとした同族神もなく相互労働交換(エイ)においても、血族・姻族・近所同志とさまざま、その結果力、機能において決して強いとはいえない。」と指摘している。また同報告は血族と姻族の比をみると「五対五いやそれ以上に姻族の意識が強い。」と述べている。(都丸九十九)

一、村落生活

(一) 村の起り

鳴尾の由来 落ち着き先をさがしてほうぼうを歩きまわって鳴尾まできて、ここになろうといつて住みつくようになったので鳴尾という地名がついた。(門貝)

干俣 干俣の部落はもつと山際にあったが、たびたび大水におそわれた。そのため、文化文政ごろ(?)バラヤの沼の高い所から水を牛首に落すように工事をした。それ以後、今のように中央部に進出して来たという。文献も残っているとのこと。(干俣)

芝切権兵衛 松本権兵衛、同藤兵衛の兄弟がこの村に住みついた。芝切権兵衛という。先祖がナンバンを植え、秋になったら赤くなつた。赤



熊野神社よりみた鳴尾地区(門貝)
(撮影青木則子)

くなるようなら人間が住めるといって、住みついたという。一番兄は根津村に住んだ。村全部がゴマを作らぬ。オボスナ様が目を突いたので目が細くなった。だから田代の人には片目が細いという。(田代)

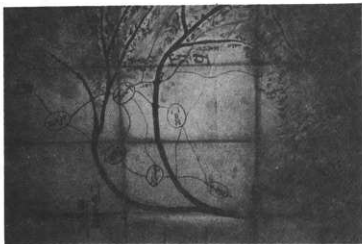
万座温泉を開いた人 大笹の無量院の墓地に、万座温泉を開いた人の墓がある。長峰藤吉という人の墓で、表には三ツ巴の紋の下に「忠山源心信土墓」とある。その両側面の銘文によると「長峰藤吉は信濃の生まれで、当郷之北隠在山、号万座、從古温泉薄之乎、涌出硫黄云々」とあり、天明四年十二月一日七十一才で没している。

芦生田のこと 芦生田は鎌原という城主の屯田兵の住みついたところといわれている。戦争のないときには百姓仕事をしていて、いざ戦争というときに、槍をもって、鎌原さんのところへ馳せ参じたものという。そのために、芦生田のものは、手で金をとること、給料とりを欲するという性格をもつていわれている。ここには下谷姓のものが土着したものとされている。下谷将監という人が、鎌原氏の一番家老であったという。ほかの姓のものはその後に移り住んだものである。

芦生田の戸数は現在一二六戸だが、明治の三十七、八年のころは三二

戸であった。戸数が倍増したのは、大正九年にここに草鞋鉄道が通るようになってからである。九年から十二年ころが全盛で、戸数も一五〇戸から一六〇戸ぐらいになった。当時は製糸所もあったし、劇場もできた。そのころには、三原の人がわざわざ、芦生田まで芝居を見にきたこともあった。ここに電力会社できたのが大正一二年、その翌年の一三年にはじめて電灯がついた。それまでは、ランプをつかっていた。

昭和一〇年に国鉄バスが三原を通るようになってから、三原のほうが発展するようになった。(芦生田)



文化年間の干俣方面の地図 (撮影金子緯一郎)



万座温泉を聞いた人の墓 (大笹 無量院) (撮影近藤義雄)

はいつき 生まれてからずっとその土地に住んでいる者(門貝)

立野 鎌原での生活から新しい土地を求めて開拓し畑をつくり、住みついて部落をつくり、多いときは十四・五軒にもなっていた。その後戦時中に陸軍の演習地になって鎌原までもどり、演習地ができたとなんに終戦になってしまった。その時戻った家もあったが、その後別荘地になり、現在は農家が一軒あるだけになった。(鎌原)

浅間焼けの話(大笹温泉) 天明三年七月八日に浅間山が大爆発をして火山泥流が流れ出した。その熔岩の熱で、大笹部落でつかっていた鎌原用水が湯になって流れてきたので温泉が湧出したと思った。そのころ、避難民が大勢大笹に押しかけてきたので、本陣間屋の黒岩長左衛門が人々に食べものを与えて手当てしていたが、いつまでという期限もないので大変だと思ひ、この避難民に協力してもらい大笹へ引湯することを考えた。避難民もこれに賛成して石樋をつくって引湯の引湯の距離は約二里もあり、蜀山人の碑のあったところへ湯をつくり、長左衛門の家で温泉宿をはじめた。その宿帳が天明七年から十三年まで残っているから、十年間は営業が続けられていたことがわかる。そのうちに、熔岩が冷え



説経石塔

大笹 黒岩長左衛門の墓石の背面
(撮影近藤義雄)

てきたのでだんだん湯の温度が低くなり営業ができなくなって廃業した。十八年位あたたかだったともいう。

当時草津温泉に入湯してただれた体を沢渡温泉でなおすのが普通であったが、大笹の湯がそれによいというので大いに利用されたという。もつとも、普通の水が焙岩であったためられて、鉱物質もあまり含まれていなかったからであらう。

浅間焼けのとき、燻蒸桶から下を押ししたので、そのときは吾妻川が逆流して松などを押しあげてきたという。いまでも宇藤の下(藤ノ下)附近では埋まった木がでる。

焙岩倒型 藤原では焙岩が流れ出して大木を押ししたとき、木の形のまま残った焙岩の穴がいくつもある。全体で八十三もあるといわれ、大きな穴に草刈りにきた馬が落ちて死んだのが二頭もある。(大笹)

大笹温泉のできたとき、大笹ではその資金を加部安から借入れた。そのときの証文

借用申金子之事

一金百兩也

右金子錠請取借用申処実正ニ御座候、長左衛門江戸表与利罷届次第、御普請御入用金受取元利共急度返済可仕候、為後日仍如件

大笹宿

天明三年十一月

黒岩傳四郎印

大戸

加部安左衛門殿

(黒岩晴義家所蔵文書)

浅間焼け死者の墓 大笹から鎌原部落へ養子にいった人がいた。天明の浅間焼けのとき死んだが、鎌原ではみんなお墓に石塔をたてないので、実家の人がかわいそうだったので石塔をたててやった。その石塔が大笹の無量院墓地にある。その石塔には上に六文銭がついていて、下には三人の院号が刻んである。また、背面にはそれぞれ三人の没年が記されている。



鎌原へ養子にいて天明三年浅間焼けで死んだ人の墓(大笹) (撮影近藤義雄)

表

〇〇永昌院殿実願貞大姉
 〇〇常寛院殿林宗輝峯居士
 〇〇深如院法屋月海大姉

裏

安永二癸未歲十一月
 天明三癸卯歲七月八日
 天明六丙午歲十一月十五日



浅間押しの記録 (鎌原) (撮影版本英一)

浅間おしのこと 天明三年の浅間の大噴火のことを、この辺では、浅間おしといっている。この年の四月ごろから噴火ははじまっていたという。旧の七月七日におしはじめ、八日にはげしくおしてきたということである。このとき、浅間さんがおこるといので、七日に、むらの和尚さんが先達でおがみに浅間へ行つたが、八日におしてきたのだという。芦生田の部落は、諏訪神社の前のくぼ地にあったというが、このときの浅間おしの下になったという。現在でははたけになっているが、石をぬいてはたけにしたといわれている。現在でも深く掘ると石が出てくるといふ。また、大木が掘り出されたこともあるという。

(大笹)

浅間おし的时候は、この辺では死人はそれほどなかったようだ。(芦生田)

浅間の噴火 浅間山が噴火したときには、鉄砲をぶつたという。(三原)

天明三年七月八日の上袋倉の死者は十名で、戒名には、安流禪定門、

見流善童子、流屋親身禪定尼などがある。翌年の三月までの死者の数は二十二名となっている。(上袋倉)

浅間の時、鉄砲ぶつた。日照りで困る時も、鉄砲ぶつた。(三原)

浅間押しのときのヒエ 戦後の昭和二十五・六年ごろ、大塚宗太郎さんが井戸を掘ろうとして十四尺ほど土を掘ったところ、土台に使っていたとみられる栗の木が出てきて、いっしょにヒエからも出て来た。ヒエからは二・三日経つと、ぼろぼろになってとけてしまった。(鎌原)

明治四十三年の暴風雨 明治四十三年八月十日に三原の嬬恋東尋常小学校と五軒の民家が暴風雨のために倒壊し、二十七名のものがおしこまれて死亡した。このときには、何日も前から雨が降って、山おしのために、二階建の校舎が倒れたもの。このとき家の下じきになって助かったのは二名だった。そのときには、三原が一番の被害があった。門員では二名の死者がでた。

ある家では家族が家の下敷になっていたがネコの鳴声があったので掘りだされて助かったという。そのために、今でもその家ではネコを大事にしているということである。(三原)



明治43年の暴風雨遭難者供養塔 (三原)
 (撮影井田安雄)

凶作 明治三十七、八年は凶作であった。ドンダリのワンゴ（ならのみ）も食ったという。（大世）

(二) 村組織・階層・屋号

田代の村組

田代は世帯数三八三。これが二七の隣り組となる。うち本村が二三、鹿沢が一で二二世帯、古永井で一六世帯、舟窪が二である。それぞれに班長（伍長）がいる。

大笹の組

新田町 隣組 二 本村
裏町 〃 一 本村



鹿沢温泉（撮影都九十九一）



田代部落（撮影池田秀夫）



大笹部落（撮影都九十九一）

本通り	二	〇	(別に農政局二)
砂井	〃	〃	
下南木	〃	〃	
大平	〃	〃	
永井	〃	〃	
北山	〃	〃	(△) (△印戦後入植)
中原	〃	〃	(△) 長野県人
山梨	〃	〃	(△) 山梨県人
登城	〃	〃	
計	二四	隣組	(三七八世帯)

区長が連絡のため右の伍長をまわると最短距離を通っても三〇キロ

メイトルはある。これ等の連絡の係りはないから区長が廻らなければならぬ。三原ではそのためにコブレと呼ばれる村人足があるが、ここにはそれがない。事務もたいへんだから、事務会計係を今年から頼むようになった。

門貝の組

門貝の戸数七十二戸。

字東平、字西平(本村)49戸—滝沢・黒岩・山崎・佐藤・山口・大沢・

菊地の姓

字石古根7戸—滝原・黒岩・樋口・尾崎の姓

字鳴尾9戸—山口・佐藤・滝沢・黒岩の姓

字上ノ山5戸—黒岩の姓、(明治34年に一戸)

字戸花2戸—滝沢・黒岩の姓

黒岩姓は各字に分布している。

区の組織

中 十二戸

東 十二戸

山根 十二戸

区長—伍長 西 十三戸

鳴尾 九戸

上の山 五戸

八千代 八戸

戸花 二戸

千俣の組

千俣は本村が西上・西下・東上・東下の四組に分かれ、仁田沢が一組、上の貝が上組、下組に分かれる。合計七組ある。

大前の組

大前は二一六戸で八〇〇人ぐらゐの人口だが、一組に分かれていた。日露戦争当時の西窪村

明治三十七・八年頃の西窪村は三十一戸であったが、俗に八幡三十軒と言われていた。これは八幡様を含めても三十戸しかないと、三原あたりの子供達はやしたことばだとう。

村は上組 十一戸、中組 九戸、下組 十一戸の三組に分かれていた。

上組 中組 下組

小林龜吉 竹淵作太郎 黒岩治作

黒岩十吉 竹淵伝吉 黒岩治平

黒岩直藏 竹淵米作 黒岩泰作

黒岩駒吉 黒岩ため 黒岩巳之作

黒岩武八 黒岩清吉 西窪小平

黒岩甚七 黒岩文七 黒岩伝平

黒岩喜七 黒岩幸治 岩田平

黒岩慶助 黒岩好平 安齊兼吉

黒岩金作 黒岩勤十郎 黒岩長太

黒岩七郎次 黒岩定八

岩田かつ 平林万吉

西窪の組

上組十七戸、中組十六戸、下組十六戸、田町十八戸、住宅十五戸の六

組あり、組に伍長がいて、諸連絡にあたる。伍長は組内で順番にまわる。

区長の任期は一年で、三月の役員会で選出し、四月三・四日の總會で

交替する。(西窪)

子どもの組 ドウロク神の組ぐらゐで、戦前は上と下と別々にしていたので灯籠も別に上げ、けんかをしてこわしっこをしたりしていた。戦

後は一緒になった。

道祖神のなかまは、七才になると入った。一年に入學する年になるが、

その子は村中最後まで歩けなかった。以前は米は貴重だったので、セ

エノカミのカンジでも米はもらえないので、米の袋の係には一番小さい

子がなることにきまっていた。(鎌原)

たりして楽しんだ。その晩は男女いっしょに泊ってもよいので、それをしおに結婚に発展する場合があった。

宿は個人の家を借りた。家人が少く、大きい家がよく宿に借りられたのである。(田代)

むかし、若い衆仲間には契約というのがあった。やぶ入りが終って一日おいた一月十八日に、若い衆仲間があつまり、親方(役員)をえらんだ。(芦生田)

力だめし 若い衆たちが、墓地に行つて僧侶の石塔を持ち上げて力を競つた。これは秋の月夜にやる場合が多かつた。大きいので二八貫、中位ので二三貫、小さいので一九貫あつた。

コビキのひいた板をかつくこともあつた。何枚かつげたという。普通馬一駄分かついだものである。これは五分板三六枚(巾八寸、長さ六尺、厚さ五分)。馬一駄は六分板(巾一尺、長さ六尺)で二四枚が普通である。棒でのオシトラもした。(田代)

夜遊び 鎌原の者は他村へ出てゆかないので、他村から来る者が多かつた。芦生田からの者が多く、長い間通つて来てのつびきならず結婚した者もある。

村の若衆が他村から来た者を追いまわしたりしたこともあり、田んぼの中へかくれた話や、大がま(ヘツツイ)の中へ逃げこんだ話もある。(鎌原)

よばい 昔はさかんだつた。若い衆が行くと年老りが追いまわすのもあつたが、娘をもつ家では、男がのぞっこにも来てくれないような家ははらい悪い話がつたという。

夜はいに行つたらまだ娘が来ていないので、寝てしまつても困るのでモミジの墓でメツコギをしていた人もいる。

家のつくりがどどこも同じで、戸を開けて入るとすぐ馬屋があるので、刈りほしをひとかえり持つて行つて馬にくれて馬をなつかせて入りこみ、帰るときには気づかれないようにあとしやりをして帰つた。

時期になるとイモ(じゃがいも)を二階にひろげておくので、入りこんでうっかりするとイモの上ののつてしまつてゴロゴロ音がしてしまい、オバアに「だれだ」とよばれておつかふなかつた。

しのびこんだのを知つて若い衆たちが戸の敷居に水をかけてこおらせてしまつたはずもある。(鎌原)

昔はあつたが、電気がついてからなくなつた。(大笹)

ランプを使つていた時、夜は石油がもつたないので消すので、マッチをすつて見当をつけて行つた。大正十二年頃に電気が入つてからはやらなくなつた。小宿、袋倉、仙ノ入の方まで行つた。(今井)

奉公人 ネンヤトイは一年中住み込みで、男女共に百姓仕事をすべて行なう。これらは坂上・伊参・六合村などから来た。年令は十九、二十才の若で、よくて二年勤めた。なかには主人に見込まれてムコ、ヨメになつたものもある。これは昭和四十年頃までのこと。昭和三十三年頃は、田代だけでネンヤトイ、臨時雇ひ合せて八人もいた。この頃が最高であつたようである。そして衣食を与えて男が年二〇万円、女が一五万円位もらつた。臨時雇ひは七、一〇月の甘藷の出荷期、月一万五千円位、男が多く、これも昭和四十年頃までのことである。(田代)

子守り 三月一日をデカワリといひ、三月のお彼岸頃まで仕事を始める。家族同様の扱ひをし、村内では門貝、村外では六合、伊参村などから来た。概ね尋常小学校を卒えてからで、昭和の初期、来る時の手配金が十二、三元、衣食をもらつて一年十円位、あるいはそれ以下。二、三年勤めた。昭和三年、男の子で古永井から小学校二年生できて、卒業するまで勤めた例もある。(田代)

十一才の時から半出来に子守り行つた。親の苦勞を見ているのがつらかつたから。

妻はし、おしめ洗い、馬のかいば切り、馬にシト(糞)をつけて、馬をひき、コジョウハンを作つて山まで持つて行つたり、葉を煮たりして、子守りもやつた。遊ぶ手間など全然なく、力も弱い子供にはつらいもの

だった。

学校の先生が学校へ来させねえってことはねえと怒って来た。それで学校の先生のところで手伝って、学校へ行った。

板の間に布団一枚あてがわれてカシワで寝た。風呂は一週間もたてかえて、よいよぶちやる時でなくては子守には入れてくれなかった。

ランプの石油が終ってヒデをもらいにも行かされた。真暗な晩で雨がシボシボ降っていて、夜這いに来ていた若えしにおどかされておっかなく逃げ帰って台所で泣いていたこともあった。

且那さんが良い人だと助かるけど、子守りはつらいものだった。(今井・石津・一場みつさん)

子供は男も女も、子守がおきまりだった。子守帯でしよい歩いた。寒くなるとネンネコバンテン、ショイブトンなどをかけた。(西窪)

屋号

ほか、荷印等

屋号 (現姓)

カジヤ (土屋)

エドヤ (佐藤)

ヤマヤ (土屋)

マツバヤ (〃)

カネキ 金木屋 (佐藤)

カジヤ (黒岩)

大和屋 (中島)

松井屋 (黒岩)

福田屋 (佐藤)

ヒトヤ (岡)

菊屋 (黒岩)

柏屋 (佐藤)

笹屋 (黒岩)

鱈屋 (小林)

旧荷鞍屋 荷鞍を方言でヒト造り酒屋

旅館・もと造り酒屋(丸上) 製材

丸屋 (土屋)

油屋 (宮崎)

銭湯屋 (佐藤)

モグサヤ (加部)

扇屋 (黒岩)

富屋 (黒岩)

三樹屋 (黒岩)

三樹屋 (原田)

中村屋 (土屋)

田丸屋 (黒岩)

金井屋 (土屋)

金樹屋 (佐藤)

間屋 (黒岩)

玉崎屋 (黒岩)

中屋 (岩上)

上田屋 (大久保)

永栗屋 (佐藤)

玉屋 (黒岩)

平野屋 (黒岩)

葛屋 (加部)

藤屋 (黒岩)

清水屋 (坂井)

桐屋 (佐藤)

井久屋 (〃)

板屋は職業をさす場合が多い。

黒岩治平家

黒岩治作家

黒岩長太家

農業

昔風呂屋、今農業

農業

昔穀屋、今農、命

農

農

農

農

農

今郵便局

商、雜貨店

長左衛門家、村のシバキリ

農 (五)

明治20年新宅、印刷業 (中)

昔農、今製材

明治末年蚕種製造

農

農

雜貨・農

農

農

農

農

農

農

農

農

農



土蔵のやまばん (門具)
(撮影中村和三郎)

豆腐屋 竹濤作太郎家
お屋敷 西窪小平家
中村 黒岩勘十郎家 (西窪)
柗屋・柏屋・小松屋・ヤマ十・十カ屋・カタ田 (屋号は柗屋、荷印は夕) 藤屋・カネ三 三 松屋・シバキリ (古永井の黒岩家)
やまばん
やまばんは、膳碗やちようちんをはじめ履物や道具類、土蔵などにもつけた。書くことも焼き印することもある。
やまかど 企
さすかど 企
やまね 企
やまね 企
まるこ 企
おおぎびら 企
やまきゆう 欠
やまよ 企
まるなか 企
かねもと 本
やましよう 企
かねじよう 上
かねます 井
かねさ 佐
やまひち 七

(門具)



集会所 (元は諏訪様であり鳥居が残っている)
(半出来) (撮影阿部 孝)

二 村役・区費・村共有

二 織恋村の区長 今井の区長は、区の中の冠婚葬祭には必ず出席した。結婚式では、取り結びの役があった。この時の包金(祝儀)は区より年間五千円が出たが一回毎に千円ぐらい出さなければならず、一回千円ずつ区から出すことになったが普通の人が千円持つて行くところに区長が千円では困るので区長自身が千円足していたが本年度(昭和四十七年度)より一回二千円ずつ区から出すことにした。引物は区長自身のものとなる。この外にも出費が多く四月の引継のときになると金が不足して目が覚めるようだといふ。

例えは昭和二十九年には消防ポンプを東京の石原ポンプまで買いに行ったが本当に実費だけで、すいぶん損をした。

この村では区長をして十年目でないと再び区長にはさせないきまりになっている。他の村の区長も同じである。

三原、大笹の区長は区長事務所があって書記が事務をする。

田代の区長は選挙であり、相当の競争がある。四百戸もあるので区長の役は一生に一回といわれているが、これもむづかしいので競争になるといわれている。当選までには百万円もかかるそうだ。区の経費の



今井水道通水記念碑
(道路工事が完成したら建てる) (今井)
(撮影阿部 孝)

面はよい。一戸に千円ずつ課してもすぐ四十万円から集まるので区費の面はよい。

幡恋村には区長会が出来ている。昭和四十二年に成立した。相互の人間関係を作るために村の公費でない私費を出し合い五万円もする、ポリング大会用の優勝トロフィーが出来ていて大会を行なう。このようなことがあるので区長会は大いに張りきって活躍している。村費では年一回伊勢参りに全員連れて行くことになっている。

区長の下には評議員、伍長、小ふれ又は連絡員という役がある。石津、半出来、仙之入、本村と各連絡員が区長宅に毎日交代で用事を伺い伍長との間の連絡をとっている。有線放送が出来てからは有線で連絡をとり文書等があれば出掛けて来る。

評議員は部落の戸数に応じて一、二名いる。仙之入一名、半出来、石津は各二名、本村は四名である。

区長は必要に応じて役員会を開く、評議員は、区長の提案に対して補助的であり、部落の立場で発言し、伍長は組の立場で意見を述べ、区長、評議員、伍長の意見の統一をはかるようになっていく。

区長は役場に行った時などがめだてまつられる。うらはおだてて使うということだ。区長会議は必要に応じて開かれる。定例会はない。地域の問題は区長へお願いし、それから村会議員に通じ、村議会へ提案される。

区長が張切っている区からは陳情書が盛んに出され、区の問題がよく解決されるが、村からの連絡や事務処理ぐらいいで済ませる区長もある。その年の区長の働きは一目でわかる。それだから部落の人たちは区長に協力しなければならぬ。

村議会では区長の意見はなるべく通すように努力している。今井、袋倉は幡恋村としては一番忘れられた部落である。明治二十八年に県道を現在の国道の位置に下げられたので大反対をしたが、押し切られてしまった。

その後は区長になるものがなかった。区長として責任が重すぎて部落のためにならなければ一人で苦しむ結果となると心配された。

区長が復活した時期はいつだかわからない。現在は区長を決める時期は神社の総会時に翌年の区長を決めておく、その人なりに自分の家の計画を立てる都合があった。

区費は等級割りで七段階制をとっていた。平等四分、等級割り六分であった。等級割りを決めるのは、区長、評議員、伍長と村会議員(その地区出身)で、その家の事情を充分に加味して決めた。

昭和四十二年よりこの制度がなくなり、納税の奨励金を区費に当てるようになった。完納報償金のことであって、納税は各家の実状に応じたものであるから原則的には以前の等級割りと同じであるという考えからだった。但し不足金が出るので各組毎に報償金を分けたものと仮定しておいて、不足金は組の中で平等に出費することになっている。

この方法は幡恋村の各区で同じように実施しているところが多くなつた。

区長は引継の時に自由に使える金として十五万円が手渡されるように

なっている。(今井)

区長の任期は一年。三月下旬に選挙して翌年の区長になる人をきめておき、村の評議員の形で区長の見習いをする。選挙は各組(十四組)でマワリでなる伍長を中心に行なわれ、全部集めて開票される。当選者がきまると区の評議員が本人のところへ来て申し入れをしてきまる。ことわることもできるが、ことわると後々まで尾をひくので親せきもかなわな(兼原)

むらの役員 芦生田では、むらの役員としては、区長・区長代理者・評議員がある。任期はいずれも一年である。区長・代理者は一人ずつで、代理者は前年度の区長が就任する。評議員は六人である。このほか伍長が十二人いる。これは芦生田全体を十二班に分けていて、各班(組)ごとに伍長をえらんでいる。伍長はまわり番である。

区長と評議員はむら全体から選出する。下相談もせず、選挙運動もせず、とくに立候補者もない。評議員はむらの役員経験者が主として選ばれる。これは再選される場合もある。

役員選挙に三月の二十日から、選挙の結果は彼岸の中日に役場へ届出て、役場から委嘱されるといふかたちをとっている。新役員の就任は四月一日で、この日に区長のひきわたしがおこなわれる。区長のひきわたしには、むかしに、役だんすを伍長が二人ほどでかついで、旧区長の家から新区長の家へはこんだ。現在では、役だんすはもとの下諏訪のあとに倉庫をたててそこにおさめてある。この倉庫は昭和四十一年に建てられたものである。公民館建設費の残りをつかっただけをした。そのため、現在では区長のひきわたしは、必要書類のひきつぎだけをしていい。区の総会は四月一日におこなわれ、一年中の行事をきめたり、会計報告、予算案の審議などをおこなった。むかしは、区長の家に村中の人があつまって総会を開いたので、大きな家でないと区長がとまらなかつた。

芦生田では、いわゆる冠婚葬祭には、すべて区長がたちあつた。

ご祝儀の場合に、もらい方の三々九度のさかづきは、区長がとりもち役をする。実際には、女幟、男幟が酒を注ぐが、その指図は区長がやるのである。(芦生田)

昔は戸長のことを、ムラオサ(村長)といった。なれる人は家がらが決まっていた。

区長は、もともと選挙で選ぶ。伍長(班長)が寄って選挙したもので、伍長は六人いた。伍長は組の者の選挙で選ばれた。年度末三月二十日前後に行なわれた。伍長の下にフレ伍長がいて、必要なことをふれ歩いた。フレ伍長は二人いる組もある。(千俣)

区の評議員 四十六年に改正した。

区長 一

評議員 一二

村会議員 二

区長代理 一 前年度の区長

区長見習 一 来年度の区長予定者(選挙で選出された者)(兼原)

区長は選挙によって選ぶ。三月末総会で、今は公民館などで行なうが、昔は隣り組ごとに選挙札を配って書いてもらった。

区長は村会議員の候補みたいなものだ。

次点は次の年区長となる。

区長の下に伍長がいる。

ほかに評議員があり、これも選挙で選ばれる。

役員会は区長、代理区長、伍長、評議員で構成する。(太世)

役員会 区長、評議員(一五名)、村会議員、伍長。そのうち評議員というは、大字の村会議員みたいものである。(田代)

御用ダンス 区長が持ち廻る区の検図面、頼母子講、書類等の入っているダンス。(門員)

引き継ぎ 区長の引き継ぎは正月七草に行なう。(大前)

文書庫 区長さんの関係文書として江戸時代の名主以来の文書が代々



文書庫 区長文書の保存庫（鎌原）
（撮影飯本英一）

継承されて来たが、量も増し、紛失のおそれもでてきたので、保存のための倉庫として十二、三年前に建てられた。浅間押しよのときの地割帳、その後の絵図なども保存されている。鎌原公民館の前、鎌原神社の境内にある。（鎌原）

郷倉 鎌原神社の鳥居のところにある蔵を郷倉という名でよんでいた。神社の祭道具などを入れていた。（鎌原）

墓地の傍に郷倉があって、余った食糧をたくわえた。この郷倉はヤマタホステルの茶室に立っている。（千俣）

氏子総代 千俣では各組から一人ずつ計七人の氏子総代が出て、互選で祭典委員長一名が選ばれる。（千俣）

寺世話人 千俣には護国寺があり、会長が区長で、寺世話人は伍長が兼ねている。（千俣）

警防団 昭和九年に嬭恋村に十一分団あった。一分団四十人、団長一、

副団長二の規定があった。西窪、三原、芦生田で一分団つくり、嬭恋村五分団と称した。（西窪）

区費 役員会で決める。困る人、新しい分家は二年免除。半額というのもあるが、他は平等が原則。ことし一世帯四〇〇〇円ぐらい。（田代）役員会で、一級より四級に分ける。級を決めるのは目見当であるが、不服はあってもみな承知する。

区費は四、九、三月、三回に分けて徴収する。昭和四七年においては、一級一、〇〇〇円、二級八〇〇円、三級六〇〇円、四級四〇〇円である。区費はほかに官行造林の管理費等からも入る。（大笹）

区費は区長が中心になって、代理人、評議員、伍長があつてきめる。区費のきめかたは、平等割と資産割の二本だてになっている。平等割は一五〇〇円。資産割は十三段階ほどに資産高に応じて等級をつけ、一段階二百円きさみになっている。

納入方法は、九月一日と三月一日の二期に分けておこなっている。（芦生田）

村持ち地 神社有のほか、旧鹿沢に約六反の山林があるが収入は〇、昔から村持ちになっている。

共有としては二九九年からなる牧野協同組合の地所があつたが、各戸平均三反ぐらいずつに分けてしまった。ほかに二七二名からなる牧野附帯地組合がある。（田代）

共有地 村持地は現在では大笹開所址のところぐらいで僅かしかない。昔入会地であつて、しばしば長野県側と争つた南木山入会地は、明治になってから「嬭恋村他一町組合」となつたが、実質は六大字であつた。すなわち、嬭恋村では、大笹・大前・鎌原・芦生田、長野原町では小宿・応桑であつた。嬭恋村では、これ等に官行造林を行なつた。大正初年に右組合は解散し、陸軍演習地に買上げとなり、戦後これが各部落に払下げとなつた。大笹ではこれを各戸に分けた。平均四・五町ぐらいであつた。しかし現在では大方開発会社の手に渡つてしまつたらう。（大笹）

共有林 (西窪には共有林はない。(西窪))

昔からの鎌原の共有林は約三百町歩ほどあった。国有地のまわりを共有として、戦後払い下げを受けて共有林としていたが、その土地は適宜自分たちの好きなところを開墾して畑をつくったりした。部落共有林が認められないようになってきたとき個人有に分けたので一部にはそのまま所有している者もいるが、別荘地に売るようになり、現在は安くても坪五千円、高値は限度がないくらいである。最初にサンヨウに共有林を二十町歩ほど売ったときは坪二千円だった。この売り上げ金は役場へ寄附額を出して村の歳入とし、それが鎌原公民館の建設資金になった。(鎌原)

「苧敷苧干苧取約定書」

吾妻郡堀恋村大字袋食村」

官有地苧敷苧干苧取約定書

第壹条

苧敷苧取山口事は五月十日前ト相定メ

但かこ苧林は其限リニ有ス

第貳条

苧干ハ苧始ヲ年々二百十日翌日ト相定メ

但日限□□ハ区内協議決定之上□□スルコト

第參条

前老条武条相定メ之通苧敷苧干共区内協議之上山口ヲ定メ、其定日之

通リ苧取事

第四條

当区内苧敷苧干苧干山口日限協議決定ヲ違背為ス者ハ老ケ年ヨリ三ヶ

年間、其品之苧取ヲ差止

但林稅諸上納者ハ無差支相□□□□事

右之通当区内一同立合協議決定致候ニ付、為後日一同違著致おく也

明治廿三年六月 熊川市良治◎

(以下連印略)(袋食)

四 村寄合・村入り・村柄

村寄合 村ヨリイは今では總會と呼はれて四月一日、一年の行事、予算、決算などを決めたと酒。ほかに伍長ヨリイがある。これ等に村入り等の習慣はなかったという。

村八分なぞ昔から聞いたこともない。(田代)

ふれ 芦生田は、むかしは小村だったので定使いはなかった。ふつうのふれ(触れ)は伍長が区長の命をうけておこなった。

葬式の場合には、いっつぎをした。甲家から乙家へ、乙家から丙家へというように。

むらの集会に、何時に寄れといっても、なかなかあつまらない場合には、下諏訪の社務所(ここが集会所としてつかわれた。)とがあつた)の大鼓を鳴らした。(駅の出来る前のこと)(芦生田)

警報 ラッパ手がいてラッパを吹いて知らせた。その後、三本柱の半鐘が建って、最近現在の鉄骨に変わった。もと消火に使った手押しポンプは、大前の小学校の資料館にある。消防手は十八才から毎戸一人だが、二人出る家もあつた。昭和三十一年から無火災である。(門具)

村入り 村に住み付く者は、ある家にワラジをぬいで、区長に挨拶をした。ムコの役割りという特別のものはない。(千俣)

ワラジヌギ 他所から来ると適当な人の所にワラジヌギをする。新宅に出る時はワラジヌギをした家にオヤブンになってもらう。大概4・5年が出る。オヤブンとは親子のつきあいをする。(今井)

二村柄 血族結婚が多いから、顔を見ただけでどここの部落のものかわかる。

今井はテンデンプラバラで共同はしない。勤勉だが、頭は使われないからラチがあかない。口は悪いが腹は良い。柄が悪い。

千俣は大尺村。人間の柄がよくまっすぐですれていない。共同精神が

ある。

鎌原の人は手足が大きくて顔が黒い。田代は口が上手で腹が悪い。

大世は柄が悪い。

門貝は柄がよく、丸い性質の人が多い。

三原ははしっこい。今は勤勉さが無い。草紙が出来てから発展した。

(今井)

袋倉よいとこ 来て見りや地獄

朝日あたらず ポロを着る。

鎌原は円満な村で、いい面をうんと残している。昭和四十年に、青年だけでは獅子が舞えないので何とかして、という申し出があったので、今までやっていた人をのけた青年会員を十人ばかり頼んで歩いてやったところが、気持ちよくやってくれて、その後はさかんになった。(鎌原)

(四) 村仕事

オテンマ 村のシヤク(使役)としてはオテンマ(またテンマ)がある。これがムラテンマ・ジゴクテンマに分れる。それぞれ名簿が作ってあって順次使われる。

ムラテンマは役員は除外、祭礼の場合は一日に二五人、堰普請、総会(ヨリアイ)、会場整理、税金をとどける等のほかに臨時に徴用がある。例えば水路がいたんだ場合など、その必要人数だけ。ジゴクテンマは除外者はなく全部、しかも名簿の反対からめぐる。葬送の際の穴掘りである。

このテンマのほかに村仕事としては、コーチ・コーチ(耕地)によって道普請がある。神社修理はオテンマの場合もあるが、職人を頼むのが普通。ノビバンは愛林組合から出る。(田代)

村仕事をオテンマという。祭典・道普請・用水路普請・橋普請・測量の手伝い等がありほかに葬送の際の穴掘りにはアナホリテンマがある。

道普請は雪解け後、ことは四月十八日であった。秋は道かいたんだ時、今はダレーダーでやってしまうので、あまり重視しなくなった。

右のほかにノビバン(野火番)を区でひき回している。営林署から現場へ依頼があり、それを区が受ける。手帳・腕章・双眼鏡等を預る。四月十日ごろから六月二十日ごろまで。野火だけでなく、その他の監視もする。監視料は七万円ぐらいであるという。

無料奉仕で、石置屋根の屋根普請、道普請、用水普請などである。(大世) オテンマは村中の勤勞奉仕のこと。道路愛護日など、村中の者が鉈、スコップを持って。一軒一人ずつ。田用水の水かけ(堰ぶしん)橋が流れたときの橋かけ普請などもあった。

人がなくなつたときは、昔は村半分ずつ、現在は他人さまの十軒の者が出る。これは地獄テンマという。(門貝)

道普請、山普請、橋普請などである。橋普請はボウフウ(台風)などで橋が流されたとき、鎌原、門貝、大前、西窪で木を買って橋をかけかえる。(西窪)

オテンマとは、無報酬で、各戸一人ずつ出る義務人足のことをいう。これには、事故のあった場合などの必要に応じて出る場合と、道路や水路の修復のように定期的におこなわれるのとある。

水害とか火事などの災害の場合には、災難の程度に応じて出るが、火事の場合には、大体むら中の人が手伝いに行く。火事にあつた家の組のものは、手伝いに行く日数は多くなる。

道路の修復は、むかしは春(四月)と秋(九月)の二回おこなつたが、最近は、道路愛護週間の行事として村内(福恋村全体)の道路の修復に、各戸一人ずつ出ることになっている。これもオテンマとよんでいる。水路の修復は消防との関係があつて、春(四月)と秋(十一月)の二回、各戸一人ずつでおこなっている。

オテンマに出ない場合には、次回のオテンマに出てもらうようにしている。区長が出欠を記録しておいて、欠席者の場合は、つぎの機会に出

不足をひきあてるといふ方法をとっている。ここでは出不足金をとるようなことはしていない。

このほかに、人がなくなった場合に穴掘りオテンマというのがある。むかしは、葬式を出す家の親類縁者を除いて、むら中で穴掘りの仕事をした。そのころは三十人ぐらゐは出た。昭和になってからは、十人で穴掘りをするようになった。このえらびかたは、死人の出た家の親戚関係は除いて、それ以外のものが、順番にしたがってつとめることになっている。オテンマ帳（芦生田の場合には「埋葬人足帳」というのがある）があって、これにホシをつけていって、区長が人足をわりあてて。このオテンマはのがれるわけにはいかない。番にあたったときに都合で出られなかった場合には、つぎの機会には必ず出なければならなかった。

なお、神社ののほりのはたぎをたてたりおしたりすることや、おまつりのときのおかざりは、青年たちの仕事とされていた。（芦生田）

道普請、堰普請、葬式の手伝い、家の新築、改築がオテンマで、区長の指示に従って、ただ手伝いをする。（今井）

架橋 橋をかけるときには、むら中から一戸一人ずつ出た。むかしはむら内の橋は土橋で、川の面から橋までの間隔がせまかったので、大水が出るたびに流された。多いときには同じ橋が一年に三回も流されたことがあった。費用は地元負担であったから、橋かけ貧乏ということがあったほどである。

橋が流される、流れた橋の材料を下流までかつぎに行った。

橋は図のように、二本の太い丸太をわたし、その上に横木をならべて、土をかけた。二本の丸太のことをナブリといった。橋をかけるためのオテンマには、女衆が多くてた。（三原）

普請 以前はむらの戸数がすくなくかつた



（六十〜七十戸）ので、普請のときには大体むら中のものがオテンマに出た。食事は施主が出した。あらかべがぬれるまでは、むらの人たちが交代で出てくれた。そのあとは、親類とか、近所のもがすけに出た。（三原）

親戚同志で屋根ふき、壁塗りなどスケッコをした。食事は出すが金は払わない。そしてそのような仕事があるとき、オカエシをするが、他の仕事で返してもよい。（田代）

家をつくるときは、カヤ刈り、カヤツケ（カヤ運び）カベツケ（壁土運び）コメエカキ、カベス、屋根フキもみんなオテンマでやる。村中を頼んで歩けば、他の一切の仕事をしないで手伝いをしてくれた。知らせがなくても、ヤマへ出かけていても村の中で屋根ふきをしているのがわかれば仕事をやめて帰って手伝いに行くものだった。（鎌原）

義務人足 むらの義務人足のことにはオテンマという。オテンマにはつぎのようなものがある。

道路普請：春秋一回ずつ。

堰普請：四月から五月にかけて、現在はない。

火事のことかたづけ：むら全体では一戸一人ずつ一日出て手伝った。隣組はかたづけが終るまで手伝った。火事のことかたづけのことを、灰はきという。

葬式：組でおつきあいとして出る。もとは地獄デนมマといった。

橋を架けるとき：大水などで橋がおちたときに、一戸一人ずつ出た。むかしは橋かけ大デนมマといひ、年に三回もこのオテンマがあると、むらは貧乏したというほどであった。（三原）

地獄デนมマ むら内に不幸があった場合には、不幸のあった家と関係のないものをえらんで、穴掘りと埋葬の仕事をさせた。これを地獄デนมマといひ、雨天の場合には十人（これは仕事がおおごとだから）、晴天の場合には八人のものが出るようになっていた。

このオテンマに出たものに対しては待遇がよかつた。一客としててもて

なした。穴を掘ったときに酒一升、埋めてから清めとして酒一升出した。余裕のある人は何升でも出した。この酒はもちかえしてはいけないといふ。ごちそうとしてはテンブラを出した。

地獄デンマに出た人に対しては、忌あけのときにもよんで、上座にすわらせた。

この方式は終戦前までのこと。(三原)

氷とり 村の中に大きな冷蔵庫がある。蚤種をやっていたときのタネ保存用につくったものは実際には残っていないが、そこに水を入れておく。もとは青年団が出て冬の厳寒期に、水車についた氷を切つて納めておく。村に病人が出たときこれを分けてやった。現在は、温水ため池にはった水をとつて入れておく。この作業は村中のオテンマになっている。(鎌原)

(六) 贈答

縁の年始 花嫁は正月に実家に行くときはお膳の大きさのもちを二枚かさねてわらでしぼり(いまは水引き)、お正月の祝いで松のスエ(芯)をちよつとさして持つて行く。初めての正月だけのことが多い。(鎌原) 年始 学校の先生のところへは親しい人は年始に行く。花嫁と同じように二枚のもちをかさね、松の枝をさして持つてゆく。(鎌原) 初節供 新夫婦はそろつて実家に行く。ひしもちを水ひきでしぼつて持つて行く。(鎌原)

お歳暮 昔は特にしなかつたが、現在のほうがさかんにする。結婚した年の暮一回くらいはサケ一本くらい持つてゆく。(鎌原)

嫁が里帰りに持つて行くもの

正月二日 餅 半紙より大きく切つた餅を二枚のしをかけて持つてゆく。福りにも餅をもたせて福した。舞の場合は酒を持つてゆく。

三月節供 ヒシ餅 舞は酒

五月節供 赤飯 舞は酒

盆 ポタモチ、または赤飯
八朔 赤飯(門貝)

二、家族生活

(一) 家族間の民俗

家族間称呼

ウラ 自分。ウラガ畑・ウラガ軒下

ワレ お前、第二人称目下。またオエ

オメエ 第二人称目上

キサマ 全 同輩

ヤツ・アレ 第三人称、彼。

子が親に対して

父 オトヤン、チャン、オトツツアン

母 オツカア

親が子に対して ワレ

兄が弟に対して ワレ

弟が兄(姉)に対して アニイ(アネエ)

アニイ(アネエ)は同輩以上の村人に対しても使う。

オンジイ、オンバア、祖父母だけでなく、村人の老年人に対してすべてこのいい方をする。

長兄 デツケエニイ

中兄(姉) ナカツツエー

末っ子 ネコノシッポ

不義の仲の子 テテナシ子(大笹、田代)

兄弟 長男はアトツギ、ソウリョウとして大事に育て、二男以下は、

ヒヤメシヤロウ、ネコノシッポと言つて育てるときからそまつにされ、



インキョヤ (三原) (撮影井田安雄)

長男と区別されていた。(西窪)
三夫婦 嫁をもらって三代そろった夫婦をいい、嫁、養子の場合に入らない。

病気のとき、三夫婦の家に行ってごはんをもらって食べると直るといふ。(西窪)

身上げたし 家によっては、嫁がくるとすぐに身上をゆずった。またとついで二十年ほど身上をわたしてもらえない嫁もいた。ちよつと身上のあるものは、なかなか身上をわたさなかつた。(三原)

シンシヨウを譲るときは姑ばあさんが、「蔵の鍵を渡す」という。(西窪)

マケ、ワカレ、インキョ 親戚うちをマケといい、分家はワカレという。インキョは現在六軒、インキョは老後を安楽に暮らすのが目的なので、別に新築することはめつたにない。孫をつれて一戸を構えることもめつたにない。

(門貝)

非常に少いが昔はあつた。インキョメンということばもある。(田代)

隠居 子供ができあがってから、ジイさんバアさんで出る。子供はついて行かない。

隠居で出ると大変だから仲々出られない。インキョメンは実際は本家で耕作してやる。末子が残っていれば、それにくれる。(今井)

六十才を過ぎると、むこう

へ行って火をもしつけるといってインキョメンをもって、はなれなどで別生活を始める。みそ、しょうゆとか、大体子供に世話をしてもらつての生活で、隠居するとテンマはなくなる。

しかし、村にとつては戸数の多いほうが一戸の負担が軽くなるので隠居も一戸に数えられた。黒岩勘十郎家(幸次の隠居)、黒岩定八家(治作の隠居)の二軒はあきないをしていて比較的経済力もあつたので独立隠居として一軒に数えられていた。

死んだとき葬式は本家で出す。

隠居に出るとき、位牌は持って行かない。

村役をとり上げたとき、隠居させたこともある。(西窪)

インキョシユ 裕福な人で家族と意見が合わないで隠居するのがあつた。こうした方が若い者も気楽だからという。

隠居するときの形は一定でなく、もとの家に長男と一緒に住み、後者の場合は別居する。隠居したらあとは委せる。

意見が合わないで隠居した場合は、耕作は別々だが、何れも仏壇はそのまま、盆、正月も本家でやる。

隠居が死亡したとき、裕福な場合は本家から葬式を出す。また隠居の生活状態がよくないければ隠居から出すが、そうでない場合は長男の本家から出す。(田代)

新宅 嫁を買ってから出す。財産は三分の一位を分けてやる。田を二反歩、畑を五、六反歩と山で一町歩もわけてもらえればいい。本家との間は近いきあいになる。

今は体一貫ではわ出出し方がいいし、わけてやる土地もなくなつたから、新宅はない。(今井)

結婚後二、三年本家で手伝つて家と畑二枚(少し)も分けてもらつてシシタクに出た。借金も案分にしよせられた。

シシタクでも四人分の位牌はつきものなので、仏壇は初めから作る。



屋敷稲荷社（田代）（撮影都九十九一）

親が死んでいるときは、親の位牌をしょって出る。

長男の嫁と折合が悪く、親も二、三男がシンタクに出るとき出て出ることもあったが、この場合は隠居とはいわない。（西窪）

火ツケの先祖 新しい家で火をともしてくれた人のことを火ツケノ先祖という。あとのりつことを「あすこんちのケブを出す人」といういい方もある。（鎌原）

社（家）

稲荷様 古い家にはある

が分家にはない。むしろある家の方が少ない。初午は特にしない。（田代）

屋敷神として敷地内にお稲荷様を祭った。分家にはない。（西窪）
屋敷神はある家とない家がある。新しく屋敷神を作った家が神主を頼んでおがんでもちろ。また、お正月にはしめなわをかざる。（大前）

ある家とない家がある。子どもの頃、いわしを買って供え、大前の神主におがんでもちろった記憶がある。四月五日だったと思う。秋にはやらなかった。（千俣）

家族の私財 一定の仕事をもっている以外に、余分にする仕事のことをキューデ仕事という。たとえば、百姓仕事をしていながら、隣りにやとわれて仕事に行っていくらかの報酬（副収入）を得るときにいう。予期しない収入をえたときのことばである。

また、キューデにもうけるということがある。これは内緒に余分にも

うけることで、たとえば息子が、「これはおやじにいわないでキューデにもうけたから、かねはオヤジにやらなくともいい」という。

ホマチということばもある。これもキューデと似たようなことばである。ただ、これは比較的新しいことばで、「ホマチにとつてもうける」というようないい方をする。キューデということばのほうがむかしからのことばで、ホマチはわかいことばである。（三原）

ヘソクリ 女衆がだれにも知らせないでこづかいをかくしてためたもの。たとえよそから金をかりるほど自分の家が困っていても、この金はださなかつた。これをヘソクリガネをしているという。（三原）

キューデイ ヘソクリと同じ意味。ふだん、あの人はキューデイをもっているといういいかたをする。あてにしない仕事をして、ぼっくりお金が入ったときに、キューデイという。女衆があてにしない、ちよつとひろい仕事をしてお金をとつたときにいう。これは、おもにわかいものことである。（三原）

ホマチ これも、ヘソクリとかキューデイと同じ意味のことばである。今日はホマチが入つたという。このことばは現在もつかつていない。なにかおもいがけなく仕事をたのまれてはたらいいた場合に、今日はホマチが入つたから、子どもになにか買ってやろうという。これも女衆にとくに関係したことばである。

なお、自分の土地につながっているところをほりかえして（荒地などをほること）、はたけにしたような場合があるが、これはアラクという。（三原）

ホマチとは内緒の金のこと。（田代）

戦争中強制供出をきびしやられたから、田畑が一町ある所を八反と届け出て二反をホマチにした。

チューマイやハビシヨはオンナシ（女衆）のホマチにしろと言ふ。（袋倉）

余分にもらつたものがホマチになる。百円の日当のところ百二十円も

らった時に二十円がホマチになる。

ホマチもソクリも主人が知らないもので腕で作ったものだから、そう悪いものでもない。

ソクリはごまかしてためたもの。値切って買って余ったものをソクリにする。(今井)

(二) 同族間の民俗

イチマケ、イチマケというのは、苗字が同じで、血のつながりがあり、親戚の間柄のものをいう。

イチマケとか、マケというのは、善悪につけていう。また、大マケとか、小マケといういいかたをすることもある。

芦生田では、下谷一族の場合に、下谷マケといういいかたをしている。ここでは、イッケというこはいわない。(芦生田)

ここには一族でまつている神仏はとくにない。

家で神仏をまつるのは、とくに信心家とか災難にあつて、うらない師にみてもらつて神様や仏様を屋敷内にまつるような場合である。ここでは、家の氏神をもっている家はすくない。古い家でも、家の氏神をまつっていない家もある。家の氏神は、稲荷様で、おまつりは初午の日である。(芦生田)

竹瀝マケと竹瀝稲荷 竹瀝マケは三原に十軒、大体一カ所にまとまつて住んでいる。もとは一軒で、そこから分家が出てふえてきたものという。先祖の名前は不明である。本家は真三さんのところといわれている。紋所はみな同じで、丸に根笹である。正月三日の家の例は、米のめしをにちはいけないという。もちを食べている。

竹瀝稲荷はむかしは先祖様の屋敷稲荷であつたといわれている。毎年おまつりは二月と十一月の午の日、いっ午の日をみておまつりをしてい。世話人をたてて、交代で宿をしておまつりをしてい。(三原) マケ 親類のことをマケとまとめていう。



熊川マケの墓地(袋倉)(撮影丑木幸男)

山崎(笹りんどう)と佐藤(下り藤)の二つに大きく分けられる。

大塚は越後の方から先祖が来たらしい。

横沢は大前が本元で分かれた。(鎌原)

オクンチ カジヤママケでは熊川肇家(屋号カジヤマ)で熊川姓が集まつてやる。マメイリと言う。お日待ちをする。

唐沢・西窪・黒岩姓は全部集まつて、宿はまわり番でスエのタンチにする。(今井)

マメイリ カジヤママケの人は子供でも何でもみんなカジ

ヤに集まりマメイリをした。お稲荷さんにごんや豆の夕食を運せて、その後、お茶を飲んだり話したりして遊んだ。夕食後、集まつた。

御馳走は、豆に砂糖をつけていったもの。十一月頃だと思ふ。

オクンチは各家で別々に、赤飯をたいて祝つた。

又、各家では十三夜にマメイリをした。(今井)

マケの伝承

関 長野県小泉郡私(かのう)村(現東部町)から来たといひ、今でも行つたり来たりにしている。七軒、鶴の丸の家紋。氏神、禁忌なし。

宮崎 家紋は矢の羽。この宮崎を称する家のうち六軒は、マケとしては戸部に入っている。もと戸部であつたが、夫婦養子として宮崎姓となつたものである。

戸部 先祖は長野県戸部村より来て土着した。もと村上家の家臣だったのが、川中島の戦に敗れてこちらに来た。村上四天王の一人。従僕を二人つれて来たが、これ等の子孫も戸部を名のっている。家紋は丸に橋。

松本 先祖は信州松本から武田に追われて来た。兄弟のうち一人は信州根津の寺に入った。こちらに来たのは権太夫で、子孫は権兵衛を襲名、シバキリ権兵衛と言っている。権太夫は刀と槍を持って来たが、それは燃してしまった。兄弟のうちもう一人を藤兵衛といい、二人とも家来を一人ずつつけて来た。これ等の子孫は全部では百軒をこしてゐる。

黒岩 家紋は剣菱。

甘楽郡黒岩村から同志三十六人といっしょに移動して来た。先祖の没年は大阪落城の年であった。(田代)

お屋敷 西窪家の常紋は扇と左マンジ。



(西窪)

信 仰

一、神 社・神

大前諏訪神社 大前の鎮守諏訪神社の祭神は建御名方神。神主は長野原町林の浦野神主が来る。神社総代三人のうち一人が世話人となる。(もとは三人いた。)公人財団で、財産は森の木を売った金が債券になっている。祭りの費用はおさい銭でまかなう。

祭日は春祭りが八十八夜、秋祭りが二百十夜となっている。祭りは各區から出ている祭典委員が中心となって(消防分団長が祭典団長となる)進める。春祭りには必ず獅子舞をする。獅子舞は前の夜の宵祭りから村を流して廻る。翌日の午後からも村まわりをする。それを迎える村人は各戸残らず現金をハナ(祝儀)としてのし袋に包んで供える。これは後で披露される。村まわりの行列は、はじめ神社のまわりを廻り、それから村内へ出かける。

村まわりをする行列は次の通りである。まず荷車の上に屋台を乗せたものが先頭に行く。屋台の中には御神体が納まっている。また荷車には太鼓二つと、叩く人。また笛吹きも乗っている。これを小学生が引く。その後に獅子がつく。獅子は一人で持ち、他の二人はホロを持つ。そのあとに、女の人の手踊りがつづく。女の人はいくらか化粧をするが衣服は別にしまっていない。男は揃いの浴衣を着る。笛吹きは一人だがすぐ疲れてしまふので幾人もいなければならない。今では笛吹きの後継ぎがないので困っている。

祭りが済むと一ぱい飲む。慰労会みたいなものがこれ、ドージョー

「ライ」といっている。

獅子は大正四年に買ったもの。その前は役員だけが「やりきたり」のお祭りをしていた。獅子舞の練習には二十日間もかかった。練習場がまるで道場みたいになった。「だから祭りの後の慰労会を「道場払い」というのかも知れない。」

秋祭りは百姓の祭りといって、神社に、御神酒を供える位で、これという行事はやらない。(大前)

諏訪神社の獅子・御神体 信州諏訪から移す時に、大前に先に移してから、大笹に移ったという。大前の諏訪神社は女ジシでおとなしく、大笹は男ジシで荒っぽい。諏訪様の御神体は蛇だという。信州諏訪にオタレという蛇の通った跡があるとか、蛇の形をした石風呂もあるとかいう。

(大前)

ノボリ 諏訪神社のノボリは、秋はススキ、春はアオキを付けた。秋にうまくススキの穂が出ると豊年といわれた。(大前)

千俣諏訪神社 千俣の諏訪神社は徳宮諏訪神社といっている。以前は「徳の宮」といった。昔、源頼朝が三原へ狩りに来てこの地を通りかかった時、ここで蹴毬をして遊んだので「毬宮」と呼ぶことになったという伝説が村に伝わっている。享保十二年の饑札があり、もとホコラだったのを改築したという。円通殿と同じ年に造ったものでワニ口は奈良から宮大工が持ってきたという。

祭日は四月五日(春祭り) 九月五日(夏祭り) 十二月五日(秋祭り)となっていた。夏祭りは「ヨキ祭り」とも呼ばれていたが今はやっていない。戦前は役場から神饌幣帛料が出て、坂上村の渡辺民部宮司が来

た。

春祭りの前夜は、竹祭りといって、神様に御神酒を上げてから、みんなも飲んだ。

この村には神主がいないので、他から頼んで来ておがんでもらう。神社ではお札を作ったり、餅をついたりして毎戸に配った。また「オミゴク」といって菓子も配った。昔は菓子でなく、麦でこしらえたパンであった。

祭りの費用は祭典費といって、各戸から頭割り（平等）に集めた。しかし神主を頼む費用は以前、古木を売ったので、その金でまかなえる。祭りは各区から選ばれた「祭典係」が中心になって進められる。

以前、神楽もやったことがある。「村社」になった時やったのを覚えている。

地芝居の舞台は、昔、大島居の前であった。その後、神社から少しはなれた道の上に移転した。春、一回位、土地の人が芝居をやったと思う。明治の半ば頃までやっていたと思うがはっきり記憶にない。衣装や道具も借りものであった。今では芝居をやった人はみんな亡くなってしまった。舞台も火事になって焼けてしまい、「ぶてい屋敷」という地名だけが残っている。

祭の時は「のぼり」を立てるがその上に青木を立てた。青い木ならなんでもよかったが秋には「すき」を立てた。また秋には「お札」は配らない。神への供えものとしては、米、酒、また時のものとして人参やごぼうなど。（千俵）

上の諏訪様・下の諏訪様 芦生田には上の諏訪様と、下の諏訪様があったが、大正のはじめごろに、上の諏訪様に下の諏訪様を合併した。

以前は、九月十一日が上の諏訪様のお祭り、からい酒でおまつりをした。これは、むら全体の家内安全を祈った。

九月十二日は、下の諏訪様のお祭り、甘酒でおまつりをした。これは陽気まつりといって、五穀豊穡を祈ったものである。甘酒は各家から

コメを一合ずつぐらいあつめて麴をこしらえてつくったものである。

現在は、諏訪様のお祭りは、四月一日（よいまつり）、二日（本まつり）、九月十日（よいまつり）、十一日（本まつり）である。

諏訪神社には、日光様、神明様、稲荷様が合祀されている。合祀の年次は大正になってからのようである。この三社とも、合祀前は芦生田全体でまつっていたものである。このうち稲荷は二月の初午の日が祭日で村人がお参りに行った。（芦生田）

諏訪神社・甲賀三郎 芦生田の氏神（鎮守様）は諏訪神社である。所在地は上芦生田。天明三年（一七八三）七月の浅間山の大噴火のすぐ下のくぼ地にあったという。浅間おしりのときには、神社の石段の上のほうをわずかに残して埋められたといわれている。

祭典は、四月一日と九月十一日。

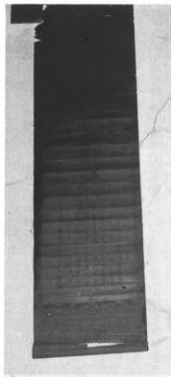
この神社は、甲賀三郎をまつたということ、年寄りから聞いているという。甲賀三郎は浦島太郎と同じようにして諏訪湖へ出て、そのために諏訪で神社にまつられたものであるという。甲賀三郎はどこかへ行ってきた人だというのが、子どもどものときに聞いたはなしなので、はっきりわからない。（芦生田）

西窪神社 大正年間に諏訪神社を始め、西窪中の神社を合併した。祭日は四月三日と九月十日。

明治十年頃の大火のときに焼け残ったナラの木がある。この木の下に伊勢講のオカリヤをつくった。（西窪）

門員の熊野神社 門員の鳴尾に熊野神社があるが、この神社は旧社格が村社。熊野三社とい、奥の院は岩屋になっている。祭日は四月九日と十月三十日である。お産の神、百姓の神として、かつてはこの近所の信仰をあつめていた。神官は鳴尾の佐藤茂家の先祖が代々つとめていた。

春の祭典のときには、五穀豊穡、秋の祭典のときには家内安全のお札を出している。また、春まつりのときに、大豆のたね（これが主、豆たねといつた）もみたねをおまいりにきた人にかした。これをかりていって



熊野大神の掛軸（門具）



熊野神社の全景（門具）

（何れも撮影中村和三部）



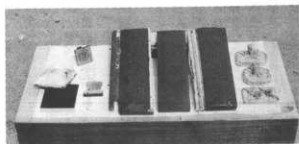
熊野神社のお札（門具）



熊野神社の本殿（門具）



熊野神社の社印（門具）



熊野神社のお札の木版など（門具）

まき、秋になってとれたら、秋まつりのときにかえた。(大豆は約一合のたねを半紙につんでかした) なかには神社の床下の土をかりていった人もあった。熊野神社はお産の神であるとともに、百姓の神であったのである。(門貝)

マメダマ オクマン様(熊野神社)のマメダマを借りてきて、種を時くと虫がくわない。春借りてきて、秋に借にしてかえす。

オクマンサマ(熊野神社)の祭りは、春はもとから四月九日、秋は以前は十一月三十日だったが今は十月三十日、年二回。祭りには門貝全戸にお札が配られる。もとはよそからも大勢お参りにきて、にぎやかだった。お札を受けて行くものも多かった。版木があつて、百枚のうえ作つておいた。(門貝)

大笹神社 諏訪大明神に、白山神社(村の上の山にかかつたところ)があつた。十二様、天王様などが合祀され大笹神社となつた。明治二十二年、三年の大洪水の前に合祀されたと記憶している。

大笹神社の祭りは昔は旧暦の七月二十七日であつた。今は九月十七日。御幣束(諏訪様の御神体)を神主が持ち、区長や神社の世話人などがあとについて村中をまわる。昭和の初めまで、神社の御乗馬がでた。飾りのついた馬が御幣束の前を歩く。

祭りの朝(十七日朝)の赤飯は新しいカヤの箸でたべる。それまでは山にいてもカヤの箸で弁当をたべてはならない。(大笹)

三原の神社 三原の氏神は熱田神社。大神宮様ともいう。三原の中居にある神様は、五郎大明神、天王様、天神様。

赤羽にある神様は、熱田神社、金毘羅様(これは個人でまつっている)、天神様、竹洞稲荷(竹洞マケでまつっている)。

以上の神様のうち、個人もちとマケもちの神様を除いて、明治の末に大神宮様に合祀した。(三原)

大神宮様 三原の氏神は熱田神社で、大神宮様という。祭日は八月二十七日と二十八日。この日までにアオガヤの箸をつかうといわれてい

る。それは、その日に大神宮さんが屋根替えをした。そのときに、大神宮さんにアオガヤをつくつてあげた。この日アオガヤの穂をとつてきて、おみき徳利にさして神棚にしんべた。そのカヤで家族の数だけはしをつくつて赤飯などのごちそうを食べた。この日以後はカヤを刈つてもよいとされた。

なお、この辺では、山仕事に行つて、弁当の箸はカヤでつくつた。また、むかしはカヤぶきの屋根が多かつた。(三原)

五郎大明神 三原の中居にまつられている。祭神は鎌倉権五郎。としよりは五郎明神としてうやまつていた。由来は不明である。(三原)

今井の諏訪神社 明治四十三年三月二十六日に、現在の諏訪神社に遷宮した時の各神社と祭神は

白山神社……日武之命
熊野神社……伊弉那伎之命、伊弉那美之命
飯綱神社……保食之命、太田之命、大宮姫之命

十二神社……大山祇之命
であつた。(今井)

今井村 今宮白山権現台座銘
寄進社領之事右所ハ落□漏不動□今宮白山権現仁永代寄進申所也。子々孫々仁於不可有以疑若ハき申□□以権現之□□□□可候、仍為後日状如件応仁三年己丑十一月吉日大旦那遊野朝臣景幸願主別当法師

心秀□郷二所やしき□□申所也(今井)

吾妻山神社 四阿山の山頂は信州側では四阿山神社、上州側では吾妻山神社という。田代では六月十五日が例祭で、神主を頼んで氏子總代等

が登つた。途中に道しるべの石宮がある。(田代)

鎌原神社 村の神仏は浅間押しの前は観音さんだけで部落の方を向いていたという。

神社合併前は村を中心として東北に八幡さま、西北に飯縄さま、東南には大日さん、というように方向をきめて祀つたという。明治時代に合

併して諏訪神社を鎌原神社とよぶようになった。境内に公民館を建てたが、社地の関係から「氏子会館」という名称になっている。もとの建物は保育園として利用している。(鎌原)

飯縄さん、蚤の神さまといわれ、神社合併前は社殿をもっていて大祭りをしていた。お札を出し、他村からも飯縄講という講があつて参拜に来た。諏訪神社よりも祭りが大きくなりすぎたが、合併のころからさびれてきた。オコンコンサンを一つ借してゆき、翌年二つにして返した。

現在は諏訪神社(鎌原神社)の裏手に合祀され、オコンコンサンといくつかの絵馬が上げられている。(鎌原)

竹刈稲荷、この稲荷様は、竹刈マケの十軒でまつっている。

カイコの神様として知られている。祭日は春と秋の午の日で、いい日を選らんでおこなった。三月と、十月か十一月の午の日を祭日とした。

丙午の日は悪いといつてさけ、また年越しをしてもわるいという。

祭日には花灯笼をこしらえてあげ、盛大にまつた。おまじりには他部落の人たちもきた。

糞蚤がはじまる前に糞蚤をおねがいしていき、かいこが終るとお礼まじりにきた。まゆを糸で珠数つなぎにしてあげた。

不時の災難を救ってくれるともいわれ、おねがいにきて、稲荷様のおすがたをかりていった。ねがいがかなうと、おすがたをおかえしにきた。

おまつりの世話は、マケの中でまわり番でした。よいまつりとおまつり(本まつり)があり、よいまつり(お日持)のときには、世話人の家へあつまつていろいろおちそうを食べたが、御神酒は一升ときまつていた。このときには、おまつりの寄付をつのった。

おまつりのときには金をあつめて、稲荷様のところへマケの人がよつて、おまつりをした。春のおまつりのときには神主(もとは法印さん、現在は三原神社の神主さん)をたのんでいる)をたのんで祈禱をしてもらい、きりはぎをかえてもらった。おまつりのときには、御神酒の量は

いくらでもよかつた。この日は夕はんも出た。

秋のおまつりも春と同じようにするが、このときは、神主はたのまな

い。(三原)

稲荷 カジヤマケ(熊川姓の一族。熊川肇氏の屋号をカジヤマという)は、カジヤマでやる。秋10月頃やった。屋敷神様のお祭りで、肇さんの家で飯を進せてから、お日待をした。今は殆どしない。(今井)

オクマンサン 門貝の熊野神社は、糞蚤の神様で、小鎌(桑刈り鎌)を一つ借りて来て、二つにして返す。(三原)

熊野神社の境内に、マルシテン(またはテント様)と呼ばれている蚤神様がある。蚤が当るとまゆと髪の毛を供える。(門貝)

門貝鳴尾の熊野神社の境内に直径三十糎ほどの丸石(自然石)がまつつてある。これは同所の佐藤茂さんの曾祖父の光隆という人が万座川にあったこの石を、寺子屋の筆子にかつがせてここにまつり、かいこ神としたものという。むらの人たちは、お正月のときにここにおしめをあげる。また、熊野神社のおまつりのときとか、かいこを上置きさせてからおまじりにくる。かいこがあつたときには、まゆを糸でおしてもつて



カイコ神(門貝) (撮影中村和三郎)

きてお供えした。(門貝)

与喜屋の荒神さん 蚕の神さまで、四月または五月の十五日にお参りに行く。ネコ石さんというので神社の石を借りて来てネズミ除けとして、翌年倍にして返す。その石は家から持っていていけというので軒下あたりから石を持って行くことになっている。(鎌原)

長野原の荒(アラ) 神様は、女の神、エロ神様で、女の病気に効験があり、石を借りてきて、二つにして返した。(大前)

長野原町与喜屋の猫石がカイコ神で、五月十五日の祭りにはおまいりした。つい最近まで神楽が舞われたり、養蚕道具の店が出てにぎやかだった。コバガイ道具やボテ、ショイカゴのほか、みの、すげ笠、わらじ、ぞうり、こっぱつかなどもかかってきた。(門貝)



十二さん(門貝) (撮影中村和三郎)

神社から石をひとつ借りてくる。そして、この次、お参りに行く時には借りて来た石と、もうひとつ、自分で石をさがして二つ返した。すべすべしたよい石をさがして持って行った。「アラガミ様」は女の神様だという。(大前)

信州米子の不動様 夏 蚕を掃き立てる前、信州米子の不動様にお参りに行った。ハゲンの頃(七月二日頃)だったと想う。受けて来たお札は神棚に飾っておいた。

このお参りに行く前、おてんま仕事で「道刈り」をやった。道の草や笹、木の枝などを払って通りよいようにした。(千俣)

十二様 熊野神社入口の磨崖碑の岩のそばに、十二さんだといっている二体の石像がある。もと門貝字東平にあったが、合祀のさいに移されたものという。(門貝)

戸倉さん 信州戸倉の馬頭観音さんは馬の神さまで、交通の神さまになっている。四月十七日が祭りである。(鎌原)

秋葉さん 寺山というところに秋葉さんがあり、そこには石の土台——石段らしいのがいままもある。お日待ちをしたという。(鎌原)

碓氷峠の熊野さん 講があって代参に行き一泊して来る。お札と虫除けのお札とをうけて来て配る。

毎年熊野神社から托鉢に来る。その時は一戸大豆一升を出した。来るのと区長がオテンマを一人あてて大豆集めの手伝いをさせた。戦時中は大豆の値がよくて相当の収入になったという。

現在は羽根尾の人が委託されてお札配りに来るのでいくらか(百円ほど)出す。(鎌原)

神道修成派今井支局 今井に支局があり、昭和十年頃まで続けられた。本尊様は不動様などがあつた。そのある場所をゴマ堂殿といひ現存するがこまかいことはわからない。(今井)

西窪神社 簡易神事 一月十四日のツツゲーは、毎戸からカヌを作るための米を一合あて出した。四弁ださのかまでにした。神社のチュウヤでする。櫛、栗、横の木で三角をつくり、カマダキした。子供にツツゲーをくれた。

昭和四十七年度一月十四日
西窪神社

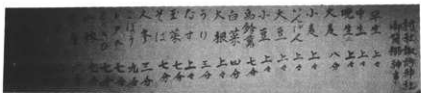
米 中
大麦 上
小麦 上

白	四分
大	上々
根	上々
う	五分
り	上々
な	七分
す	七分
玉	七分
菜	七分
そ	三分
ば	三分
人	九分
参	九分
ご	七分
ほう	七分
レ	七分
タ	七分
ス	七分
と	七分
う	七分
き	七分
び	七分
山	七分
稼	七分
畜	一分
産	一分
雨	四分
風	四分
雪	上々
今	上々
年	上々

昭和四十七年正月十七日(干侯)

大前諏訪神社簡粥神事 大前では諏訪神社で、正月十四日の夜簡粥をする。十四日の朝、家々から米と燃し木を集めて、神社の庭に俵を渡して、大鍋を吊るして準備をする。大鍋の中に米を上三升、下二升計五升の米を集めて入れ、ヨシを二十センチぐらいに切り揃え籠に編んだものの中に入れて、ご飯をたく。オテンマに出た人が火を燃や

す。紙に米・粟などと作物の名を書いて置き、米が煮えると、中のヨシを取り出す。ヨシを一本ずつ順にかみそりで切りさいて、ヨシの筒の中に入った粥の量で、その年の作物の吉凶を判断する。村に神主はいないが、



御簡粥神事(干侯) 諏訪神社拝殿内に貼り出す。(撮影金子緯一郎)



簡ガユ(大前) 諏訪神社拝殿内に貼り出す(撮影金子緯一郎)

とカゼを引かないというので、家中で食べる。取ってきて、長さを六、七寸に切り揃え、四十本も用意した。(最近は少ない。)

昭和四十七年度農産物豊凶判断

一、米	上々
一、雑穀	上々
一、蔬菜	上々
一、果菜	上々
一、畜産	上々
一、黄産	上
一、林産	かいさん(皆無)
一、花木	上
一、金融	かいさん
一、世の中	以上(大前)

長老達が協議して判断を下す。米粒が五粒以上入っている。上とかいうことを、最初さいいたヨシを見て基準を決める。粥の水気があるかないかによって、入る粒の量が違う。結果は紙に書いて、社殿の中に貼って置くが、作物の種類から、金融や世の中まである。粥はムスビ(握り飯)にし、村中の人々のオダフウとして、参詣人にくれる。食べる。ヨシは川辺から、区長が中空に払ったもので、以前は

吾妻山神社簡弔神事 吾妻山神社で区長が世話をして行なう。神職は立ち合わない。一月十四日氏がオサゴを持ってお参りに来るので、それをかき集めて社務所において粥を煮る。その中に、長さ十センチメートル位のヨシをすだれに編んだものを入れ、そのヨシの筒に入った米粒の具合によって、今年の作がら等を占うのである。誰が判定するというでもないが、年長のなれた人が行う。ちなみに、今年の結果が、同神社社務所に掲示してあったので、それを次に掲げてみると次の通り。

昭和四十七年一月十四日

吾妻山神社簡かゆ

- 一、夕 顔 大上々
- 一、た で むるい大上々
- 一、なんばん むるい大上々
- 一、ごぼう むるい大上々
- 一、南瓜 むるい大上々
- 一、かぶ 大上々
- 一、大根 大上々
- 一、ねぎ 上
- 一、大豆 上
- 一、小豆 大上々
- 一、大角豆 大上々
- 一、大麦 むるい大上々
- 一、小麦 むるい大上々
- 一、早そば 大上々
- 一、秋そば 大上々
- 一、馬鈴薯 八分
- 一、早生白才(葉) 上々
- 一、中生白才 上々
- 一、晚生白才 むるい上々

- 一、風 むるい上々
- 一、雨 むるい上々
- 一、春 霜 むるい大上々
- 一、相 場 むるい大上々
- 一、世の中 むるい大上々
- 一、田代景氣 むるい大上々
- 一、玉ナ(葉)苗 むるい大上々
- 一、早生玉ナ 大上々
- 一、中生玉ナ なるい大上々
- 一、晚生玉ナ 大上々
- 一、早生レタス 大上々
- 一、中生レタス 大上々
- 一、晚生レタス 上
- 一、晚 霜 上

昭和四十七年一月十四日

右目出度申納候也 (田代)

鎌原神社簡弔神事 鎌原神社では筒ガユを一月十四日の夜やる。もとは村中の各戸からチャツケ茶わん(飯ちゃわん)にひとつずつの米を集め、五升の鍋に二つもカユを煮た。この中にヨシを節と節の間だけ切った筒にしたものをひもで編んでカユに入れて煮てしまう。このヨシの中に入った米粒の数によってその年の作物の豊凶をうらなうので、煮あがるとヨシを割ってたしかめた。占いは神社総代の人たちがやるもので、結果は毎戸にくぼって知らせた。

筒ガユの米は、以前は村中から米を集めたが、いまは初参りのオサゴを煮るだけでも間に合う。筒ガユで煮たカユは神社へお参りしたあとで鍋からもらってきて道祖神に上げてからみんなで食べた。最近ではカユのもらいてがなくなつて困るが、ちょうどドウロク神の子どもが集まつているので頼んで食べてもらう。(鎌原)

芦生田諏訪神社簡潔神事 簡潔の行事は、大正の半ばごろまでは行なっていた。一年の陽気の判断をするための行事で、一月十四日に諏訪神社でおこなった。

各家でおさこ(約一合のコム)を神社にあげた。そのコムでおかゆを煮た。おかゆは大鍋でにた。そのおかゆをにるときに、よしを五寸から三寸ぐらいの長さで切つかみよりをつかっただれ編みにしたものをなべの中に入れて、一緒に煮る。おかゆができあがると、そのよしをあんだのをひきあげる。よしの中のコムの入りぐあい、まずその年の陽気の判断をし、つぎに作物の豊凶の判断をする。紙に、一番夕顔、二番何々、順に作物の名前が書いてあって、コム、ムギ、アワ、ヒユ、大豆、人参、菜、ゴボウ、大豆、小豆、ナス、うりなど二十種類ほどの作物について、その豊凶を判断するのである。その結果は、紙に書いてはります。(芦生田)

正月十四日神社に村人が集ってきて筒がゆの占いをした。占いは五穀などの作柄占いのほか、今年の金の入る方向までした。占いかたは、かゆのなかにヨシの短かくきった株を入れて、その中への浸透具合により判断した。(大笹)

大前、干保の諏訪神社拜殿の中でも、右と同様なつつがゆ神事が正月十四日の夜、行なわれている。(大前、干保)

正月十四日夜、米をひと握りでかゆを作る。この米は決してとがない。かゆの煮えている鍋の中に、よしを切って十二本をわらで、すだれ状に編んで、これを立てて、このよしの中に入る米の粒の入り具合で米が八分作とか、妻が六分作と大正初期頃まで占った。(今井)

二、仏教関係

延命寺本尊 延命寺の本尊は浅間焼けで流されたものが、岩島の大杉まで流れついたもの。これを仏具屋に買われて行って柏崎のどこかの寺

にあるという。オツモリだけは新しくつくってあるというが本当のことはわからない。(鎌原)

寛永寺別院 上野寛永寺の別院としてつくられ、村の年老りを招いて和讃を上げてこれをテープにとり、しばらくの間別院に流していたという。(鎌原)

観音堂と三堂川 干保には享保年間(今から二二九年前)に建てられたという観音堂がある。円通殿と呼ばれている。アタタラという大木、一本で建造したという。この大木を切るときには、長さ三丈のノコギリを新潟から特別にこしらえてもらい使ったという。(但し、縁側は別で、後年増設したもの)。釈迦の日、春秋の彼岸には今でも念仏を唱える。

また、近くに浄土堂と呼ばれる葬儀を営む堂がある。小高い、日当りのよい所にあり、頂上から斜面にかけて墓地になっている。墓地には六地藏がある。明るく、安らかな顔をしている六地藏である。また、近くに、昔はお寺のお堂があったという。観音堂、浄土堂、そしてお寺の堂と、お堂が三つあったので、この近くを流れる川を「三堂川」と名づけたという。(干保)

鎌原観音堂 観音堂は小宿の常林寺の管理になっているというが、もとは部落のもので現在でも実際面では部落でやっている。堂の管理には、老人の中から世話人が出てやっている。(鎌原)

観音様 春の彼岸の入り口から中日までの三日間、三夜とて三日間念仏をした。終戦後は春の彼岸中の七日間、観音様のお堂で念仏をしている。(芦生田)

観音堂 三原三十四番霊場御詠歌、第十番門貝観音堂、「こころをばまろくもまろくもいのるべし、かどがひなればさわりあるべし」。この観音堂は、もと観音坂をのぼったところの観音さん屋敷にあったが、洪水で流され、現在のところに移した。(門貝)

大日如来 牛を飼っている人たちが参拜する。おみきを上げてお祭りをした。(鎌原)

馬頭観音堂 四月(新暦)十九日は無量院の大船若の行事で、滝の頭
の馬頭観音のお祭りでもあった。馬を引いて皆お参りにいったものだ。
店がでてにぎやかであった。(大笹)

馬頭尊 大笹には間屋があり多くの馬方もいた。その交通業関係者の
建てたものであろう無量院入口の両側に多くの馬頭尊の石碑が並んでい
る。南側は文字の馬頭様、北側は馬を頭頂にいたいた馬頭観世音の石
像が十基ほどならんでいる。文字、像、何れも江戸の中期以降のもので、
小さな石造物であるが数の多いのは、多くの関係者がいたことを物語る
ものであろう。(大笹)



無量院墓地に並ぶ馬頭観音10基。反対側には文字の
馬頭尊碑が並ぶ。(大笹) (撮影近藤義雄)

馬頭観音の祭り サシマワシ程度の祭りで上、下の祭りは別々にした。
大前へ行く道路工事をしたときに土の中から馬をそっくり北向きにして

埋め、その上に馬頭観
音が建てられていたの
を掘り出したことがあ
った。

これは観音堂に持つ
て来てまつてある。
祭りには男衆が集ま
って飲んだ。(鎌原)

弁天様 山際のところ
に本池があり(別にお
釜地あり)そこに弁
天が祀つてある。某氏
の何代前の先祖、ある
寒い雪の日、この池の
ほとりに行くと、お玉
という子守りの姿が見
えた。そこで「お玉何

してる、遅くなるから早く帰れ。」と声をかけたら、パシャンと池にとび
こんでしまった。これは弁天様だったということ、その先祖はハンギ
リという桶で石を運んで池中に弁天様を祀つたという。

この池はかつては約二反歩あって、大蔵省で管理していた。それを某
氏が払い下げてもらった。鯉・鮒・えびなどがたくさんいた。松代藩の
家老から、黒岩長左衛門あてに、その池のモク(えび)を生きたまま松
代に届けよという手紙が今に残っている。

六月十五日はこの池のイケニゴシといって右の鯉・鮒・えびなどが自
由にとれた。しかしこの池も次第に周囲の土がくずれて狭くなってし
まった。(大笹)



弁天淵、川は万座川(門具) (撮影中村和二郎)

石宮があり、小さい祭りがあつた。水神さんで用水の上の方にあり、

サシマワシで一升分く
らいの寄附が集まり、
これに区長が一升くら
い足してお祭りをし
た。(鎌原)

諏訪神宮は下り大門
になっていて、道から
下ると、「音無し川」が
流れている。そこに弁
天様が祭られている。
その手洗い場で、手
を洗い口をすすいでお
参りした。弁天様の小
石を借りて行って、イ
ボをなでて、治ると2
倍にして返すので、小
石が積んである。



大笹の一乗院の墓（無銘）
（撮影近藤義雄）



熊野神社の磨崖碑（門貝）
（撮影中村和三部）

石燈籠銘「奉納弁財天燈 享和三亥十月吉日」（千保）

弁天測 門貝字鳴尾より約二百米門貝本村寄りの万座川岸に弁天測があり、もと小さな木造りの弁天様が祭ってあったが、明治四十三年の大嵐の洪水で流失してしまった。現在の岩の上の石造りの弁天様は、山口喜代吉氏が大正三年に建てたものである。（門貝）

一乗院阿闍梨の墓 新田の沓掛道西側に古い五輪塔がある。形式からすると室町初期の整った五輪塔で、無銘であるが、大正のはじめころ「一乗院阿闍梨大法」と書いた塔婆をたてて六百回忌の供養したことがある。黒岩氏の先祖の墓などというが、修験者の墓であろうか。（大笹）磨崖碑 門貝字鳴尾の熊野神社入口の岩に梵字が刻まれている。この岩の手前に道祖神と十二さんの石像がある。（門貝）

寺 檀家総代が各大字に一人ずつおり、護寺会長が一人いる。春回り、秋回りには寺から回ってくる。（大前）

注・「仏教関係」については次の「講」の中に分類され入っているものが多い。
例「念仏講」等。

三、講

（一）村内の講

天神講 毎年一月二十五日に男の子どもたちがあつまって天神講をした。宿はまわり番で、部屋のある家でした。米を煮わんに一杯、お金を若干（むかしのことで、五銭か十銭）もちよって、あとは宿の家で世話をし、こちそうをつくらせて、おまつりした。天神さまをかざって、「天満天神宮」と半紙に書いて、勉強ができるようにお願いをした。宿では室内遊戯、腕相撲などをしてあそんだ。むらの組ごとにあつまって天神講をした。

女の子はお節供のときにあつまってお祝いをした。（養生田）

旧の二月二十五日だった。二十四日には長さ三間ほどのモミの木の枝を切り、それを組み立てて小屋を作る。中に妻わらを敷いて、子どもが

おこもりをした。子どもたちは字が上手になるといって「奉納天満大目
在天神宮」などと書いて持って行った。祭りが済むと小屋を取りはずし
燃やしてしまう。(干俵)

しょうゆ飯をつくる。(門具)

初天神を二月二十五日にやる。学校へ出ている男の子が、もよりのと
ころで集まってやる。半紙半分にしたのを長くはりあわせて紙に「奉納
天満天神宮」と書いた旗をもち、短ざく―色紙を七枚の短ざくのように
にしたものに「奉納天満天神宮」と書いたものを梅の枝につけて神社に
参拝した。天神さんは現在足鎌原神社に合祀してある。

子どもたちは米一升くらいずつ持って行くと宿になった家で必要なだ
けすくすつとった。(茶わんで二つというところもある。)他にごほうな
どのやさいを持ち寄り、会費として二銭とか五銭を集めて、ショウユメ
シ、五目めしなどにトーフ汁、ヒタシ豆にタタアンくらいで会食した。
たださわいでは食っていたので一回に六はいとか八はいくらい食べたの
が話の種になった。昼めしから夜までやっていた。(鎌原)

天神講は二月二十五日と十二月二十五日にやる。会費と米を持ちよっ
て、天神様のオヒナ様を出して飯を供える。(今井)

子どもの行事として、毎月二十五日におこなった。米をもちよって、
気のあったものどうしで、宿をきめて集って食い講をした。夕飯を食べ
て帰る、泊らなかつた。

あつまって、習字をした。競争で「奉納天満宮」と半紙に書いて、神
社へもつていってあげた。現在も、この行事を続けているが、字は書か
ないようである。(芦生田)

秋葉さん 毎月十三日がお日持ちにきまつており組があり、上は二十
人くらい、下は十人くらいの二組あって、宿もきまつていた。宿はまわ
り番で、みんなて寄って食事をした。(鎌原)

十九日のお日待ち 十九日のオヒマチは毎月十九日(旧)にした。今
では女衆がするが、昔は男衆がして、女はけがれてるので入れなかつ

た。向う三軒両隣と近い親類が寄った。日の神さんの掛軸があり(三峯
神社)、次の番の家が「受けるよ」というと回してやる。農繁期はかげん
した。

十九日は悪い日、ヤク日で、火事になると困るので、寝ないで火の番
をして警戒するためにこの日にやる。「話はオヒマチの晩にしろ」といっ
て、十二時過ぎて月が上がるまで、いくらしゃべってもよい。今は十九
日と決めないで、都合のよい日にしている。(大前)

日二十三夜待ち、子を生みざかりの女衆が集まる。宿はまわり番で決め
る。アズキガユを食べたり、無駄話をしている。月があがると「南無二
十三夜とく太子」とおがみ、線香、団子を供えて帰る。夜明け近くなる。
(今井)

男も女もコミ(一箱、まじりあつて)で集まってお日待ちをした。(鎌
原)

夏の忙しい時は休むが、ずいぶん昔からつずけてきている。この日に
なるとお互に話し合つて適当な家に集まる。一軒に多くて五、六人くら
い集まる。米と小豆を持ちよる。手分けで米を挽いて粉にするもの、小
豆を煮るもの等に分れて、まんじゅうを作る。作り終わった頃、ちよう度、
午前一時か二時頃になってお月様が上がる。お月様に供えるのは丸くだん
ごにして二十三箇作る。そして部屋の中でも庭でも、とにかく月の見え
る所へ供えて「オンコロコロ センダリ マトオギソワカ」と三回唱え
て手を合せて拜む。

余つた御馳走は家を持って帰つて子どもたちにも分けてやった。集ま
る人は女の人。願いごとがかなうというが、とにかく楽しい遊びごとで
ある。今でもつずけている。(大前)

むかしは、個人的に、各家庭で三夜まちをした。
女衆が、旧の二十三日の晩、お月様のあがるまで念仏をしていた。

現在は昼間、念仏の講中の人十人くらいあつまつてしている。宿は
まわり番。(芦生田)

昔は二十三夜の月が出るまで、念仏を唱えたが、戦後はすべたらになつて、昼間やつてる。夏はいそがしいから、秋になるとやる。(芦生田)

十二講 十二講は正月でなく、月々の十二日に、山仕事をする人たちが、思い思いのところで集まってする。お日待ちといつても豆を煮て食つた程度、米のめしで年取りでいどのことかしらない。(鎌原)

十二講 月の十二日に十二講と言つて山仕事の神を祭つた。モトジメのところにはヤキヨが集まって祭つた。(西窪)

山の職人衆(シヨウ)は危い仕事をしているので、毎月十二日に山の神を祭る。山師は酒を買つてやつた。木ツカブの上で、ヨキ(斧)の背を使ってウル餅を作つた。「パンダイ餅」といい、まるめたり、ミソを付けて食べたりした。今はあまり聞かない。

クラブのある所が十二講のシロの跡だった。ここにカラマツ・クリのご神木があり、神まえという停留所があった。諏訪神社に合併した。

十二講は山の神である。木びきとか炭焼きとか山師がお祭りをした。木の切る株や、板の上で餅をつく。パンダイモチといつてみそを付けて食べた。また酒も飲んだ。この日は山の木を切つてはいけなない日だった。十二さんは猿田彦だともいう。今の青少年団会館のそばが十二さんの跡である。(大前)

この日は、山の日。山の神の祭りで、山仕事をする人が安全を祈る日だといわれている。木挽きや炭焼きが、板の上や、木のかぶつの上で餅をつき、また御馳走もこしらえて、この日は仕事を休む。山仕事の道具を神様の前に持つて行つて、供えておく家もあった。(干僕)

木挽きは毎月十二日には十二講を祭つた。ウル米をふかしてキツカブの上のせ、アサキリのみねではたい餅を作つた。パンダイ餅という。甘いあんをつけて食べたが、大きいので二つとは食べられなかった。家に持ち帰つてもよい。(大笹)

毎月12日にやり、特に1月と12月とは大きくやる。炭焼き、板ひき、

木こりなどが、元締めの家でやつた。十二講は木こりの神様で、12日には木を伐つてはいけなない。もし伐つた場合は、その場所に木を持つて行つて立てておいた。(今井)

山の仕事をする人たちが冬から春にかけて十二日に集り酒を飲んでお祭りをした。現在はしいたけ栽培や原木を切る人が行なっている。(袋倉) 山仕事専門の人は、月の十二日に十二講をした。宿は元締めの家。元締めからお祝いの金が出てべつこのころで十二講をする場合もあった。

(三原)

庚申待ち 庚申の日に宿をまわり番で決めて、猿田彦さまにあかしをつけた。十二時頃まで無駄話をして過ごした。男が多い。アズキガユを食べた。(袋倉)

庚申塔が村の中にもあるが、お日待ちをした話は聞いていない。(鎌原) カノエ講は昭和二十年頃まで続けられた。二ヶ月に一回で十九日がその日であった。カノエサルの土地があり、その畑の桑を売り、代金で酒を買つて飲んだ。これは下袋倉にあった。(袋倉)

地神講 農家だけの講であつて、春と秋の社日に集まつて祭りを行なう。春は社日の晩で、秋は社日の前日の晩に集まる。宿は輪番制で、上袋倉、下袋倉の別に行なう。大正時代より講としてより農事組合の総会的になり、現在では完全に組合に加入した者を対象とした總會となつてしまつた。個人負担はなく経費は組合負担である。村中集まつても酒は二升ぐらいしか飲まない。(袋倉)

戦前までは六、七人ぐらいのグループがあり、宿はまわり番で会費と米を持ちより、酒を出し、一年中の百姓しことの話などをやつて飲食した。(鎌原)

地神さんは畑の神さまである。おまつりはとくにやらない。(三原) 地神さんは畑の神、百姓の神である。門貝には、はたけの中に地神さんの石といふのがあつて、その上にお宮がまつつてあつた。(門貝) キノエネ講 二十年前まで続けられた。一種の無尽講であつて二ヶ月

に一回行なわれた。財産は別になかったが、廻り番で無尽をとった人が宿をしてごちそうを出した。(袋倉)

まわり念仏 女衆が毎年宿をかえて念仏を唱える。宿になる家に十三仏様をまわす。六・七・八月は休む。(門貝)

お婆さんが寄つてやる。旧の十六日で、十六日念仏と言う。念仏をして、まわり番の宿でお茶を出す。人の噂などのおしやべりをして遊ぶ。

(今井)

月念仏といい、農繁期の六・七・八月を除き、毎月一回十六日に、宿をまわり番でやった。彼岸のある月は、イリクチの日、中日、アキロの日の三回で、女衆だけでやる。だいたい年寄りが多い。二十三、四人くらいで念仏を唱えた。十三仏の掛軸をかけてやる。都合で旧曆でしたり、新曆でしたりする。(袋倉)

村を上・下二つにわけて念仏講の組を作っていた。下は下だけ、上は上だけでやった。

村中念仏の時には、親類の子供達はわれ先に村中にふれまわる。一軒で必ず一厘はくれた。子供はそれで菓子をかっつた。

お念仏の晩は、村中一軒のこらす一銭ぐらいをつつんでくやみにやってきました。いつやんだともなくやんだ。(大世)

毎月十六日。家順に会場が廻ってくる。会場になった家は夜食を出す。赤飯など。キャラメルなども出す。集まる人は五十代以上の女の人だが、服装は自由で、別に決まっていけない。座敷いっぱい四十人くらい寄つてやる。

地区を上・下の二組に分けて、まわり念仏をやっている。春、秋のお彼岸の日に行く。順は、左廻りに下の方から家順に廻ってくる。道具としては、十三仏の掛軸、かね等で茶わんまでついている。(千俣)

毎月二十一日に、観音堂が集まってやる。女の人が午前中、十五、六人は集まる。この日、弘法さんの出生日ともいわれている。和讃もやる。春、三月の彼岸には堂に泊り込んで念仏を唱える。村から当番の人(て

んま方)が四、五人でて、ふとんなどを持ち寄り、中日の前の日掃除をし、準備を終えて、その晩から四晩泊り込む。堂内は二十畳ある。(大前)春の彼岸に、観音堂でおこもりをして、念仏を唱える。これは女衆が主である。

百万遍念仏をするが、堂内で輪をつくって珠数を「南無阿弥陀仏」ととなえながらまわす。この珠数にふれると風邪をひかないといわれる。

おこもりの間は、うどんとか赤飯、テンブラなどのごちそうを重箱に入れてもってきて食べる。(芦生田)

月念仏は旧の毎月十六日、まわり番でしていたが、今は農繁期は休み(十五夜の晩まで休む)にしている。お婆あさんたちが二十人くらい集まる。夜七時頃から十時頃まで、宿では「十三仏さん」の掛じをかけ、お念仏を申すうち、灯明と線香をあげておく。夜食は赤飯によこし、花インゲンや金時インゲンなどである。

葬式があると、その晩、その家に行つて月念仏を申してくる。女の仏には、お葬式の晩に出向いて行つて血の池念仏を申す。入り念

仏、野べ送りの念仏も申す。(門貝)

月念仏
不動 釈迦 文じ 普賢 弥勒 地藏 薬師 観音 勢至 阿弥陀



十三仏さんの掛軸 (門貝)
(撮影中村和三郎)

阿しゆく 大日 虚空藏 十三仏のご威光で 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀

南無阿弥陀 南無阿弥陀あぶ 南無阿弥陀仏よ 南無阿弥陀

弥陀仏よ 南無阿弥陀あんぶ 南無阿弥陀ん仏よ 南無阿弥陀

阿弥陀仏 弥陀仏阿弥陀ぶ 弥陀仏弥陀仏 阿弥陀あ

中休み

南ん阿弥陀 南ん阿弥陀 南ん阿弥陀仏 南ん阿弥陀 南ん阿弥陀 南ん

阿弥陀あ 南ん阿弥陀

南無阿弥陀 南無阿弥陀 南無阿弥陀あ仏 南無阿弥陀 南無阿弥陀仏

南無阿弥陀

南無阿弥陀 陀仏よ 南無阿弥陀

弥陀よ 南無阿弥陀 陀仏よ 南無阿弥陀

十七十体 十三仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀

大悲大悲の觀世音 南無阿弥陀ん仏 南無阿弥陀

南無阿弥陀ん仏 南無阿弥陀あ仏 南無阿弥陀

南無釈迦 お念仏 南無阿弥陀ん仏 南無阿弥陀

南無地藏大菩薩 南無阿弥陀ん仏 南無阿弥陀

地藏菩薩南無阿弥陀 地藏菩薩南無阿弥陀

ゆず念仏南無阿弥陀 ゆず念仏南無阿弥陀

ゆず念仏南無阿弥陀 ゆず念仏南無阿弥陀

地藏菩薩南無阿弥陀 地藏菩薩南無阿弥陀

かんに しくどく じょうどうせんさい じょうぶ

おじょう あんらく 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

おいと い もうしたおねぶつを こがねのおほいと つみあげて お釈

迦のお前と さしあげて おいとまもうして いじやもどれ 南無阿弥陀ん仏 南無阿弥陀ん仏

(これ以下の文句は三回くりかえし唱える)

せんじょうみょう 南無阿弥陀あ

せんじょうぶつ 南無阿弥陀あ

ぜのしよぼさつ 南無阿弥陀あ

じょうぶつ おおじょう 南無阿弥陀あ

南無阿弥陀ん仏 南無阿弥陀あ 南無阿弥陀ん仏 南無阿弥陀あ(門具)

血の池念仏

一日四日が十四日 二十一夜のおね仏を 三万三千三百三十六ほの け

つぼのおね仏 南無阿弥陀あ

南無というその二文字に 花咲いて れんやほけきよう南無阿弥陀あ

あつたの宮のれんたい だいのこはんのおね仏 南無阿弥陀あ

おく山じゃ れいこれいはに花咲いて れんやほけきよう 南無阿弥陀

あ

八万よじょうの血の池を もうしうめたよ 南無阿弥陀あ

宮川のせきの麓をとおるには がつむいちすいも 水となりそう 南無

阿弥陀あ

弥陀に對面もうすには 西から燈明輝き申せば むつじのみようぼうか

いとや もんじのさいとや 申せばおくだり やるおりや しょせつ

のおねぶつ 南無阿弥陀あ

ゆおうの麓のお地藏さまを とない申して おいとくに 四十八せきの

がれ申すよ 南無阿弥陀あ

西方淨土の さわらが池の らいほうほうせの れんげの花 つぼみつ

ひらきつ 二十らいはい まいにちほけきよう 南無阿弥陀あ(門具)

和讃 三十年程前までは、念仏や和讃を盛んに行った、毎月十六日に

行った。

集まるときは、普段着のままでもやる、十六日にやるのを十六念仏とい

い、やつたあとは、テンブラ、にももの、赤飯など食べて、いろいろな世

間話などした。まったく楽しかった。念仏のあと和讃をやつた。集るも

のは、しゅうとのいない女性、しゅうとが年老いてくると、よめが出る者もあつた、代々続いてやってきた。昭和四十五年まではやったが、今はやめてしまった。

宿になる家に廻り番をやつた、しかし嫁などといった家でやるのは、てれくさくて他の家に廻り番が行つた。石津の観音堂へ集つて行つたときもあつた、食べ物を各人もち寄つて食べ合つた。

お建前の和讃（上棟式）や火の用心和讃、結婚式の和讃（たかさこ）などもやつた。

和讃が単なる仏に対して唱えるのでなく、時代と共に人の生活の中に降りて来ていることがうかがえる。

お建まえの和讃は、昔の節であり火の用心和讃は民謡の節によくにている。その他、乃木大将などの和讃もあつた。三原に黒岩ハツさんという老人が、和讃集をもつており、その中には、明治の頃を唄つたものが多く、爆弾三勇士などもうたわれている。現在はこの本は、石津の一場ミツさんが所有している。

上棟式和讃

ひだのたくんだ、とおひゆう（棟梁）で

あべのせえで、みずびきで

土台はなんよとみてやれば

三階松の土台にて

けやきの柱は数知れず

白金のぼしてはりにあげ

おか金のぼしてさすにして

四方たる木にうつつ屋根

祭りあげたおんやかた

ひごにたたらず雨もらす

風は吹けども高らかで

奥の間ざかりをながむれば

きんから上に金びようぶ

お茶向ざかりをながむれば

一のらんまがてんしようさん

二のまたらんまがかすうさん

三のらんまが、八幡だいぼさつ

下には金銀ご仏だん

いぬいの方をながむれば

いぬいの方にはくら七つ

ぜにぐら金ぐらほうぐら

大阪くだりの玉すだれ

お庭ざかりをながむれば

三階まつを植えそろえ

しちくの竹を植えませて

ふくらすずめが巣をかけて

身をふるたびに黄金ふる

お家はますますご繁じよう

やれおめでたやおめでたや。

火の用心和讃

第一火元にご用心

タバコマッチかまど下

神や仏のみや火事も

とり戻したならなおのこと

なむや世間の皆さまよ

かさねてお願いたてまつる

国のためやら家のため。

たかさこ和讃

きみようちようらいいたかさこの
おのいの松の下風に

おちばかりとるちちとはば
朝日に照らされたけがわの

岸にはころぶ白梅の

おんみはますますご繁じよう。

やれおめでたやおめでたや

はなおさまりて実を結ぶ。(石津)

このように生活に根ざした和讃とちがい、打ちつづく災害に、うちのめされ貧しさの中で、たよるものは仏のみとなってくるこうした生活感から念仏や、和讃は生活の中により深く根ざしてくる。特に鎌原の浅間噴火和讃は、現在も行われている。しかし年ばいの女性によって行われており、沈降現象をたどっている。

浅間山噴火和讃

婦命頂礼鎌原の

月に七日の念仏を

由来くわしくたづねれば

天明三年卯の年の

四月初日になりければ

日本に名高き浅間山

にわかひ鳴動初まりて

七月二日は鳴り強く

それより日増に鳴りひびく

砂石とばす恐ろしさ

ついに八日の巳の刻に

天地も崩るるばかりにて

噴火と共に押し出し

吾妻川辺に鏡子まで

三十二ヶ村押し通し

戸数は五百三十余

人間一千三百余

一村あまたある中に

一のあわれは鎌原よ

人蕃田畑家屋迄

皆泥海の下となり

牛馬の数を数うれば

一百と六十五頭なり

人間数を数えれば

老若男女諸共に

四百七十七人が

一万億土に誘われて

夫に別れ子に別れ

あやめもわからぬ死出の旅

残りの人数九十三

悲しみさけぶあわれさよ

観音堂にと集まりて

七日七夜のその間

吞まず食わずに泣きあかす

南無や大悲の観世音

助け給えと一心に

念じ上げたる甲斐ありて

結ぶ縁もつき果てず

隣村有志の情けにて

妻なき人の妻になり

主なき人の主となり

細き煙を宮なみて

泣くなく月日を送れども

夜毎夜毎の泣き声は

魂はくこのよにとどまりて

子どもは親をしいしか

悲鳴の声の恐ろしき

毎夜毎夜のことなれば

花のお江戸のご本山

東叡山にと哀訴して

ひじりの来迎願いけり

数多の僧侶を従えて

程なく聖も着き給い

施餓鬼の炊を設ければ

残りの人々集まりて

皆諸ともに合掌し

六字の名号唱うれば

聖は珠数を爪ぐりて

ご経読誦を成し給え

念仏施餓鬼の供養にて

魂はく無明の暗も晴れ

弥陀の浄土へ導かれ

うちすのうてなに招かれて

心のはちすも開かれて

泣き声止みしも不思議なり

哀れ忘れぬそのために

今ぞ七日の念仏を

末世に伝わる供養にて

つつしみ深く唱うるべし

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

明治初年

滝沢対吉 原作

鎌原司郎 補正 (鎌原)

とむらい念仏 ともらいがあつた時にやる念仏。ここでは二度あることは二度あるといつて、次のように念仏を三回やつてしまふ。例えは十六日にまわり念仏をやつたあと、葬式があると、ともらい念仏をやるからもう二回念仏をしたことになる。二度あることは二度あるからといつて、間もなく三度目の念仏もやつてしまふ。(大前)

和 讃 お葬式の晩にする。全部終るのに一時間半位かかる。和讃をする人は、現在二十人位いる。すき、ぶすきがあるし、家事が忙がしいという人もあるが、女衆で六十五位になると和讃の組に入る。この部落の和讃は師匠がいるわけではなく、口づたえで覚える。鎌原には高崎から先生が入り、教えている。

十三仏の掛軸を祭壇の適當な所にかざつてとなえる。順序と文句は次のとおりである。

(1) 十三仏

不動明王、釈迦如来、文殊菩薩、普賢菩薩、地藏菩薩、弥勒菩薩、薬師如来、観世音菩薩、勢至菩薩、阿弥陀如来、阿閼如来、大日如来、虚空蔵菩薩

なむあみだんぶつ なんまいだ。(この十三仏は三度くりかえずが、おわりの「なむあみだんぶつ、なんまいだ」は、一回目と二回目は一度、三回目は二度となえる。)

(2) 野辺和讃

帰命頂礼 高野山

弘法大師の 教えには

なぜに後生を 願わない

願えばかなう この後生

とかくこの世は 仮の世で

死ねば一夜も おかれない
野辺よ 野辺よと にぎやかに
送りの人は 多けれど
行くその先は 一人旅

極楽浄土へ 行く道に

あかずの御門が 三つござる
銭でも 金でも あかばこそ

念仏六字で さらとあく
念仏申した お祝いに

天から百丈の 花がふる
その花手に取り ながむれば

花ではござらぬ みな六字
なむあみだぶつ なみあみだ

(3) 四十九日和讃

帰命頂礼 有難や

中陰和讃の ころろえは
三才弥陀の 教えなり

死して迷土へ おもむかば
十万億土の その中で

七つの因所が あると聞く
初七日守るは 不動なり

くらやみ峠を あてなしと
中陰とぎれず 供えあり

光明たよりに こゆるなり
二七日守るは 釈迦如来

火ふり峠を 坂おとし
おのおの供えし たむけあり

水をたよりで 越えるなり

三七日守るは 文珠菩薩
うすまき峠を あてなしと
中陰とぎれず となえあり

日のたつほどに こえるなり
四七日守るは 普賢菩薩

しょうずの川が あらわれて
死してめしたる かたびらを

六字のみようごで こえるなり
五七日守るは 地藏菩薩

涙をながす 三途川
追善菩提の 功徳にて

舟に乗りつつ こえるなり
六七日守るは 弥勒菩薩

六土の土に ふみ迷い
自力の心を ふりすてて

他力の一つで こえるなり
七七日守るは 弥陀如来

仏前供養の その徳へ
屋根棟はなれて 極楽へ

導きたまふぞ 有難や
作りし煩惱 消滅し

なみあみだぶつ なみあみだぶつ
(身はくだけ、カバネは野辺に

さらすとも わすれまいぞよ 極楽の道)

(4) 御当家

帰命頂礼 ご当家の
位牌の前を ながむれば

一に功勞 二にお花

三にしきびの おり枝を
あけて念仏 となうれば

十三仏の みかげさす

なみあみだぶつ なみあみだ

(5) 親の和讃

婦命頂礼 親の日は

朝早起きて 身を清め

香花をたてて 回向して

わが身はどこへ おちるとも

二親様は 極楽へ

なむあみだぶつ なむあみだ

(葬儀の夜にはここで一息ついて、

夜食がでる。)

(6) 極楽和讃 (年寄りの亡くなった時だけやる。)

(上の句)

婦命頂礼 この沙婆を

捨てて行くのは いやなれど

無常の風に 誘われて

遂にむなしく なりたまう

冥土の旅も 一人旅

道もいそげば 早いもの

もはや浄土の 口となり

えんま大王 先に立ち

黒鬼青鬼赤鬼と

くろがね棒を つき揃え

悠然自若と ひかえおり

これこれ汝ら どこへ行く

弥陀の浄土へ 行きたくば

お慈悲に通して 下さいと

言いつつ亡者は 手を合せ

これこれえんまの 申するに

弥陀の浄土に 行く時は

極楽念仏 手おどりを

やってこの座を通るべし

なむあみだんぶつ

(下の句)

幕所と申す そのことは

花の都と 申すなり

花の都へ 行く時は

白の着物を 身にまとい

白の脚絆に 白の足袋

よつじのわらじ踏みしめて

右の御手に竹の杖

左の御手に数珠を持ち

経帷子をかけられて

首にかけたる頭陀袋

少々ばかりのくに米と

わずかばかりの六どぜに

これより外にはもられぬ

棺の中に入れられて

七重の錠前おろされて

急がば速土も近くなる

糸より細きあの道を

極楽浄土に着きにけり

西はあんじょう弥陀の国

なむあみだんぶつ

(大世)

(二) 他出の講

伊勢講 村中で抽籤によって代参者を一名きめた。ただし、その一人が追はぎにあってから二名となり、のちさらに三名となった。戦争で終了しました。抽籤によって決めるけれども、費用は出してやらない。その代り代参者は村中を自分で歩いて寄附講金を募った。

出発する日にはタチブルマイがあるが、これには親戚が参加するだけ。

代参者は神社にお詣りするが、その際ビッキ(お金)を投げるので、村中から子どもが集まった。出発したあとその家に村中の人が集まってオヒマチをした。特別な御馳走はなくお粥に多少の酒等であるが、老若を問わず集まった。その後のおヒマチにはフナノリ・ジンジャマイリ・帰りは津よりの予定日である。それそれを前のオヒマチ同様にする。

帰りは津島さん、秋葉さんを必ず廻った。村内に帰ると、川を渡るに上手の家で必ず一泊することになっていた。その家へ親戚が荷物をひきとりに行く。本人は翌朝神社に参る。神社前に妻わらで小屋をつくる。

代参者の数によって一人なら一軒、三人なら三軒の小屋。そこで旅装束を新しくし、古いわらじ等はその小屋に入れた。そして小屋を燃す。そこまでは伊勢の神様がついて来たが、その煙ののってお帰りになるという。その後神社にお詣りする。なお宿銭と称して右の小屋のところに小銭を置いて来るので、その小銭を子どもたちが奪いあつた。

ゲコウワイイはその晩にやる。

代参者は翌日になって、伊勢・津島・秋葉の札を配った。みやげに伊勢の絵、子どもに竹笛、青のり、箸等、村中どの家にも配った。(田代)

以前は、大神宮様のお札は、伊勢まで代参のものがうけに行ってきた。代参はむら中で一人、むかしはわらじをはいて、えんで(歩いて)行った。二十日ぐらいいはかった。歩いて一日十里というが、それは無理で、六、七里ぐらいいであった。明治十八年生まれのSさんは二十一才のとき

に代参に行ったが(明治四十三年ごろ)、そのときは二十五日ほどかかった。旅籠の泊り賃が一晩二十銭だった。

お伊勢まいりは、暮に出発して、正月のうちに下向(かえる)して、お正月のうちに大神宮さまのお札をかざれるようにした。なかには、としりを自分の家で行ったので、正月をむかえてから出発したのもあった。現在のように、暮のうちに、大神宮さまのお札をくばるようなことはしなかったのである。

伊勢まいり(代参)の費用は関係者が出しあつた。組のものが割付で徴集した。費用のなかには、お札の代金もふくまれていた。

代参者が出発する前に、近所や親類のものを招いて、立ちぶるまいをした。

出発するときには飯宮(おかりや、わらみや、諏訪様の境内につくった)から出発した。見送りは村境まで行った。

旅行中は、本人の行程とあわせていって、三回ぐらいい日待をした。名古屋からは船で行ったので、そのころには船乗りの日待をした。お日待は、近しい人たちを招いて、夜ごちそう(あずきめしなど)をつくって、一晚振舞った。あつまった人たちが一晚雑談しながら、道中の無事を祈ったのである。

代参者がかえってくると、その前日に、「あしたお伊勢さんが下向(かえる)から、みなさんひとつむかえに出てくれ」と近所の人たちなどに頼んだ。代参者はかえってくると、家へ寄らないうちにおかりやへよって、そこでわらじをぬいだ。かえりには、近所の人たちや親類の人たちはむかえに出たが、身内のもは乗物の終点のところまで、近所の人たちはお宮のところまでむかえに出た。代参者がおかりやにとわらじをぬいながら、わらじとおかりやには火をつけて、もやしてもらう、そのあと代参者は家にかえった。親類や近所の人たちをよんで、下向祝いをした。また、むら中に大神宮様のお札をくばった。

なお、伊勢まいりに行ってきた人におみやげを買ってきた。(声生田)

今井全体が講に加入しており、正月に二人が代参する。

出発する前日に立チブルマイをする。諏訪神社境内に70cm位のワラで作ったお飯屋を建て、代参人某と書いたお札を下げる。親類が寄って酒を飲んだり、錢別をもらったりする。

伊勢に着く予定の日にお日待ちをする。近所の人を呼んで赤飯を御馳走する。

帰ってくるゝと諏訪神社に参拝して、お飯屋を燃す。近い親類をよんで下向祝いをする。この時は飲みほうだいで、御祝儀よりさかんにやる。

聖朝、お札と掛子、竹笛、風呂敷、青のりをわらでしばったもの、箸などのお土産を村中にくばる。(今井)

代参講で一人で行く。後に二人になった。大体正月に行く。タチブルマイを朝する。親戚が集まって猿田彦の前の広場にワラ製の

お飯屋を作る。その後お昼頃出発する。フネノリとおミヤメグリの二回お日待ちをする。

フネノリは伊勢に着く前に、近所の人が寄って、代参人の家でやる。おミヤメグリは伊勢に着く前に村中でやる。

帰るとワラジメギをする。さい銭と神酒をあけてお飯屋を燃す。子供達がい銭を燃えているお飯屋から床などで取り出したりした。

その後神社へ一人でお参りをし、下向イワイを家でやる。親類や近所の人をよぶ。

翌日区長が宿を決めてサカムカニをする。村で代参人をよび一杯飲ませる。そこでお札をくばる。(袋倉)

村の講で、クジで代参一名を送り出す。行く時は、家でお祝いをして送り出すが、帰った時には、村の上の方の大神宮様にオカリ小屋を掛けて、その仮り宿にお札を置いて泊った。そこに宿賃として錢を置く。(あとで子供が拾う。)

立って来る時に、錢をまいた。(大前)

代参の人が出かけるときは村の人が見送った。上田へ出て諏訪に行つて上った。春掛に出るのは汽車が通るようになってからのことである。

伊勢までの往復は二十日くらい、琴平さんへは四十日かかった。往きに帰りの宿錢を先払いしてオイハギにあわなえようにしたという。代参が帰ると講の人が村の入口まで馬をひいて迎えに出て、お飯屋をつくってわらじやその他のものを燃やしてきよめた。鎌原神社のところでごちそうを出してのんでキリにした。伊勢参りには、きままつて「お札 笛、青のり」が村中に配られた。(鎌原)

富蔵山講 二、三年前位まで馬を飼っている家、十軒から十五軒で組を作り、組から選ばれた人が信州の富蔵山観音寺へ代参してお札を受けに行った。毎年、四月十七日だと思ふ。代参者は、カンジンコヨリで作つたくじで決めた。昨年くじに当たった人は今年を除くようにしてくじ引きをしたので順番に誰れかが行けるようになっていた。お札は馬屋の柱などに張って馬の安泰を祈った。昔は一軒に馬が三頭いなければ仕事にならなかつた。(大前)

富蔵山講の組が何組かあつて、各組の代表が代参に行った。代参者は紙こよりで作つたくじで決める。くじに当たった人はみんなからお札の代金を集めて出かけた。くじは昨年当たった人は除くように引いたので十年間に一回位の割合で行けるようになっていた。馬頭観世音は馬の神様ばかりでなく生きものの神様だといわれている。(干伏)

馬を飼っていたころ、長野県の富蔵山の観音様へ、春と秋の二回おまじりに行った。馬を飼っていたものが講をつくっていて、富蔵講といつた。時には、代参人がおまいりに行った。朝出かけて行って、その日は泊って、夜ご折禱してもらつて、翌日かえつてきた。おまいりして絵馬をうけてきた。

軍馬を必要としていた頃は、この信仰がさかんであった。(芦生田)

馬頭観音講 観音講は代参講である。埼玉県上岡の観音様に行く上岡講と、長野県戸倉の観音様に行く戸倉講とがあつた。牛馬を飼っている人が講に入り、毎年二人ずつ代参した。

今井には現在も馬頭観音講があり、文書によると講規は次の通りである。

第五五号

武州

馬頭観音講中通帳

群馬県妻郡堀恋村 今井

上岡

世話人 唐沢 治夫

当観音講を設立又ハ加名セント欲スルモノハ並講一人 納金ノコト

一、当講ハ人員ノ数ニ制限ナク加名者ヲ以テ一講ト為ス

一、御縁日ハ(二月十九日) 混雑ノ為メ並講以上ノ納金アリト雖食事

ハ不可能之事、但接待ニ多少ノ差アリ

一、結講ノ希望アルモノハ当日帳場又ハ書面ニテ寺坊ニ紹介アリタシ

一、食事待候ヲ望ム御方ハ二月十九日縁日ヲ除キ参拜アリタシ。但シ

前以テ人員ノ通知ヲ乞フ (今井)

長野県東筑摩郡西条の馬頭観音。村中。代参は五人ぐらい。四月十六日に行つて、翌十七日の晩に帰つて来る。その晩オヒマチをしたが、これは代参者の家でない、村のうちが順ぐりに宿をした。酒も出て盛大だった。(田代)

二月十九日に大前では埼玉の上岡の観音の縁日の代参に行つて来る。

(鎌原)

四月十八日の縁日に一泊二日で行く。長野県西筑摩郡西条の戸倉の観音様に行く。馬を持っていた人が講を作つて代参した。(袋倉)

戸倉の馬頭観音へ四月十八日に代参が行つた。お札・おすがたをうけてきて馬小屋の柱にかけた。(西窪)

中軽方面へ二回ほどいったところに馬頭様があり四月十九日は草履馬なども開催されてにぎわった。また、賭博開張もあり、見張番などが立っていた。昔は馬方が多かったので馬頭様のまつりがさかんであった。

(大笹)
上袋倉の観音堂(今年三月彼岸の中日の前の日に焼けた)にお参りし

た。この堂の前に石造の馬頭観音が数多くある。

長野の富蔵講を観音講ともいい、代参講による信仰が行なわれた。昭和三十年頃までつづけられた。

又、埼玉、熊谷、上岡にも観音様があり、夜お参りに個人で行つた。馬の額などを買つて来たらしい。(袋倉)

丸山講 テンメイカテン、テンメイカイテンと唱える講だった。明治末頃あった講で、石津に二軒、今井に一軒で長野原大津の洞口氏のところが丸山講の支部となつていた。

神主のようなどころがあった。毎月二十日がお祭りでも赤い色の旗を立てていた。家の中には、神前場といひ階段がたたくさんあった覚えがある。湯殿山にお参りに行つて来た時、碑を立てた。樋口平治氏の墓地のところにある。風邪などのまじないをした。(今井)

三峰講 毎月十九日が講の日で、一年に一度代参に行き、お札をうけて来る。鎌原神社の境内にある三峰さんの前で、玄米を炊いたのを全部供えてお日待ちをする。

代参でだれかが行くときには、五銭くらいずつ出してやった。往復するのには徒歩なら一週間ほどかかるが、その間はなまぐさは食わない。お日待ちには豆でも煮ておいて、お茶をのんでお祭りをした。(鎌原)

三峰講には村中が入つていて、上袋倉、下袋倉各一名が代参する。四月十九日前後で一泊二日で行つてくる。

大きいお飯屋があつて、村中の大きなお札を受けて、帰つて来た晩に代参者と村中の人が集まつて、それをマツリこむ。

火災除け、盗難除け、家内安全の三つの御利益があるので三峰という。

(袋倉)

八幡講 長野県更科郡八幡村の八幡宮。有志。代参。講金が決つてい

た。(田代)

一宮講 甘楽郡の一宮貫前神社。有志による代参。(田代)

標名講 嵐除け、五穀豊穡を祈つた講で、毎年二百十日の前になると

代参が二名お参りに行った。お札を受けて来て畑にさしておいた。現在は消滅している。(袋倉)

峠 磯水峠の熊野神社に代参を送った講で蔵よけの神様といわれている。(袋倉)

いろいろな講 古峰ヶ原、戸隠、八幡、成田、三峰、戸倉、ゴチ如来(直江津)伊勢など。

一講十人前後で、講金を出して、二人ずつで代参に行く。(門員)戸がくし講、三峯あり。(田代)

四、その他の信仰

雨ごい 四阿山に登ってした。村中で、それぞれオミキを持参し、センダン(千駄)ダキをして山頂の石をころがり落したりして騒いで帰った。(田代)

天氣が続くと、雨の降っているときに、ミノ、笠をかぶって、白山が岳へ登って雨ごいをした。酒を持参したり、水をまいたりした。(今井)

長い間雨が降らないときには、雨乞いをした。浅間山へ登ったり、和尚をたのんで吾妻川で清めてもらったりした。

浅間山へは、ほとんどむら中のもの(各戸ひとり)が行った。もし行かない場合には、「水くれたな」などといわれた。頂上まで登って、天上へむかっておがんできた。あるとき、いたずらに穴に石をぶっこんだところ、桶りにはしようだれになったという。朝出かけて、夕方帰ってきたが、足の弱いものはおごとだった。ここから浅間の頂上までは五里、峯の茶屋までは四里ある。

吾妻川のところでは、和尚を頼んできて清めてもらった。あるとき、清めてもらって、まだそこにいるうちに雨がざんざんと降ってきたことがあった。(芦生田)

雨が長い間降らないときは、白根山へ雨乞いに行った。弓池へむかって鉄砲をぶった。こうすると、池の主がおこって、雨を降らせたという。(三原)

チヨースバ神様 女の神様の絵を使所にはる。正月元日に初絵売りが、綱笠明神などといっしょをもって売りに来た。(西窪)

オシラサマ 妻の神さまだろことはたしかで、カイコ神さまは女の人らしく、初絵売りの人がもってきた。(鎌原)

天神は女神で、キヌガサンという。(西窪)

道祖神 子どもの神さまなので、正月十四、十五日の年とりにもお膳に上げるのに子どもだからめしと汁だけでよい。(鎌原)

峠さま 磯水峠から御師がやって来て、区長の家に泊り千羽鳥を配った。その鳥は嵐除けになるし、中に一羽さかさ鳥があり、それを吞めばお産が軽くなるといわれた。お札に各家そば一升ずつ、区長が集めて俵につめ、これを峠まで送り届けた。今はお金。(田代)

サシマワシ 小さい祭りのときにサシマワシというのをまわす。巾の広い板に村中の名前が書いてあり、それには一軒ごとに小さい巾着がついており、隣りから隣りへとまわしてやると、それぞれの家で自分の名のあるところの巾着に一、二錢くらいの寄附をした。これがサシマワシで、このお金でお祭りをした。(鎌原)

ヨシダル オミキスズのかわり。ヨシを切って二本しばり、酒を入れて大日さんに上げた。イツナサン(飯繩)にも上げてあったことがある。(鎌原)

モノビ 一日と十五日は、毎月、きちんと神だなお灯明をあげ、かわりものをしてあげた。モノビという。(芦生田)

人の一生

はじめに

この村の経済圏は、表上州よりむしろ信州に入っている。然しこの項で取上げる生活現象に関しては、一部信州とのつながりが見られるが、むしろ閉鎖的とまではいわないまでも、村落として小さくまとまっている感が強い。それは村の中心を貫く信州街道が、文化的・経済的な交流を促す点で大きな意義をもっているが、一方では地形や天候のもたらす影響がより大きかったのではないだろうか。

一番奥の田代部落は、今ではキャベツの一大生産地として、私達が調査した時期は、全村これキャベツと云ってよい程のものであった。街道に進む四トン十トン積トラックの列は、静岡・名古屋・大阪からのもので、農村という雰囲気は全然なく、むしろ商業中心の町という錯覚さえ起しかねない有様で、一寸道路から外れたところの状況とは違和感のある程であった。ここに住む老人は、時代の移り変わりを持っていくように語ってくれた。老母は「経済的には今は及びもつかぬ程に苦しかったが、然しよかつた」といい、現代の生活には直ちにはなじめない、抵抗を示す声さえ聞かれた。山村のゆつたりとした、他に侵されない、しかも素朴な心の持主である。

安産の神様としての勢多郡（現前橋市）荒砥の産婆様は、ほとんど全県に信仰されているが、この地区はその信仰圏外であるようだ。地元のあるいは隣の信州の神様のお世話になっている。また弱い子、厄年の子

を捨児にする習俗は、ここでもみられたが、袋倉での拾った家に籍を入れ、姓が変わるというのは例の少ないことである。

この村では、人手不足がその原因らしいが、比較的多くの家で子守りっ子をおいている。信州や郡内各地から、里子としてあるいは子守りっ子としておいているわけだが、出入りの商人が世話しており、入籍してその家の家族とする例さえあるということなど、一応注目してよいであろう。

どちらかというとき小さくまとまっていたこの村の婚姻圏は、村内が九割程を占め、しかも部落内結婚がほとんどである。従って封建的とみられるこの山村ながら、恋愛結婚もかなり多く、それが社会的に問題視されることもなかったようである。こうしたことから、必要があればいつでも実家に足を運び、年中行事として里帰りしても、特別な意義を意識して実家に帰るといったこともなかったようである。

婚約することをテムスビ（樽立て、樽入れ）といい、娘が祝酒を飲むことで承認のしるしとなり、空びんをもらい方に持つことで婚約成立のしるしとなることは、各部落共通であった。そして干候では結婚式・披露宴が終ると、このシメダルを再び嫁方にとっていて、これですべてが終るといふ丁寧さがある。また大笹地区で明治末〜大正初期に多くみられたという朝嫁、それは式もろくにあげないで、仲人が娘を婿の家に連れていってしまうというの、一寸変わった習俗であろう。

入家式に近所の子供が参加して、はやし言葉述べることが一般にみられるのもおもしろい。

最後に葬制について二・三取上げてみる。埋葬の際、天蓋の木を棺に届

くようにしておいて、墓参りのときその木をゆすって「じい、さんきたよ」といい、その木に水をかけると死者にまで届くという伝承が鎌原にあった。これはいわゆる「息つき竹」で、この地域には竹が生育しないので代って木が用いられているものである。これは墓参り来たことを知らせる死者との通信、あるいは心の往來を示しており、この木を伝わって水が死者に届くという考え方も、死後なお生者と死者との間に、具体的な結びつきを祈念しての行為とみてよいであろう。

穴掘り作業は、各組から一定人数ずつ出るオテンマ形式と、組単位のオテンマ形式とあり、何れも穴掘り組とかジゴクテンマといつて相互共同作業となっている。

次に死者より年下の女性が葬列に参加するとき、全員が白いサラシの羽織の左の袖をかぶるソデカブリは、他の地域では死者、喪者、縁者がサラシの三角布を頭にかぶっているのが一般的であるが、ここではカブリモノは独立したものでなく、左袖をかぶり右袖は帯にはさんでおく。穢れある者が日に当ることを慎しむという意味は同じでも、形式の相違がみられる。これをかぶるのが必ず女性であることは他県と共通しているが、ここでは死者より年下の女性に限られているのが特徴である。

またこの地域には昔から多かった山犬が、新墓に与える危害を防ぐために、イヌッパジキをおくのだという意識が強い。西窪ではテンコロという想像上の妖怪がその対象となっている。更にその上に丁寧にガンブタを置いたり、あるいは西窪や田代のように、埋葬した上に石を山と積み上げ、その上にガンブタをおいて、四隅に縄を張って頑丈に動物の危害防止策を立てている。何れにせよ、その程度に差こそあれ、限内各地でみる習俗ではあるが、ここでは特に強調されているとみられる。(袋倉や今井では子供の死んだときに限られている)。田代などでは、雄大なオタツキという感さえる。

こうした中における土地の人の意識には、邪霊の侵入を防ぐ、あるいは魔除けというものはない。また死者の魂を招来する、あるいは往來を

意識するモガリの観念は、大笹地区に言葉として残るのみであった。そしてこのイヌッパジキを四十九日にはすず行為は、無意識ではあるが、モガリの期間が終ったことをあらわしていると思われる。

最後に、この村でも最も奥の田代地区に兩墓制がみられた。埋墓をボチ、詣り墓をオハカといっているが、何れもマケ毎の共同墓地で、ボチは川原に近く、オハカは村中に散在する。そして兩墓の距離は約一キロもあった。葬儀の翌日詣り墓には、将来石塔を立て、魂の移るところとして予め定めておく。ここまでは兩墓の姿を残しているが、年忌、彼岸などに兩墓に詣る点、またボチには年数を経て、形態あるいは埋葬者の何人であるかが不明瞭になると詣らなくなるという点などは、やや別れているようにみられる。何れにしてもこれまでの民俗調査で、それが本来の形であれ、多少変化した形であれ、兩墓制の維持されていた子持村、板倉町、南牧村、吾妻郡六合村、坂上村、長野原町、片品村につぐ新しい発見で注目される。ただこの広い處恋村のなかで、この田代地区のみ残っているのはなぜだろうか。この点はもっと追及する必要があるだろう。(池田秀夫)

一、誕生

(一) 妊娠・出産

妊娠 妊娠したことは自然にわかるまでは特にいわない。昔は腹帯をすることもなかった。(鎌原)

夫にはすくにつげるが、姑さんにはツワリなどで気づかれるか、腹が目立つまではかくしていた。(門貝)

妊娠することをハラム、アカがあるといい、妊婦をハラミオンナという。(田代)

妊婦 妊娠すると腹をみせないように、かがんで歩いた。また妊娠

しても普通と同じように働かねばならないし、サシコを着て山仕事に行き、ボヤを二束しよって来たものである。ツワリになっても休めない。そして嫌なものはずらず、好きなものだけたべた。これらは丈夫な子を産む為である。子供が次々に生れと大へんなので、またかといわれた。便所を掃除すると、腰から下の病気をしなしいし、美しい子が生れるものといわれた。(田代)

ツワリがひどくなると寝てもいられない日なたも黄色くみえるほどで、かくすにかくせない。(門貝)

妊娠四ヶ月位までは、重いものをついだり、高い所に手をあげることを避ける。

妊娠すると夜眠が見えなくなる。これをヨメトラというが、こうなったらヤツメをたべるとよいという。(田代)

昔ははずかしくて、人にいわないから、生むきわまで働いた。山でよし、土間でよし、行った先で生んで、自分でとりあげた。

よくよく生まれるまで、床に入るなといわれ、出そうになつたら入る。(芦生田)

生れる子が男の場合は特にやつれるとか、きつい顔になつたり、顔の皮がひっぱつたりする。双生児の場合は、腹にいる日が長かつたり、腹が横にも大きく、しゃがんで草履をはくことも出来なくなり、足のムツミも強い。(田代)

腹帯、自分で、さらし六尺買ひ、戌の日にしめる。(三原)

仲人が買ってくれたり、自分でも買った。戌の日にしめた。(芦生田)

五月目のイヌの日にサラシでまく。小諸のショウガミ様から買ってくる。(門貝)

五月になると、吉日をえらんで腹帯をする。(大世)

妊娠して五ヶ月目のいぬの日にさらしの帯を腹に自分で巻いた。帯は主人が先に三日か五日間巻いたものの方がよいといわれている。(大前)

安産祈願 特にしない。非常に危険な状態になると、産婆様にお参り

する。(大世)

子供を得るためには、小諸の根津のオシメ様にお参りすると授かるという。(田代)

お産の神様として熊野神社、オクマン様を信仰しているので、門貝はお産で死んだ人はいない。(門貝)

子安さんは女の神で、お礼はトボーにはっておいだ。(西窪)

吞龍様に、お願しかけると、お灯明が消えないうちに、軽く生まれる。お産の時、帯の神様、便所の神様がたちあう。便所をきれいにすると、きれいな子が生まれる。(芦生田)



子安様(干侯)
(撮影金子緯一郎)

子宝にめぐまれない人も子安地藏をおがんだ。妊婦は安産であるようにおがみ、お産が済んでから、お礼として、地藏にズキンをかぶせたり、ヨダレかけお産を掛けてやった。とにかく、オガンショをかけた人が、この地藏さんをおがんだ。(干侯)

産けついたときに、ネツのオシメサンのお守りを飲むと、赤ん坊がそれをつかんで生まれてくる。(門貝)

お産 初めての産は、実家へ帰ってする。(鎌原)

産気づいたときは、やしやびしやの実を食べさせるとよいとされてい
た。その実は干したものだ。

又、狐の胆を米粒一つぐらいを飲ませると早く産れる。普通とり上げ
ばは(産婆)は持ち歩いていて産気づくとすぐにくれた。(石津)

産部屋 ネドコ(ナンド、小ザシキとも言う)の畳をはいいで、ムシロ
の上にワラを敷き、その上にボロを敷いて生む。ワラを十二ワ束ねて枕
にするか、フトンを巻いて枕にする。だんだん低くなる。

後でムシロごと山へ持って行き、日の当たらない場所にいける。(袋倉)
納戸で生む。電気がなかったので、奥の真暗の部屋で生んだ。(大笹)
腹がやめていられなくなるまで産部屋に入らなかった。お産の痛みは
すぐ直る。富士山へ行って途中で出ちゃって、もんべに生れて、連れて
来た。ふじおと名前をつけた。(袋倉)

お産の部屋は、納戸(ナンド)が多かったがどの部屋でもかまわな
かった。

下にわらすべを敷いて、その上よりすいぼろ布を敷き、わら東に妊婦
はすがってお産をした。(大前)

初めての子は実家に帰って生み、二十日のオミヤマイリを終えて帰る。
二人目からは婚家でお産する。

お産のとき頭が痛むと、百日頭を痛むといつて、これでは困るので、
用のない人は入れない。

お産は、大きな家では普段は使わないネヤでした。板の上にムシロを
敷き、その上にワラのすべを敷いて、その上に布をかけスベトントンと
した。このスベトンはお産のあと一、二週間墓場などに捨てる。

お産はフトンを丸めてそれによりかかり、伏せた形になって、トリア
ゲバアサンが下から上げるように腹を抱えてくれる。オツツサメの形
であって、仰むけでお産するより楽である。キョウオボエに寛えた女が
トリアゲバアサンの役をしたものである。(田代)

第一子は実家に帰って生んだ。これは終戦前、一ヶ月前頃まで続いて

いた。(千俣)

むかしのお産は坐産であった。腹が病めてくると、おつっくばって(す
わって)、自分ひとりで生んだ。生まれたから人をたのんでくれという程
度だった。ある人は、七人の子どもを生んだが、生むときに人をたのん
だことはなかったという。

お産は、部屋のたたみをはいいで、床にわらをしき、その上にボロをし
いて、そこでした。お産を布団の上でしたものはなかった。むかしは、
年寄りからそのようにいいわたされてきたのである。昭和に入ってから、
布団をしいてお産をするようになった。(三原)

お産はふだん寝ている部屋です。ワラのすべを敷いて床を敷きな
おし、アオでなくウツムキで産んだ。(鎌原)

薬をすぐったすべ(やわらかいカスの方)をかきね、ボロをおく。薬
(すべでない方)をまるって枕にして生む。坐って生む。産婆が「薬に
しがみついている」という。いきむ。苦しい。「これっきりでだめだ。」
という。「そんなことでどうする。いまからうんとむだ。」とどやされ
る。そして生まれる。(大笹)

つんのけそうになるまで働いていて、実家にも帰らないで一人で生む
ことも多かった。お産婆さんにもかかったことはないし、背中もなでて
もらったこともない。赤ん坊の泣く声を聞いて姑さんがお湯をかけてく
れた。

ワラスべを敷いて、うつぶせになって生んだ。お産は枕を高くしろと
いう。

障子のサンがみえるうちは生まれない。薬ではなかったが、軽く生ん
だ。(門貝)

小ザシキ(オナンド)で生む。わらをすぐったものを入れたスベプト
ンを敷いた。今のマットレスより柔らかい。

腹がやめるまで働いていて、生まれそうになってからオナンドへ行っ
た。子供がのぞっこむまで働いていた。

山へ草刈に行つて、子供がのぞつこんだので、押し込んだりして、馬に乗せてもらつて家まで行こうとしたが間に合わず、桑畑で生んでしまった。(袋倉)

トリアゲバアサン 十年くらい前までは産婆でなく、年寄りなどのたんと手がけた人がやつてくれた。オフジンバアがとりあげたのが多い。ヘソノ緒がもげるまでの一週間くらいは来てくれた。生まれた赤ん坊には二・三日のうちに守りとして肌着をつくつてくれた。(鎌原)

産婆のことをトリアゲバアサンという。一週間位は湯をあびさせてくれる。(大世)

お産の時は、上手な人に頼んで、子どもを取り上げてもらった。この人を取り上げ婆さんといった。大前に来てもらった人は、なかなか上手だった。妊婦のお腹を押さえ、さするようにして子どもを下げて行った。こうすると楽なお産ができるので、みんなによるこぼれた。(大前)

家にお婆さんがいれば、頼み、いなければ近所のお婆さんや懇意な人にとりあげてもらつた。とりあげると言つてもヘソノ緒を切つてもらつた。大体自分でやつた。

子供の数は八・九人が多かった。(合井)

取り上げ婆さんのお札として、ネルの腰巻などを贈つた。またオボヤケの日には赤飯をふかして贈る。(大前)

何かのお札の時、一日で米一斗というのが普通だったから、米二升位お札に贈つたと思う。(千俣)

お産というのは体の四十八の骨がはずれて子供が生まれるもので、それが元にもどるまで百日かかる。だからそれまではあまり何でも食べてはいけない。(門貝)

へその緒 大切に名前を書いてしまつておいて、親がなくなつた時、ありがとうございまして、棺の中に入れてやる。しまつておくうちに、虫が食うから、たまには出して、風をくれる。

盲腸の時、へその緒を削つて、煎じて飲ませると、盲腸が散るといふ

のでやつてみたが散らなかつた。九死一生の時に飲ませる。(芦生田)

ひとにぎりの長さで麻でしまだに結んで切る。(門貝)

トリアゲバアサンが切つてくれる。三寸程のヨシを十二本、ノチノモンの中に入れて、日蔭の所、墓場の端に埋める。

落ちたヘソノオは、人がまたぐ敷居の下に埋めるが、一番初めにまたいだ人のいうことをよくきくといふ、父親に最初にまたがせ、そのあと他の人にまたがせる。(田代)

三本指の長さに、麻でしばり、そのうらをしぼつて曲げ、島田にしておく。腹がやめた時、削つて飲ませる。(三原)

ヘソノ緒は、ひとにぎり、くらの長さにはさみで切る。古いはさみでよく、麻でしばる。

後がやまないというので、ヘソノ緒に一度筆をあててから、ハサミで切る。後は麻で結わえておく。(大世)

ヘソノ緒はハサミで切つた。このハサミはお産の前夜、一週間使わな

いでおいた。切つたヘソノ緒は紙にくるみ、麻ひもでしばつて、タンスの中のはしの方にしまつておいた。この時、紙に、子どもの名前と、生まれた時の身長を書いておいた。しまつておくときヘソノ緒は固く小さく

なつてしまふ。(大前)

のちざん お勝手のはしふくの下に埋める。お墓へ持つていつて埋める。

いけ方が悪いと、犬が掘る。そうすると、子どもが夜泣きするようになる。(三原)

縁の下か敷居の下に埋める。今は墓場に埋ける。

ノチザンのおりないときは、はた織りなどで腹をなでる。または、ぞうり方を頭にのせてなでる。ノチザンのおりないときに高野山のお守りを切つて飲む。(門貝)

ノチ産は家の入口(玄関)のような、人の大せいまたぐところに埋め

る。家相を気にする人は、便所の敷居の下を掘って埋める。

産湯の水は縁の下の 隅のあたらしぬところにこぼしこむ。(鎌原)

ノチ産人は人のまたぐ所へ捨てた方がよいといわれ、便所の下とかトボロの下にかけた。

床の下に穴を掘ってうすめた。産湯も床の下に捨てた。くす屋は床の下が割合い高いので、こうしたことができた。(千侯)

えな 人の踏む所ほどいい。便所の所にかけた。(声生田)

エナは人の踏むトボロに埋める。今は墓地に埋める。(今井)

お墓にもっていった。夕方、日がかった頃行っていった。(大

笹)

ミズコ ミズコ(早期破水のこと)になるとたいへんである。また足

から生れるサカサゴは、生むのがかえて葉だという人もある。(田代)

七ヶ月の児は育つがヤツキの子は育たないという。(田代)

臍胎 キツネの胃を飲むと子はおるといい、桑の根も毒だという。

(田代)

下す方法に蜂蜜を二合食べると下りるとか、ぼや(木の枝を束ねたも

の)を二束背負って坂道を走り下り、わざと転ぶとよいかいわれてい

たが少しもきかなかつた。(今井・石津)

(二) 生児 儀礼

産湯 床をはいで、縁の下に流した。日のあたる所に捨てると、汚れ

る。(声生田)

産湯は生んだその下の板をはがしてこぼす。(大笹)

オボユは縁の下に音のしないように静かにする。音をさせると子供

がなく。(門貝)

ウブユは生んだ部屋のネダを外して床下に流す。(田代)

産湯は日かげに流した。最初の産湯から二回目からの湯も一週間、日

かげに流して捨てた。(大前)

ウブギ 生児はしばらく布でくるんでおき、お宮詣りのとき

初めて母親のおばあさんが着物を着せる。ウブギは一枚で、ハダギは赤

襟のさらし布で、トリアゲヘアサンがお祝いに贈る。ウブギは男児には

黒色の無地、麻の葉の模様をつけたもの。女児には赤い布で麻の葉の模

様のものである。またウブギは初生児はオシメトメが一道具(オシメ・

ハダギの上に着る着物・チャンチャン・綿入れ・ジバン等)を贈る家も

ある。(田代)

麻の葉の着物は、長生きする、利口になる。子どもの着物の襟が細い

なっているたびに、虫が切れる。

里から寄こすものだった。(声生田)

とりあげ婆さんが、さらして産着を作る。(三原)

取り上げ婆さんは、生まれた子どもに、自分で用意してきたウブ着(さ

らしの肌着)を着せてやった。このウブ着の襟には赤い布がぬい付けて

あった。お守りである。(大前)

オボキはとりあげた人が、白木綿でつくってくれる。生まれるとすぐ

に着せる。サランで作るものではない。

つぼのうしろに赤糸で七針縫い、赤い衿をつける。幅は一幅、丈は一

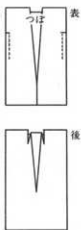
尺五寸から二尺一寸で、ツツはきりつばらい(くけない)。丈は二尺ちよ

うにするものではないという。(門貝)

オボタテノメシ お産があるとき間はかまわずにオボタテノメシをた

く。男の子ならば文庫箱の上、天神さんへ上げ、女の子ならば裁縫箱

の上に供える。天神さんは字問の神で、裁縫箱はよく裁縫ができるよう





安産を告げる手紙（鎌原）（撮影本英一）

にということ。

オボタテノメシはトウネのときも煮る。（鎌原）

子供が生まれると神棚にオミヤをあげ、オボタテメシをあげる。また男の子の場合スズリ箱の上にもあげ、女の子の場合はお勝手戸棚の上、箆縫箱の上にもあげる。来た人が多くとオオグラシといって沢山煮る。神棚にあげたオボタテメシはそのあとオジヤにして母親がたべる。夜ふけに約三時間おき位にたべ

る。一方母親にはこのとき御飯一杯、カツオプシの入ったオツニュー一杯をたべさせる。（田代）

オボタテのゴハンを生まるとすぐに炊く。拵に一升の米を炊き、女の子なら針ばこの上、男の子なら馬のシト（鞍）にあげる。後でオトツチャンに茶碗に一杯もって食べさせる。（今井）

子どもが生まれるとすぐオボタテの御飯を炊き、神棚にあげる。また、近所の人、嫁の両親、親しい人なども呼んで食べてもらう。家の者はもちろん食べる。（大笹）

アカミ 初子のときなど出産のお祝いによくことをアカミという。米などを重箱にひとつくらい入れてゆく。（鎌原）

おしめ うちで作る。生れる前に用意しておくとし弱い。（三原）

お七夜 赤飯をふかし、とりあげ婆さんに食べてもらう。（三原）

トリアゲバアサンをよんで家中で祝う。（大笹）

あまりやらない。（鎌原）

生後七日目をオヒチャといい、赤飯をふかし親類を呼ぶ。また、ミジシコの菓子も用意した。（大前）

命名 昔は親はつけなかった。学者のような人や神主みたいな人につけてもらったのでむずかしい名がある。男には郎のつくが多い。丈夫に育つようにというのでナベとつけたのがあり、ナベのシッタ（底）を抜いてくぐらせるとよいという。

三つくらいの名を考えて紙に書き、神社へおいて、拝殿の前で拜んでから小さな子にひかせて、お諏訪さんに授かった名と書いてつけたのも多い。（鎌原）

一七夜に命名する。命名は紙ヨリにいくつかの名前を書いて神棚にあげ、おろして子供にひかせる。初めての子供の場合は、叔父・叔母などにひかせる。ひいた者がこの名を授かったとして命名する。命名したら半紙に書いて神棚にさげる。そしてトリアゲバアサンを呼んでごちそうをたべてもらう。（田代）

神棚に各前を書いた紙を三枚あげておいて子供にひかせる。何回ひかせても同じものをひく。（門貝）

三つ位名前を作って、大神宮様にかけて子供に引かせる。何日までにつけるということはない。役場にとどけるのもゆるやかで半年度たつのは普通であった。罰金の五十銭をおさめるとともにとどけてくれた。（大笹）

名前は近所の学識経験者に頼む。

固い人は名付親とつきあいをやる。

婦人クラブに名付け部があり、親の生年月日など必要な事項を連絡すると付けてくれた。徳富蘇峰などが風流していた。（今井）

オヒチャに名前をつけるとはかきらない。以前は、二、三年も名前を役場にとどけない人がいた。今は、オヒチャまでには名前をつけるが、名前がつき次第、名前を書いた紙を神棚に貼る。昔は人に付けてもらっ

た時もある。つけてもらった人を名付け親といっているが、今では自分の家で付ける。(大前)

ケサガケの子は「ケサ」「ケ」「サ」の字の入った名をつける。

体の弱い子は「ナベ」の字の入った名をつける。また、鉄ナベの底を抜いて、産湯のたらいにかぶせて、その穴から赤ん坊をとり出す。(袋倉) 生児のへその緒がけさがけてでくと、ケの字を上につけた名をつけた。けさ子。けさ太郎等。(田代)

ケサガケコはケサカケサの字を入れた名前をつける。(今井)

へソノオを首に巻いた子をケサガケの子といい、命名のとき「ケ」をつける。例えば「タケ」のように。(田代)

大前の神主さんと土屋三さんが、よくつけてくれた。

生みおさめにしたときは、おとめ、とめじなどの名をつけたし、首にへその緒を巻いて生まれたときには、けさがけだといって、けさのつく名にした。(西産)

セツチン参り 七日目に自分の家の便所につれてゆく。セツチン参りという。(門貝)

便所参りは便所のおひがみさまに、墨で、犬の字を額に書いて、連れて行く。(芦生田)

産後 三日も寝ていられるのは楽なほうである。産後でも重いものをもつたりきつい仕事をした。産後重いものをもつとナスがさがる。ナスがさがると子供が生まなくなる。ナスが長くさがっている人が沢山いた。

(門貝)

出産後の産婦の姿勢としてはお腹が空になったからスジを伸ばしてはいけないといわれ、一週間位、足が伸ばせなかった。これはつらかった。

だから、そーと足を片方つつ伸ばして苦しいのをしのだ。(大前)

産婦の食事 二十日間はろくなものを食べさせられなかった。おかゆ、かつぶし、実のない汁(三年ネギといって、三年間植えかえない細いネギを入れることもある)などで、玉子、梅干、青いもの、油ものなど

は食べられなかった。

家族が食事をつくったあと、同じカマドを使った。

お産のときは、米の飯が食べられた。(門貝)

お産のあと百日は油物はいけないという。そして一週間位は、オカズは卵とカツオ蒲生位である。

初産の産婦には嫁ぎ先からミツ・米・カツツシ等を贈る。一日一升めしをたねば丈夫にならないといいて、二十日分二斗おくる。二人目からは実家からもつてきてくれる。お産のあと二十日間は煮たきせず、人によつてもらう。煮る火は家族が用いるものと同じで、区別はしない。(田代)

油揚は毒だ、卵はだめ、百日は食うもんじゃないといわれた。(芦生田)

オカユとカツツシで二十日間位をすごす。(大笹)

産婦は一日七回位、少しずつ食事をとった。おジャヤ、米粉をかけたものを少しずつ食べた。おかずは、カツツシ、ミツが主だった。また大根のみそづけもよいといわれて食べた。汁にはカンビヨウを入れた。でも、カンビヨウがなかなか手に入らないで困った時がある。

食べていけないものは、ウメボシ、カボチャ、ニンジン(生のもの)。また餅は腹にはりつくからいけないといわれた。また甘いものは乳が上るからいけないといわれた。

魚はマスはいけないが、サケは少しならよいといいて、食べることができた。

薬は実母散を飲んだ。富山の薬屋が廻って来たとき、妊婦のある家ではあらかじめ買って用意しておいた。(大前)

カツツシは二十日間に一本位使って、ダシにして、米のおジャヤを作った。また、みそをおかずにした。また油気の強いものは消化にわるいといつて食べせなかった。(千俣)

オボヤ 女の子十九日、男の子二十日めにする。いいきもんを着せて神社へ連れてくる。おばあさんやおばさんが抱いて来る。この日に近所



大笹神社（撮影都九十九一）
内祝 紙包みの中はヨシが2本。表に「内祝い」と書いてあった。出産後の初詣り等に供えられるものであろう。

や、アカミに来てくれた人のところへおこわをくばる。重箱には赤ん坊の名前をつけてゆく。

（鎌原）

生れて二十日にオボヤケといつて赤飯をふかして、とりあげ婆さんや近所に来てもらう。来ないものには配る。（三原）
生後二十日にオボヤケといふ。赤飯を炊いて親類・近所を呼ぶ。

この日にカミソリで頭を剃つて坊主にする。トトタイをボンのタポに残す。呑龍さんの七つ坊主と言い、七つまで坊主にしておく。七つになるとトトタイを切つて呑龍さんに持つて行く。それから髪をのばす。善光寺へも行った。（袋倉）
生れて三十三日たつとオボヤケの祝いをする。嫁方の親戚までよんで祝う。子の顔に朱で犬という字を書いてお宮参りする。その時ヨシダールに酒を入れて持つて行き、神社の格子にゆわえてくる。この時から始めて氏子になる訳である。だから、氏子になる前は内輪の葬式にもたちあわせない。またこの日まではヒカゲモシといって、オ TENTウ様にみせるとバチがあたるともいう。

この日は親戚、知人にお祝いのお返しをする日でもあるし、トリアゲパッサンに、金に何か（反物とかはき物）そえてお礼をする日でもある。

（大笹）

宮詣りまたはオボヤケといい、男子は生後一九日、女子は二〇日が普通で、三〇日目にする家もある。初着をくれた家にオコワをふかして配

る。また餅をついて祝う。この宮詣りはオバアサンが生児を抱いていく。産婦はケガレているから行かない。新しい着物は実家が特別につくつてくれる。初生児はムロさんの家で行く。綱・メリンスの着物である。この日、宮詣りする前に男はケンボウズ、女はトトツタイを焼いて刺る。（田代）

オボヤケは生後、男は二十一日、女は十九日といわれているがはっきりしない。この日赤飯などふかして祝う。また、生まれた子どもを諏訪神社につれていく。産婦は百日間はけがれているといわれ、神社には近づくことができないから、身内の者が子どもをつれていく。また、子どもの顔に「犬」の字を書く。（大前）

一方の切り口を斜めにした葦（十五穂位）を二本そろえて熨斗紙に包み、それを紅白の水引きで神社の格子に結わえる。これをヨシダールといひ、中には酒が入っている。三十三日のオボヤケでお宮参りの時神社に持参する。諏訪神社にはいくつかみえ、現在でも行われている。（大笹）
クイズメ 男児は百日、女児は百十日。ゴハンを三粒でも食いのめば丈夫だという。（田代）

生後百日たつと食い初めをする。女はいやしいから一日早い。ごはんつぶを口に入れてやる。（鎌原）

百日目に、茶碗・箸を揃えて、お膳を作る。清水が出る所の、きれいな石を、丈夫になるようにそえる。（雷生田）

男は百二十日、女は百日。一人前に膳をこしらえてやって、ごはんを食べても食べなくても、一つでも口に入れてやる。（大笹）

百二十日にやる。米粒がのどに入れば、丈夫だ。（三原）

男は一〇八日、女は一〇日に祝う。茶碗、箸を新しくつくり、歯の丈夫な子供に育つようにと石をのせる。

米粒を三つ、食べる子は丈夫（門貝）
生後、百十日か百二十日だったかはっきりしない。この日、小石を拾ってきてよく洗い茶わんの中に入れて子どもに、その石を食べさせるまね

をした。(大前)

(三) 育 児

初 乳 授乳前に救命丸をなめさせ、ついで砂糖湯をなめさせるが、生後三日位乳は出ないから、近所の人からモライ乳をする。女兒には男児の飲んでいた乳・男児には女兒の飲んでいた乳をやる。

母乳が多く出るように、餅・ウドン・あるいはヒゴイをたべる。乳が多すぎると川に捨てるが、やたらな場所に捨てると乳が出なくなるという。

乳の代用として餅米をほとばしてすりつぶしたり、米をすって煮て砂糖を入れたのを与える。(田代)

一回めの乳は捨てる。男の子が出まると近所の女の子の生まれた母親の乳、女の子が生まれると男の子の生まれた家の母親の乳をもらつてのませる。(鎌原)

アガリチチ(生んでから何か月かたった人の乳)を生まれたばかりの子にのましてはいけない。(大笹)

マクリ 薬屋で売っていた。マクリの他砂糖餅をのませたりもした。三日もたれば乳が出る。(大笹)

初誕生 餅をついて近親に配る。アンコロモチを重箱に入れ、風呂敷包みをしよわせる。(田代)

餅をついて背負わせる。歩けないから背中に背負わせるまねをした。(大笹)

一日餅をつくものじゃないというので二日以上つく。重箱に入れて、しよわせる。昔は、箕の上のせた。(曹生田)

誕生餅を今でも重箱に入れて配る。(三原)

もちをついて親せきに配る。わらで編んだイズミに入れられていたりするから昔の子は歩くのがおそく、誕生のもちを背負ったといっておどろいたことがある。(鎌原)

初誕生に誕生餅をついて、子供にしよわせる。昔は一年半位で歩けるようになった。(今井)

初節供 初子の時、嫁方から、女の子にはお雛様、男の子には天神様をおくる。(大笹)

初子の節供の時、女にはおひな様、男には鯉のぼり、お人形をおくる。女の子は、友だちの家に集って、ひなめしを煮て食べる。(声生田)

ナツボウズ もとは女の子は七才までは男の子のように頭の毛を刈ってしまった。丈夫に育つようにといわれた。(鎌原)

トトクタイといってほんのくぼの毛を七才までのこしておく。おぼんの神様が水よけ、火よけにつかんで助けてくれるから、七才まで残しておく。(門貝)

「子どもは神様」といっていた。七つまで。また七つまで七つ坊主としてケシ(頭頂)を残しておいたのでケシボウズといった。トトクタイ(盆の窪の毛)も残した。これは火にころんでも仏さんが来てひき起してくれる。(田代)

ほんのくぼに剃り残した毛を、神様が、火傷する時に引っぱつてくれる。何か食べたい時、トトクタイの抜けるほど食いたいという。(声生田)

ボンノクドの毛を残しておく、イロリに落ちそうになったとき、仏様が助けてくれる。

ひやつとすることを、ボンノクドの毛がたつという。(門貝)

乳幼児には昔は魚をくれなかった。魚が食えるようになるまではトトクビといって、頭の毛を少し残して、あとはみんな剃っていた。「ハアトト(魚)を食ってもいいぞ」という年になるとトトクビの毛は剃った。(鎌原)

お礼参り 七つまで丈夫に育てば、氏神様へ、お礼参りに行く。(声生田)

赤んぼうの髪 一回はきれいに剃るものだというので、小さいうちに

きれいに剃ってしまう。(鎌原)

髪の毛 昭和になってからも頭の毛のまん中だけ毛をのばしてはばっておい家がある。子どもがなくて、孫がかわいしくてしかたなかったので大切にしたのでそうしていた。いろりに落ちそうになったとき、それをもつてひきあげてくれるからだといって、当時としては珍しい例だった。(鎌原)

捨て子 何代もムコがつずいて困る家は生まれた子を三本辻に持って行って捨てておく。そして、あらかじめ申し合せておいた身内の人に拾ってもらおう。この人を拾い親という。(千俣)

百はぎ着もんは百軒歩いて、はいで作る。これを着せると丈夫に育つ。(三原)

子どもが育たない時、方々の家から、切れをもらって作る。ほかの子には着せない。これを百反着物という。(声生田)

弱い子 六人の女の子の次に男の子が生まれたが弱いので、長野県松代のギジヨの坊さんに「オニワクサヤママエ」と願をかけ、七つになればお詣りさせるとして、お詣りしたら丈夫になったという。

女は育つが男の子は次々と育たないので、田んぼの辻や氏神様に捨て、捨て子として、十人も丈夫に子供を育てたおばさんに拾ってもらって育てたら、丈夫になった。(田代)

厄年の輩て子 四十二・二十五の男親の厄年の子は、誕生前に、箕に入れて棄ててくる。前もって頼んで拾ってもらう。拾ったけれど、ここんちはお乳がありそうだからって、親のところへ連れてくる。拾い親のところへは、節供、お正月に、年取りに行く。(声生田)

厄年の子は、箕の中に入れて、席の上に置き、後を見ないで戻って来る。拾うものは一緒に行く。厄子は、役に立たない。立てば偉くなる。(三原)

四十二の厄年っ子は捨子にして、懇意な家に拾ってもらおう。
四十二の二つ子は捨子にする。拾った家に籍だけ入れてもらう。性が違ってしまふ。年取りの日に行ったり、拾い親とはつきあいをよくする。

(袋食)

厄年のときに生まれた子供は捨子して、ひろってもらう。ひろってくれた人をひろ親という。(門貝)

夫婦がそろって厄年の時の子は利口である。厄子は役にたつ。(大笹)
厄年の子ができると、これでウミヤメになるかなという。また四十一のウミドメ、五十五のゴザラシッコ、四十のトラガリ、五十バツカリともいう。(田代)

子守り ちよっと子どもの数が多くて、百姓が小さい家では、女の子を守り出した。女の子は、学校に出られる条件(経済的に)にあっても、学校へ出してもらえなかった。むかしの親は、女は字は必要ないといふので、学校へ出さなかつた。いい家では、子守りをたのんだ。子守りは、三才ぐらゐまでの子どもにつけた。

子守りうたには、つぎのようなものがあつた。

「ねんねん、ネコのけつ、ガニ(かに)がはい、こんだ。おっかさんがたまげてお茶こぼした。」

この歌をくりかえし歌ってきかせた。

大きい着物をこしらえて、その中に子どもを入れておんぶしたこともあつた。この名称はとくにおぼえていないが、なかにおぶうといふ。寒いときに、便利なのでこんなかたちで子どもを背負つたのである。(三原)

千俣では明治時代までは、信州から女の子を買い、つ子として、連れてくるものが多かつた。信州下高井郡高山村牧や上高井郡東村米子、上田市や須坂市付近から、生活に苦しい家の女の子を四、五才なら十才ぐらゐまでのうちに、買ひつ子にした。十二、三里もある道のりを、菅平を經由して、田代や鳥居峠を越えて、本人の親が同道しておぶったりして連れて来た。

信州から来る商人が口をきいて、買ひつ子のお話をまとめた。籍も移すので、言わなければ、他人にはわからないように、親子の関係を結



イズミ (三原) (撮影井田安雄)

んだ。家族と同じに扱われ、里子として育てられた。里子は子守りや仕事を手伝い、年頃になると、適当な所に嫁にも出された。村の少し離れた家では、たいがい一人や二人(姉妹)の貰いっ子があり、くれた家とも、十年くらいは親戚のようなつき合ひもしたが、相手方は貧しい家庭なので、あまり長くはつき合わな。貰いっ子の里帰りは、一、二度するくらいで、あまり帰らない。口まきをする専門家もいたが、ケイアンとは言わず、商人なども世話をした。くれ方の親に対し、いくらか謝礼をしたが、別に程度はなかつた。(干俣)

あまり裕福な家でもなくとも、家に子守をするくらいの子どまがいなければ、村内でも村外からも頼んだ。お祭りに小ずかい銭をくれるくらいだったが、「子は子守りに似る」といわれた。

子どもが嫁に行くときは子守りをしてくれた人をよんだり、年老つてからは、アメを買ってやったりして交際が続いた。(鎌原)

子守りは生後二十日もたつとすぐ頼む。こうしないと山仕事ができな。山仕事といつても女子の場合は畑のイモ、馬の飼料、大豆、小豆をつくる程度である。(田代)

普通子守りの子をおいた。近隣で、借りたり貸したりしたものだ。(大笹)

エズミ エズミはわらである。この中にぼろをして子どもを入れた。

生まれて一カ月もたつと、エズミがいいぞ、ぬくくつていいぞなどといつて、エズミに入れるようにした。大体、お誕生日がくるくらいまで入

れた。長い場合で一年くらい。赤ん坊はいだすようになると、子守りをたのむようになった。どのくらいの期間いれるかというきまりはなかつた。

朝赤ん坊をエズミに入れて、昼に出し、おむつをかえたり、下をかわかしたりして、また入れて、はたけに仕事に行つた。泣きだせば、とによりでもいと、エズミをゆすつてお守りをした。とくに赤ん坊をかわいがるような家では、この中に入れておくことはできなかつたものだ。(三原)

イズミを女しが赤ん坊を入れて山へしょつていったこともある。ワラか竹で作る。ぬくいから仲々いい。(袋倉)

ツグラともい、竹製の籠で、下にわらをしいて子供を入れ、まわりをポロをつめて子供が動かないようにした。半日でもブッコンでおく。山へしょつて行くこともある。

子供があげられてはい出す頃まで、エズミで育てる。生後半年位まで。丈夫に育つた子供の使つていたエズミを借りると丈夫に育つという。

(今井)

お産と夫 主人がいるときに子どもが生まれたときは、次のお産のときも必ずいなければならず、逆になかつたときは次のときもよそへ行つていなければならぬ。(鎌原)

トウネツコ 男が生まれると、トウネツコが生まれたといつてよろこんだ。(門貝)

オボガミサマ 乳児が眠りながら笑うのを、オボガミサマにツマレタといふ。(田代)

オニツコ 生後六ヶ月以前に歯の生えた子をいう。(田代)

乳歯 下の歯がもげると屋根に投げる。上の歯がもげると流しの下に投げる。鬼より先に生えろと唱える。(声生田)

歯が初めて欠けると、上の歯は縁の下、下の歯は屋根にあげる。このとき「オニの歯はあとに生えろ、おれの歯は先に生えろ」という。(田代)

双生児 男児と女児の双生児は、心中の生れ代りという。(田代)

産褥で死んだ女 村の出はずれの清水の端に、サラシの赤布を引張って置いて、通りかかると人に水をかけてもらう。お産で身がケガレ、血の池に入っているの、色があせるときれいになって、血の池から上ってエンマ様の所に行けるという。(田代)

死産 医者に証明書を貰う。親戚でない人が半紙を張って神棚をふさぐ。兄弟だけで墓地に葬った。(千俣)

不妊者 オトコツクリの身体という。これは相性が悪いからだという。こうしたものは、夫婦別れることが多い。(田代)

二、年 祝

七五三 七五三はやらなかった。(大笹)

厄年 男二十五才、女十九才。どこかへお参りに行って厄除けをする。別所(長野県)の厄除け観音に行く人もいる。(鎌原)

女は十九、三十三(大厄)、三十九、男は二十五、四十二。(大笹)

厄除け 信州のヨウカドにある厄除け観音様にお参りする。女衆は十九の時にやってあとはかまわなかった。(大笹)

米寿の祝 八十八才の米のお祝いをすると死ぬからというのでやらない。(鎌原)

三、婚 姻

(一) 結婚の条件

婚姻圏 昔は、村内が大体九割ぐらいたった。近くでは、長野原、遠くで原町。親戚がある場合には長野原との婚姻が多かった。(芦生田)

鎌原の中が多い。他村では大笹との婚姻が多い。大前とはほとんどな

い。芦生田には行く人もいる。長野原とは少ない。(鎌原)

昔の縁組は、村内(部落内)が多かったが、信州との縁組も多かった。表上州よりも信州の方がずっと多い。長野原の須坂からきた嫁が多い。新田町にあった製糸場に働きにきていて、こちら(縁恋)の人と一緒になった例が多い。今は信州との縁組はあまりない。(大笹)

田代・大笹・大前とが多かった。長野とはなかった(明治の頃)。(千俣)

昭和以前はほとんど田代部落内の結婚で、部落外としても縁恋村内であり、長野原との婚姻はなかった。

若い男女は祭などの機会に知り合いになることが多く、恋愛結婚もかなりあったが、何れにしても部落内のことなので、大した問題はなかった。(田代)

結婚年令 男の場合：戦前は、早いので十六才(これはめずらしかった。二十才ぐらいは早いほうだった。ふつうは兵隊検査がすんでからで二十五、六才ぐらいたった。戦後は、早いので二十二、三才、ふつうで二十六、七才。

女の場合：戦前は、早いほうで、十九才から二十才ぐらい、これは戦後もかわっていない。ふつうで戦前も戦後も二十二、三才。(芦生田)

男が二四、五才、女は二〇才位が普通であった。(田代)

夫婦の年令差 よめとめはわるいという。四つちがい、九つちがいはわるいといった。

女性のほうが一ヶ年上の場合はいいとされ、金のわらじをはいてもみつけてもみつからないといわれた。

男女とも総額のものが一揃になるのも、金のわらじをはいてもみつけてもみつからないといわれている。(三原)

年まわりは、同じ年はともかく、女がひとつ年上がよい。(鎌原)

結婚の条件 コスカ三合もはたらきに行くな。

嫁の一つ年上は金のワラジをはいてもみつからない。(西窪)

嫁選び 恋愛結婚が多かった。恋愛のきつかけは、女衆の集りに同年輩の若い衆がおしかけるのである。

三月の節供に女衆は宿に集まり、料理をして、歌をうたって一晩楽しんで。そこに若い衆が酒など買って料理、強力にかけつけること。をい、恋愛になることが多い。(大笹)

恋愛結婚のことをくつつきまたはねばりつきという。(門貝)

恋愛して反対されてカケオキ(チ)した場合はホレトリという(西窪)結婚に反対されると、男が女を連れて逃げる。あとは誰かがまとめた。(大笹)

恋愛のことを以前は「くつつき合」といって、さげすまれた呼び方をされていた。恋愛関係になると親が先方に出向き、「話をつけてくる」といった場面もあった。

見合い結婚といっても以前は「見合い」などしなかった。だから結婚するまでお互いの顔を知らない場合が多かった。(千俣)

むかしの結婚 むかしは、本人同志は知らないで、仲人や親のいうとおりに結婚した。

恋愛結婚は珍しいことで、そのことをとしよりの時代には、「のぞっこみで行け」といっていたという。

現在のとしよりの場合はなしとして、つぎのような例がある。
Aさんの場合は、夫になる人の弟のほうがきりょうよしであって、Aさんは、その人が自分の夫になると思って、つくづくながめていたら、弟は「おれじゃない、おれじゃない」といったという。そのとき、夫になる人は、きりょうに自営がなくて、下をむいていて顔をあげなかったという。

Bさんの場合、自分の夫になる人は、前に一度結婚したことがあった。前の嫁だった人は、仲人に一晩だけでもいいからと説得されて嫁にきたが、本当に一晩だけでにげかえってしまったという。夫の母親がBさんの家に来て、親をだましてBさんをつれていったという。Bさんの夫は

酒のみだったのでもないやだったが、実家の親からは「えってろ、えってろ」といわれた仕方ないうちに、子どもが多くなって、とうとう居ついてしまったのだというのである。(芦生田)

仲人 村で悪意にしている、両方とも気の合う人を見つける。二つ三つやると、あの人がいいことになる。

日のいい日に、樽立てといつて、一升樽(一升瓶)と、さかなを持つ行き、不調法の仲人させてもらいますと挨拶する。その時、嫁さんが、おりも残さず飲むと、これできまる。春樽立といつて、春やる人もあるし、秋やる人もある。(芦生田)

なこうど(仲人)は、娘の家(くれ方)へ行きよい人を頼む。村内が多いのでほとんど見合はない。根こしらえをする人と人形という仲人があるが、人形は頼まれ仲人のことである。話がこわれたようなときは、仲人は「スリコギで腹を切る」という。(鎌原)

親戚の元老がなった。土地の名望家になった。(大笹)
親の家の親が見当をつけた娘を買ってくれと仲人に頼む。村の顔役、娘の家と都合の良い人を仲人に選んで頼む。娘の家で気に入らない仲人を立てると、仲人が悪いから嫁にはやらねえという事になってしまう。又、頼む時に誰でもいいから、適当な娘がいまいかという頼み方は大概駄目になる。(今井)

仲人は嫁と親しい人や、頼みやすい人に、もらい方がたのむ。仲人とムコの近親者一人が、もらい方の家からシメダル(祝い樽)一本をもって行く。嫁方では近親者を立会わせてお祝いをする。(田代)
仲人七ツツといい、仲人は七回までウツをついてもいい。(今井)

貰い方の親戚代表のような人が仲人になる場合が多い。仲人は結婚式が終るまでその役目を果たす。(千俣)

(二) 婚 約

手結び 仲人が正式に嫁の家へ貰いに行く。酒を一升持参する。嫁方

では両親、本人、オジサン、オバサンなどが待っている。話がまとまると、一升を全部飲む。娘がその酒を飲むと、ことわれなくなる。仲人は娘の飲むのを見届けて、舞の家へ空ビンを持って報告する。

又、その時に式や結納の日取りを決める。(今井)

「タルヲタツ」ともいう。もらい方で用意した酒を仲人がくれ方に持ってゆき、神仏に上げた後で冷酒を娘にくれる。娘が飲めば承知したことになる。その席には叔父、叔母も同席し、ひとまり冷酒を飲むと燭をしてお出。『オリを残すな』といってみんな飲んで、空びんを持ち帰ってもらい方に報告する。もらい方も親せきなどを集めて待っていて同じように儀式をする。門員の方はいねいで、鎌原はかんとんにする。(鎌原) 仲人が酒一升を持って嫁方に挨拶に行く。本人、親、親類代表が待っている。酒一升は全部飲んでくる。嫁が酒を飲むと承諾の証しになる。酒を飲めばいやだとは言えない。

空ビンを持って、酒を飲んで承諾したと嫁方に行き報告をする。(袋倉) 婚約を「手ムスビ」といっている。この日には、仲人がシメダル二本を「貰い方」に持って行き飲む。そして婚約の成り立ったことの確認とか、また結納の打合せをする。この時立ち合う人は婿方の叔父である。

(干俣)

手むすびまたは樽入れという。仲人と新郎の最も親しい男の人が行く。嫁方では親戚を集めておく。酒一升を持って行くが、その場で全部飲んでしまう。仲人は空ビンを持ってきて、「かくかくのごとく、済ましてまいりました」とみせる。(大笹)

タルイレとしてヒメ樽に酒を入れて持って行く。お返しは特けない。タルイレが済んでからことわれないし、責任問題になった。(西窪)

結納 結婚式の前にする。昔は衣類を一式みんな持ってゆくので、仲人と一番の近親者がついてゆき、目録をもち、先方に渡す。酒が出される。

鎌原では結納の受取りは書かない。結納金ももらいっぱらいにする。大

前では半分返すことになっているという。目録のあて先は嫁あて、受取りはムコあてにする。(鎌原)

式の前の吉日を選んで行く。仲人と新郎の父親が一緒に行く。その折ヤナギダルトゴママニ匹のに入った薬ストッコを三とこしばって持って行く。

くれ方では、薬ストッコのしぼりを二とこふやして五とこにしてかえず。(大笹)

昔はなかった。朝げイチゲンに来る時に、着物類、お髪道具と、だまり十円(だまって十円)、といつて、十円持っていって、三円のもあった。今は普通三千元だ。(西生田)

式の当日か前日にする。いい日を選ぶ。

仲人と聲のおじさんで行き、目録と帯、着物、下駄、髪の上の道具一式、末広、祝樽などこうりに持参し、五〜七膳にならべて渡す。嫁の両親、嫁、おじさんなどがいる。

聲のおじさんが「早速承知してくださって有難うござんす」という意味の長い難しい言葉を使った。何を言っているか分らず返事に困ったりした。(今井)

式当日の朝、仲人と親が嫁方に結納品を持参する。嫁の着物、帯、下駄、頭道具、ハコセコ(嫁の懐に入れる箱、中に鏡が入っている)、白紙(嫁の送り状を書くわけのもの)など目録をコピーに入れて、親父が背負って行く。又、その場で親類目録をとるかむす。

嫁方では結納品を近所に披露する。(袋倉)

昔は仲人と近親者二人、計三人が行ったが、今は仲人とムコ方の近親者一人、計二人が行く。結納は式の日朝早くムコ方から、嫁が式のときに着る着物、小袖、末広、草履、スルメ、麻などを納める。結納金は最近ほぼ平均が一〇万円位で、ハカマ代はない。結納に際してムコは嫁の部仲人に挨拶はしない。(田代)

仲人と嫁の叔父が貰い方の家に行く。その時、叔父が嫁の道具持ち

となる。ここで婿方が嫁の家に品物を渡すわけだが、目録は書かないのが普通である。(干侯)

結納金 明治の末ごろから、結納金はふつう十円であった。そのころ先方から結納金をいくらくれといわれない場合は、結納金は十円であった。これをだんまり十円といった。家が困るとか、物をもたせて嫁にくれるという場合には、そのころのことで二十円の結納金を納めた。昭和四年のときには、結納金は二十円がふつうであった。三十円が閏の山だった。

特別の事情がある場合には、結納金のうわがきに十円と書いて、中味は五円という場合もあった。ある人の場合は、いとこ同士だったので、そのようにしたという。(三原)

昔から「ダンマリ何升」とかいて、だまっけていても、おのずから決まっている相場があった。昔は一兩くらいだったと思う。(干侯)

(三) 嫁入り

結婚式の日、時期 こよみなどを見て、よい「お日」を選ぶ。時期としては春が多い。それも一月から三月までで四月に入るとない。また秋も少ない。秋は取り入れて忙しいからである。(干侯)

むかしの結婚式 よい日を選らんで式をあげることは、むかしも今もかわらない。

式の三日前から、近所の人たちをたのんでごちそうをつくった。ごちそうは、ようかん、すし、きんぴら、にまめ、しらあい、しみどろふなど、買って用意したものは、コンブと砂糖ぐらい。

前日は必要なもの(ごちそう)を全部そろえておく。

当日は、客をよぶ。

朝、仲人と婿と親せき(近しいもの)が嫁の家に行く。嫁はウマに乗ってきた。タンスをウマの背の両側につけ、真中に布団をしいて嫁が乗った。ウマには、鉢巻、首には鈴をつけ、背中には長びよけといつて、ウ

マの持主の名入れのものをつけた。馬方はしっかりした人をたのみ、ウマもなるべくおとなしいのをかきた。ウマはかざったので、嫁のウマのようだ」と人びとはいった。ウマに乗った嫁が通ると、村の人たちは、「よーめ、よーめ」とさわいでにぎやかだった。嫁入道具はたんすと布団ぐらだった。髪も、髪結にたのまなくて、近所の器用な人にしてもらった。

嫁がもらい方についての順序はつぎのとおりである。

① 提灯でむかえる。もらい方の子どもも男ひとりずつ。ひで(松の木根っこ)をともしてむかえる。

② お勝手口から入る。いろりのまわりを「の」の字のようにまわる(「の」の字まわり)。

③ おちつきを出す。すしと最中のお菓子。

④ お茶をだす。

⑤ とりむすび。夫婦さかずき(三々九度のさかずき)、男嫁・女嫁が酒をつぐ。このとき、若衆がしらが、スルメをまるめてうすきぎったのを、さかなといつて、三々九度のさかずきのと、婿さんの手にやり、嫁にも同様にする。これは後戦前までやっていたこと。

⑥ 親子さかずき、婿と嫁の親のあいだにおこなわれる。

⑦ 兄弟さかずき、婿の兄弟と嫁とのあいだにおこなわれる。

⑧ 嫁は仕度をとって、自分のもっている一番いい着物をきて、祝宴の席に出る。(芦生田)

ムコ入れ 式と結納を一日のうちにやる。結婚式の日の午前中にムコ入れをする。仲人がムコを連れて嫁方に行き、父親とムコのサカズキをやる。婿立てをしてごちそうするが長くはやっていられないので一時間くらいで帰ってくる。その席には嫁は出ない。(鎌原)

式の当日婿方から嫁方に行く。婿方の人数が少なく、くれ方の人数が多い。

そこで、婿と嫁方とで盃をかかず。親子サカズキ、兄弟サカズキ、

親類サカズキをする。

仲人とムカエ二人が残り、翌等は帰る。(袋倉)

翌と近親者で七人から十五人位で午前九時頃嫁の家に行く。お茶を翌みやげとして持参する。

嫁の方では両親とイチゲンンのトリモチに近い親類が待っている。

親と嫁方の肉親などとの盃をとりかわす。親子サカズキ、兄弟サカズキ、親類サカズキ(代表者のみ)をとりかわす。

その場に、仲人、ムカエという夫婦も二人が残り、翌などは帰る。

(今井)

式当日の婿は、仲人と一番親しい親戚数人と一緒に嫁の家に行く。もちろん正装して行く。そこで、嫁の両親と親子結びをする。(大世)

婿のひざくずし、婿入りのあと、婿は伊ばたによって親しい人と挨拶をする。その時婿は一寸そこであぐらをかく。それを婿のひざくずしという。(大世)

朝、嫁の夜の明けないうちに、仲介者が娘を婿の家に連れていってしまふ。それで式はおわり。明治末年から大正の初めにかけてはやった。

朝起きたら嫁がきていた。そこで朝嫁という。その日から野良仕事に出た。いった。(大世)

ミタテ、嫁の仕度ができた頃、仲人夫婦がシメダルに行った近親者夫婦と一緒に、迎えに嫁の家に行く。嫁の家でミタテという祝いがする。

これはムコの近親者と嫁の友達をよんで、昼食として酒食をとる。これがすんだ頃が迎えの着く時となるよう見計る。このムカエが嫁を連れてくる。そのとき嫁の近親者が一八二十人位ついてくる。(田代)

迎え、翌は行かない。仲人を含めて五・七人で行く。あいさつに「帰る」「出る」「お茶」という言葉は使わない。

お茶にするという言葉はこわすという意味がある。おではなという言葉をかわりに使う。(西窪)

嫁入り、嫁は馬に乗り、鈴をつけて唄を歌いながら来る。(西窪)

ゴンボーウマを飾り立てて荷物をつける。馬方にひいてもらう。嫁も歩いて行く。(今井)

嫁入りの道中、嫁さんは、昔は馬で行った。馬まで着かざらして、鈴をつけた。嫁さんその馬の荷ぐらに乗せていった。その後は、荷物と一緒に荷車で揺られて行った。(大世)

最初にゴンボー(御奉)といって、嫁の道具が馬で運はれて行く。この係は婿の弟が中心となる。次に家紋入りの提灯、次に案内役。次に仲人、女仲人が嫁の手をとって歩く。近くの場合は歩くが、遠距離の場合、馬を使用する。(千俣)



御祝儀のときの馬の飾りの腹掛け(今井)
(撮影丑木幸男)

ツレ、嫁方で女の子を連れて来る。祝言の日は嫁はそのツレと一緒に休む。(袋倉)

ナカヤド、翌の家を通りすぎない近所の家を頼む。オチツキとして寿司や赤飯などを食べる。ナカヤドに近所の子供二人が弓張り提灯に昼間でも灯をつけて、嫁を迎えに行く。(今井)

ヤスミ宿には近所の身内の家をたのむ。行って帰るのを忌み、下の家を使う。(西窪)

干候の場合、中宿はない。(干候)

嫁の親戚は、式の準備がととのうまでそこで待っている。中宿ではオチツキ(お茶とお菓子)を出す。また、イカのやいて丸くなったのをさいて出す。仲人も嫁と一緒に中宿にいる。(大世)

他村から嫁をもらうときはどこか適当な家を中宿にし、オチツキといてスシ二つとかモナカ二つなどにお茶を出して休んでもらう。

嫁入りで花嫁が歩いているときは子どもたちが「ヨメムコカボチャ、ゴンボヤイテツツトウセ ヨメ ヨメ ヨメ」と叫びながらついてゆく。嫁は笑うものではない、といわれた。(鎌原)

嫁が親の家の近所に来ると、子供達が「嫁見ろ、嫁見ろ、嫁のべべはカワラケだ、ゴンボ焼いてつとせ」とかなる。(今井、袋倉)

入家 オクリイチゲンは縁側から入り、嫁はトボウから入る。トボウにはヒデノアカリとチヨウチンをもつた二人の人があかりをつけている中を女仲人に手をひかれて入り、いろりのまわりを「の」の字まわりにまわってそこに座り「嫁のみやげ」といって、しゅうとさんに手ぬぐい一本とか、お茶一本を出す。これは形式的なもので、その後一たんざしきに座る。(鎌原)

嫁はオカッテから入る。嫁はオカッテから貰い、舞はザシキから貰うという。(今井・石津)

嫁はお勝手口から入り、一応仏壇のある部屋に行く。家に入るとき子どもたちが「ヨメモコカボチャ カンナデケズル」とはやしたてる。(干候)

嫁が入るとオクリンデーに入り、仲人と嫁方の親類が並ぶ。最初に舞が出て来て夫婦サカズキをする。終ると舞はひっこみ、親が出て来て親子サカズキ、次に兄弟サカズキ、親類サカズキを行なう。三つ重ねのサカズキで行なう。十才以下の近所のふた親揃っている男の子と女の子がサカズキにつぐ。オチヨウ、メチヨウと言う。

サカズキが終ってイチゲンザシキになる。(今井)

祝言 子供がカドで松ヒデを燃して出迎えていると中宿から来る。

嫁が家に入る前に近所の子供が「嫁舞カボチャ」嫁のべべかわらけだ、ごんぼう焼いてつとせ」などかなる。

嫁だけお勝手から入り、姑がづれてイロリのまわりを一回まわってチャノマに行く。チャノマの仏壇の前で取り結びをする。夫婦サカズキ、親子サカズキ、兄弟サカズキ、親類サカズキの順で行なう。オチヨウ、メチヨウの子供がする。

その後、オクリンデーで披露宴になる。レイシユをまわし、末広にする。最後には二百位入るものでまわす。親父のレイシユ、お袋のレイシユ、嫁のレイシユなど何度もまわる。お客をつぶさなくては御馳走にならない。

その後アトザシキをする。近所の人や女衆で結婚式を手伝ってくれた人に御馳走する。(袋倉)

婿の方で式の準備がととのうと、使いが中宿に行く。

嫁がくると門口でたい松をつける。(勝手にあがれば消す)嫁は勝手口から入る。(婿の場合は、座敷から入る)そして炬の回りを三回まわ

て茶の間の神棚・仏壇の前に坐る。そこでトリムスピー三三九度一の盃はじまる。その後親子盃、兄弟盃と続き、その後披露の座敷に行き酒宴となる。(大世)

入口で男女の子供がタイ松をもちす間をくぐって家に入る。入ると仲人がイロリのまわりをまわる。(西窪)

家に入るときムコと近親者が入口に迎えるが、その折にはツトッコという薬束二本を入口の敷居の上にならせて、これを嫁にまたがせる。またぐとムコは夜が来たという。

嫁はこうして勝手から、近親者は縁側を通り、ザシキグチから式の部屋(仏壇のあるチャノマーハ一〇畳)に入る。

次いでウタイによって仲人が三三九度の盃を交す。この謡い手をトコ

ロという。三三九度のお祝いをシンキヤクという。

ここで三三九度の夫婦盃がすむと、親子盃を交すのが奥座敷に入る。このとき嫁の親がくる。昔は嫁の親は御祝儀の式には出席しなかった。

嫁の親はムコの親と挨拶して、祝酒を飲んで帰る。この間は極めて半時間である。

シンキヤクがすんでムコの近親者をお祝いをする。これがすむのは夜の十一十二時で、アトキという。終ると嫁はムコの親夫婦に挨拶して寝る。このときムコの女親が床を敷いてくれる。またこの時間に嫁方でもお祝いをしている。(田代)

当日降れば、ふりこむといっている。お勝手から入って、いろりのまわりを、の字廻りに廻って、座敷に入る。お勝手から入るのは、お勝手仕事をするため。

嫁は台所からも見え、婿は座敷からも見えという。(大尺からもらうといはるから、貧乏からも見えという)

二度嫁にならないように足がやめて立てなくなるほど、坐らせておけという。(声生田)

嫁みせ トリムスビの最中には障子を外してみんなに見せる。しめると穴をあけたりますが、障子は破かれたほうがよいといった。(鎌原)

ゴシュウギは夜があたりまえて、子供達が障子に穴をあけてのぞっこみ、嫁の批判をした。(西窪)

新婚でも婿と嫁が並んで歩けば笑われた。子どもたちは「女と男とヒッチャンチャン」といってばかりにした。(鎌原)

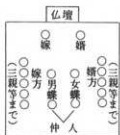
トリムスビ チンキヤクサン(嫁)を上座にしてムカエ(もらい)方の近親者)を下座にして席をとり、トリムスビをする。

トリムスビがすむとしゅうとさんをお呼んできて嫁を渡す。そのときに親子の盃をする。ムコはそこで退席して客たちがみんな座について宴になる。(鎌原)

三々九度、親子盃、夫婦盃、兄弟盃を家運のよい家の男女の子供のお

酌でかわす。仲人が話をやる。(西窪)

式は仏壇のある部屋で行う。関係者の座席は次のようになる。



・男婚女嫁は六才から十才位までの女の子ども。
・夫婦盃、親子盃を交す。また、兄弟名乗りもするが村内の場合、お互いに顔を知っているで略す。

・仲人の報告があり、祝辞もあつて祝宴となる。

○式や披露宴が済むと、仲人はテムスビの時、婿方に行っていたシメダル二本をあずかつて、嫁方に行き、無事に済んだことを報告する。(干保)

トリザカナ トリムスビのときに新郎新婦の前にトリザカナといつて、イカをまるめて焼いたものを小さく切ったのが大皿に入れて出される。サカズキゴトのときにはさんでくれるのだが、これは食べてはいけないもので、膳の上におけばよい。ところがある人が食べてしまった困ったことが後々までも話になっている。式の前に仲人が教えておくべきことの一つである。(鎌原)

オトリモチ 結婚式の酒の席をとりもつ人で、親せきの中でも気のきいた人を二・三人頼む。(鎌原)

オシロウパンは飲めてはしゃげる人がなる。ヒロメをもち上げる大助な役。(西窪)

イチゲンザシキ 末広と言つて段々盃を大きくして行つて飲む。しまいは二合位入る大皿になる。家の末広、舞の末広、嫁の末広と言つて飲ませられる。夜中の十二時頃までやっている。

その時に嫁は別ザシキでしばらく休んでから、仲人が嫁を姑に「不束ですが」と言つて渡す。それからは姑が嫁を使つてよい。仕度をかえてイチゲンザシキの手伝いをする。(今井)

酒の席もぎやかになりもうたくさんというときにはイチゲンの代表が仲人を通じたりしてお勝手先へ申し入れをしてもらう。何回か連絡すると勝手元もタイムングをみて末広を出す。一本びきのさかなを末広につけ、サハチという大きな盃を出して仲人の次にイチゲンという順でまわし、これが出ると酒は終りで夕飯になる。(継原)

結婚披露宴は、末広という赤くデカイ盃が一回りするとオヒラキになる。(大笹)

シンルイザシキ イチゲンザシキが終るとそれに呼べなかつた親類や友人をよんで飲ませる。嫁・舞がおしやくに出る。大体夜明けまでやっている。(今井)

ゴクローフルマイ シンルイザシキの後に式の手伝いに来てくれた女衆をよぶ。嫁・舞が盆に、羊羹・すし・しめ豆腐・数の子・かんびょう

祝儀の食物 銘々盆に、(今井)

引出物 ミジンコの菓子で、イチゲンとお客とは差をつけた。ヨメの引出物は仲人がもらつてゆくことになっている。

引出物は夕飯とともに出す。(継原)

膳 式に使う膳は、親類で持っているところから借りてきて使つた。お礼は引出物を一人分やればよかった。(継原)

早目に帰る、嫁方の方へ報告に行く。(継原)

お茶よび 結婚式の翌日、近所の女衆を昼食に招ぶ。お膳を出し、酒を出して昼めしを食べてもらふ。

この席には嫁の父親がアトタズネに来る。父親がないときは母親が酒一升もつて来て、お茶よびに参加して近所の人たちにあいさつをする。

引出物はリュウキウサザレという落雁で、はがきより少し大きめのものにきまつていた。(継原)

翌日朝食がすむと、近親者あるいは家の者と一箱に隣組を廻つて挨拶をし、その後近所の婦人を選んでオミキ、お菓子を出して、嫁が挨拶をする。(田代)

式の翌日村中の女衆をよぶ。女仲人が肴をはさんでやり、嫁がお酌をする。(袋倉)

結婚式の翌日に組中の人を呼んで御馳走する。(今井)

翌日、近所の女衆を呼んでふるまう。(西窪)

アトタズネ 嫁の親父が式の翌日に酒を一升持つて舞の家に来る。嫁の両親はイチゲンザシキには出ない。(今井)

タズネはビンをつるってくる。(袋倉)

式の翌日、御祝儀を包んで、ムコの家にヨメの両親が仲人と一緒にくる。(田代)

二日に父親が酒をもつてたずねて来る。(西窪)

ミツメ 三日めに、嫁婿にシュウトがついて嫁の実家へ行く。おこわをふかしておひつにつめて、シュウトサンが背負つて行く。実家でもおこわをふかし、嫁方では近所や親せきへ重箱に入れて少しずつ配る。嫁のおこわのようだというのはこのことからおこわのことばである。

婿にシュウトは帰る嫁は一泊する。(継原)

ミツメ(三日目)に姑がつれて行く。こわ飯を少しもつてゆく。一日泊つて翌日母がおくってくる。

みやげなどの量に少ないことを、嫁のみやげのようだという。(西窪)

ミツカメ(里帰り) ムコ夫婦、ムコの両親と仲人が、嫁の家によばれる。このとき御祝儀をもっていく。ムコ夫婦は泊らないで帰る。(田代)

三つ目で帰る。嫁、舅、姑が一緒に行って、嫁だけ泊って、舅、姑は帰る。舅はとまるもんじゃねえ。

翌日嫁の母が連れてくる。

三つ目で双方の顔合せ、挨拶は終る。(袋倉)

嫁と舅と姑が、式の三日目に嫁の実家に行く。おこわをしょっていく。

姑だけ帰り、嫁と舅は泊っていく。(今井)

式後三日目に婿と嫁がつれだつて嫁の実家に行く。姑がついて行く。

赤飯を三升位ふかしてオヒツを背負っていく。その赤飯を親戚、近隣の人に少しずつくばる。だから少しの品物(土産)などを嫁の土産のよう

だという。嫁方でも、ミツメからの帰りに赤飯をふかしてよこし、婿方の近所にくばる。(大世)

式のと三日目に嫁は里帰りをした。

姑が赤飯をふかして、三升ぶかしの入る大きなおひつを背負って姑と一緒に里がえりをした。婿もついていく場合もあった。姑はその日にか

えつてきた。嫁は二日も三日も泊ると、ナベカマがわれるといつて、一晩でかえってきた。このとき、里の母親が、同じ量の赤飯をもって、嫁をおくつてきた。(西生田)

お礼錢 嫁が里がえりをするときに、土産物のほかにお礼錢をのせてもつていった。

子どもでも沢山いえるようになればやめた。戦争前まではこのならわしがあった。(袋倉)

親類まわり 嫁はミツメから帰るとき母親とおこわをもつてきて、親類に重箱でくばり、手ぬぐい一本ずつもつてまわる。(鎌原)

三日目に手拭をもつて近所にアイサツしてまわる。(西窪)

婿の母が嫁を連れて、茶飲み仲間の家に紹介してまわる。この時封筒

に嫁の名前の書いた手拭いをまわつた家に置いてくる。(千俣)

お歯黒 お歯黒は六十年前まではした。嫁にくるときはお歯黒をつけてきた。フチの実を用いた。イロリの隅において、お祭りやお彼岸などにはかならずつたものだ。(門貝)

四 その他

トンビノハネ 仲人に対する謝礼。式の翌日、ムコ方、ヨメ方両者で行く。ムコ方でお膳、近親者の一人は樽、それに近親者がついていく。

酒、祝樽(一升)一本と、薬の上を切らないで、経五センチ位の束にして、その中にゴマを三〜五匹入れ、三ヶ所結えて(これをトウコウという)これをお膳にあげてもつていく。その他お礼金を適当にもつていく。(田代)

仲人礼のことはトンビノハネといった。お礼には、両羽根(もらい方とくれ方の両方)で一緒に行かねばならない。もらい方で酒一升用意し、

両方でお金をもつていった。お金ももらい方のほうが、すこし多かった。トンビノハネがきたら、仲人は近所の人をよんでお茶をだした。(西生田)

仲人礼のことを、トンビノハネという。これは、ミツメのときに、赤飯につけて仲人のところへもつていった。

「両ハネあれば近所をよべるが、片ハネじゃよべない」ということがある。これは、トンビノハネの額のすくないことを意味していることばである。仲人礼をもらうと、近所の人たちをよんで一杯のませて祝う人もあった。(三原)

仲人へのお礼は、酒一升にのし袋に入れた金巻封で、くれ方、もらい方からする。仲人は、おじ、おばなどを集めて披露する。

片方だけしかお礼をもらえなかったときは「片羽ではとべないから」といって、おじおばをよんでお祝いしなくもよい。(鎌原)

式が済むと、後日、婿方嫁方から酒一升づつを仲人に贈る。仲人はその酒を近所の人に振舞った。(千俣)

仲人礼として金一封、酒一升をもらうと、仲人は親しい人と呼んで、「私はこれこれ(仲人)をしたがよろしくたのむ。」といてトソビのハネの披露をする。(大世)

仲人の所へ酒一升・金などを持ってお礼に行く。嫁方なり婿方なりだけの時は片ハネと言う。仲人が近所の人に行く。(今井)

仲人とのつきあい お世話になった仲人には年始の挨拶、また、子どもが生まれた時にも挨拶に行く。それも第一子までが普通である。(千僕) 嫁が実家に帰る日 嫁が夫婦して実家に帰るのは、三月のヒナ節供ぐらいである。もともと部落内結婚が多いので、わざわざ実家に帰る必要もなく、ふだんでも用のあるときは帰った。村内婚の結果である。(田代) 三月の節供には嫁が婿と一緒に里帰りをする。結婚後、初めての節供にはポタ餅を持って行く。「やったり、とったり節供のポタ餅。」という言葉がある。(大世)

里帰りに、からっぽで来た嫁が一番いいといわれた。

よそ村から来た嫁は、年中行事の度に年に、五、六回は里がえりをした。それも嫁にきた年ぐらいで、それ以後はあまりかえることはなかった。

里帰りをして、泊るのはだいたい一晩ぐらいで、多くて二晩ぐらい。

それ以上は実家のほうで泊めなかった。(芦生田)

いい嫁 これはむかしのはなしである。

ある家の嫁さんは、機も織れ、縫うことも出来、山の仕事も出来、姑ともいいもしいないで、はいはいといっただけでもする。そういうのがいい嫁といわれ、むらにも何人もいなかった。(三原)

嫁の生活 風呂：むかしは一週間に一度ぐらしか風呂をたてなかつた。風呂をたてたときには、近所の人たちをよんだ。嫁は、家族や近所の人たちが入りきたるとき、風呂たきをしていた。むかしは、体を洗う場所がなかつたので、風呂桶の中で体を洗うので、最後に入る嫁は、あかが沢山たまつている中に入るので、まるでしょんべん(小便)だめに入

るようだとされた。また、かこいがなかつたので、皆から見るところに風呂があつたのではずかしかつた。

就寝は、戸じまりとかあとかたづけ、火の始末などをして最後に寝た。

いりりの座席：嫁は台所に面したキジリにすわって、ポヤをくべるのが役目だった。(芦生田)

嫁のつとめ 姑がいるうちは嫁は嫁とよばれた。嫁にきて十年ぐらいたたないと、くら(土蔵)へは入れてもらえなかつた。また、食事の場合なにかつくる場合にも、姑さんに材料をはかってもらつてからつくと。(三原)

足入れ い日を選んで仲人が連れて行く。(鎌原)

婚姻関係用語

おしかけ嫁 男と女が仲よくなったが、誰も世話をしてくれない。なんとしても一緒になるといって男の家へおしかけてきた嫁のこと。あの人は、おしかけ嫁できて満足している。子どももできたし。などと、世間ではうわさばなしにする。こういう例は、むらに何人もいない。(三原) ノツケオカミ 姑がいなくて、むらに何人もいない。この場合には、嫁としてのつとめをしないで、てんづけ(はじめから)オカミの仕事をすることである。(三原)

すえ風呂むこ 後家のところへ籍ももたないで入りこんで、寄り合いで食べている(暮している)もののことをいう。(三原)

カカア天下 おかみさんが、旦那さんがとってきたお金をとりあげて、自分の用にあてているものこと。そんなおかみさんは、「じいさん、これやれ、あれやれ」なんていって、あたまた旦那に用事をさせていた。また、身上のないもので、おかみさんの働きがよくて、身上をもりたてたような場合には、かかあ天下になった例もある。(三原) ノミの夫婦 夫婦で、旦那さんが小さくて、おかみさんのほうが大きい場合について。(三原)

離婚

むかしの人は、ほとんどがまんして離婚はすくなかった。嫁にくれば、その家にいるものと思っていた。女の人はほとんどが泣きねいりだった。夫が酒飲みくらいではわかれるようなことはなかった。(舟生田)
破談になると、結納金を返してはだか帰ってくる。舞の方が悪い場合は、仲人が中に立って話をつけてくれる。(今井)

四、葬 制

(一) 死の予兆と死

死の予兆 オタマン様の大杉のうらでカラスが鳴くと人が死ぬ。一口カラスが鳴くと人が死ぬ。(門員)
長野原の常林寺で、流して茶碗の音がすると女が死んだツゲがあり、本堂で筆で書く音がすると男が死んだツゲがある。
死に鳥、尾をのばしてガマーと鳴くと近い親類が死ぬ。(今井)
ウツが鳴き合わせると人が死ぬ。ビーンはいいがビーンショと鳴くと人が死ぬ。

火の玉が流れて、家の上でとまると、その家の人が死ぬ。

寺でクグリの音がすると男が死ぬ。勝手に音がすると女が死ぬ。(袋倉)
魂呼びい これといつたものはない。死期が近づくと医者にみせ、また子供や孫を呼ぶ。(大笹)

お百度参り 大病のときは、豆を百粒もって行ってかんじょうしながらお参りした。オサゴをもって行き、ローソクで灯明を上げて社殿と鳥居とを往復して拝んだ。(鎌原)

寺への通知 死んだ人があると先ずお寺に行く。お寺さんの都合を聞かねば葬式の間もきまらない。そこから肩かけ、野幕、鉢鉢をあずかって来る。

死者が出る と施主が中心で、近親者が集まって穴掘り、告げ人をきめ

る。(鎌原)

お顔かくし 忌中に神棚に白紙(長い場合には障子紙を使用することもある。)をはるのを「お顔かくし」または「目かくし」などという。(大笹)

亡くなった直後、その家の神棚には障子紙を一面に貼って密閉してしまふ。これを神かくしという。血縁者以外のけがれていない他人にやつてもらふことになっている。四十九日間、密閉して置いてから外す。(干俣)

死者のけがれからオカクシするために、アオキ(青木なら何でもよい。アラギなどを使う)をとってきて神だなにのせる。(鎌原)

人が死ぬと、神棚に笹の葉をあげる。神様のケガレ除けにする。(今井)
マクラ団子 人が死ぬとすぐ米の粉で六つ団子を作る。粉を残してはいけない。

団子をうでた湯の一部を汁にとっておく。味噌汁の代りにする。残ったお湯で米をとがずに炊く。仏が生前使っていた茶碗に一杯もりつけて、仏の枕元に供える。(今井)

死者のダンゴは小麦粉で六こつくる。少し大きめにして茶わんに盛る。(鎌原)

まくらめし 玄米を洗わずにそのまま小釜に入れ、ヘッツイでたいて茶わんに盛りつけ、箸を立てる。生前使っていたものを使うのがふつうである。(鎌原)

一合位の米をとがずに枕飯を炊いた。炊いたのは全部もりつけ、山盛りにして、箸をそろえて真中にたてる。(大笹)

枕飯や枕だんごは、特別に作らない。簡単な膳を作る。(干俣)
魔除け 死者を北枕にして体の上にカマとか、鉈などの刃物をおく。(鎌原)

仏の体の上に刀、ナタ、鎌などの刃物をのせる。猫の化け物であるカシヤの魂が仏に入ると、仏が立って歩くので、それを除ける為に刃物を

おく。(今井)

猫が死骸をまたぐと、踊り出すというので、かならず刃物をのせた。

(養生田)

北枕 人が死ぬと、北枕に寝せて、刃物をのせる。刃物をのせるのは山猫がまさすのを防ぐため。(西窪)

告げ 必ず二人で行く。葬式の前日に出る。告げ人には大きなにぎり飯を二つずつもたしてやった。その外、昔は五十錢位小遣いをもたしてやった。この部落では告げ人がきてても何もしない。鎌原では酒をだす。

(大笹)

死者が出ると、知らせるためにツゲが二人ずつ組んで出かける。掘り飯と小遣い銭を持って出た。(千俣)

告げ人は二人にきまってお、各方向へ計四組くらい出て行った。昔はむすびを二つくらいずつもって歩いて行く。田代へ行ったとき、お昼にイモの粉でセンベイを焼いてもらったことがある。(鎌原)

沙汰をする時は、二人ずつで、お握りを持たせてやる。二人使とい

う。(養生田)

祭壇 仏壇の前へ棺を出す、畳を裏返しにして、米俵をほどした荒ゴムをしいた上に、棺をのせる。棺の上には刀、鎌、ほうちようなどの刃物をのせる。仏様はその前に北向きに寝かせておく。埋葬許可書を役場からもらうてきてから、湯灌をする。

棺のまわりのわくは、東西南北に四十九本の札を立てるが、この札一枚々に経文を坊さんが書いてくれる。(千俣)

白の上に、お棺をのせる。(養生田)

葬式の日 友引・寅の日は避ける。寅は千里行って千里帰るので、仏が帰ってくるから避ける。但し寅除けをすればいい。お寺で寅除けのお札を用意してくれる。(今井)

寅の日にお葬式をする場合は坊さんにトラ除けをしてもらおう。また親しい人にトラ除けのお札をくばる。(大笹)

葬式 組内が手伝い、他の一組の親類をのぞいた人がアナホリ、棺箱作りをする。

穴をほった道具は墓場に捨ててくる。

棺は松などで作り、裏棺は少なく、ほとんどたて棺だった。(西窪) 葬儀には隣り組が手伝いに出る。故人の茶飲み仲間も出てくれて、これらの人が前日から当日の勝手元までやってくれる。(千俣)

特に葬式組というのはなく、ツゲ、葬式のやり方については、マケが中心になって決める。(門貝)

(二) 葬 送

湯灌 湯灌は逆さ水を用いる。湯灌のときの水はいまでも縁の下に流す。もとは、なわだすき安で湯灌をした。(門貝)

たらいに湯を汲み、さらして死者の頭から、身体から、すっかりきれいにふいてやる。兄弟や子どもが、荒縄でたすきをかけてふき、化粧させたり、香水をつけたりしてやる。(荒縄はたたかないわらでなう。)(千俣)

たらいで逆さ水にして、子や孫がきれいに洗ってやる。その際、荒縄を腰に巻いたり、肩からかけたたりした。湯灌の後すぐ納棺になるが、部屋の中では香をたき、親しい人にもたせておく。(大笹)

ニッカンは縄で背中を交わらせずにたすきをかけてやる。水は縁の下に捨てる。(西窪)

水の中にお湯を入れて湯を用意する。サカサ水。湯はナベにふたをしないでわす。

湯灌に使ったお湯は、床をはいで床下にぶちやるなど、人に見られなくて、日のあたらない所にぶちやる。産湯も同じである。(袋倉)

湯をわかすつたらいを座敷に出し、水の中に湯を入れてやる。立ち会う人は荒縄でオッタテ結びでたすきにかけ、線香をもつ人と、死者の体をふいてくれる人とに分かれてやる。

ニツカンに使つたらしい湯は、縁の下に捨てて、他の汚れものなどの不要な物は物置のかけなどに置き、あとで焼却する。(鎌原)

納棺 普通はたて棺とする。死ぬと棺に入れやすいように足を折り曲げておいた。事故死など家の外で死んだ者は塚棺にした。いづれも北向に埋めた。

一反の木綿の反物から物差しを使わずにズダ袋、キャタビラ、キャハン、帯、甲かけ、三角袋を、切りバシ(余り)を出さないようにして作った。これが出せる人は村でも二人ぐらいしかいない。縫うのは多勢で作った。糸の端に結びは作らない。(今井)

死者には白無垢の経カタバラを着せて、頭に三角布、手足に手甲脚絆、ワラジをはかせて、白装束にする。ワラジは生ワラで作る。ズダ袋に六文銭を入れてやる。死者が三途の川を渡るための支度だという。

棺は施主が作られたもので中にはわらすべを敷いて、木綿をかけた上に、死者を安坐させる。坐(立)棺なので、ぐるわに綿を詰めて動かさないようにし、生前に大事にしていたものなどを入れてやる。(千俣)

納棺の時、六文銭とコヌカを入れた。コヌカは地獄に行く時、大にかけられないようになめさせるためという。

亡くなった人の着物の襟をとって、その死人帯にする。そして経帷子をさせる。(大笹)

棺に納めて身内の人が石で打って蓋をする。棺は孫がかつぐのが良いといわれている。(西窪)

湯灌と納棺のとき、「婿を門に立たせろ。」といって、たちあわせなかつた。婿といつても家にきてもらった婿ではなく、娘の嫁いだ夫のことである。婿は門番という意味であった。(大笹)

死者の着物 着せてやる着物は襟をとり左前に着せて、とつた襟で帯とする。上にはカタバラをかけ、手甲、キャハンをさせてやる。ぞうりをはかせる。(鎌原)

キョウカタビラ 半反でハサミを使わずに裁つて何人かで縫うが、糸

の尻をむすばない。袴はつけずに帯にする。

タビ、ハバキ、ワラジ、手おいをつけ、六文銭をもたせる。(西窪)

サラシ一反で、物差しを使わずに、糸は玉を作らず縫いばなしで、仏の着物を作る。一反の布を余らしてはならない。縫うのはみんなで少しずつ縫う。

カタビラ、オビ、手甲脚絆、タビ(小ハゼでなく、紐でとめる)、ズダブクロ、カミソリヌグイなどを作る。

ズダブクロには六銭とコヌカのおひねりとタバコなどの嗜好品を入れる。コヌカは犬が鳴くから、犬にやれという意味で入れる。

カミソリヌグイは和尚さんが仏の髪を剃った時のために、棺桶の上のせておく。

外に三角の袋を作り、近い親類がサカズキなどで少しずつ米を入れる。トマリゴメという。お寺にやる。(今井)

死者に持たせるもの 善光寺さんの血脈を頭の上におき、ジュズをもたせ、金剛杖を入れる。杖は昔はオガラでつくったが、いまはヨシにしている。その他としては生前使っていたドウランや医者薬、六文銭などで、コヌカを少し包んで入れてやる。六文銭は極楽浄土へ行くための泊り賃で、コヌカは道で犬にあえば犬にくれてゆくためという。(鎌原)

お通夜 近親や近所の人に来てやる。施主の方は葬式のことの相談をする。(鎌原)

入棺した晩は、近親者が寄つて夜ふかしをし、一晚中寝ないで線香を絶やさないようにする。今でも、誰かしら起きている。(千俣)

通夜から出棺前までの味噌汁 味噌汁の実を入れなくてお客様にだした。(大笹)

つくりもの 葬式のとりのつくりものは次のようになる。

旗 四、

竜頭 二、

六地藏 二、

灯籠 二、

天蓋 一、

門ペイ 一、

花かご 二、

ガンブタ、天蓋、棺台、かつぎ床は村持ちで、観音さんにある。(鎌原)

諸道具 葬儀に必要な諸道具は、親戚が寄って用意した。六地藏、五色旗、灯籠、香炉、位牌、膳、写真などを手分けで揃える。(千俣)

テンガイとガンブタは堂から持ってくるがカンダイは「の」(墓地)に置くので、死者につくる。(門貝)

棺桶は朴の木で作るとぬける。松板で作る。(三原)

村の大工につくってもらう。昔はタテ棺だったが現在は寝棺になった。

(鎌原)

本膳 葬式の朝の膳は各自ですませ、野送り後に本膳を用意する。膳立は精進料理で、とうふ、てんぷら、みそ汁、ご飯、煮豆、新香、酢の物などが出る。(千俣)

葬式の前に昼めしが出される。めしは必ず二杯食べることになっていて、盃にひとつくらいしか盛ってなくてもおかわりをする。汁はミを入れないうちで、やかんに入れて注いで歩いた。(最近になってトーフを入れるようになった)おかずはテンブラなどで、ヒラには蓮の花のミジンコの葉子が引出物としてついていた。膳の上に出されたものは残らずもらって帰ることになっている。(鎌原)

葬式の出棺の前に、かつぐ人が箸一本で一杯のめしを食べることを一杯めしといひ一杯だけ食べることをきらう。普通食事を人にすすめる時「仏さんじゃあるまじし、一杯ものがあるか」と強いる。

葬式の野で穴を掘っている人の食事は握めしと決まっていた。(袋倉)

棺をかつぐ人にお碗のふたに飯を盛って出し、立ったまま食べる。又、棺をかつぐ人のわらぞうりは穴掘りが作る。一人が片方だけ作る。たたかないままのキワラで作る。帰りには脱ぎ捨てて、三本辻にでも途

中でぶちやる。それから後ははだして帰ってくる。(今井)

出棺 ザシキの中にヨシの鳥居を作って、その下から出棺するとすぐ掃き出す。庭にいうちに掃き出す。(袋倉)

棺が座敷から出るとき、ヨシを二本でつくった四角の鳥居をくぐる。

(鎌原)

ヨシ(芦)で六尺真四角位のやつをつくる。軒先でそのお飯門を通って棺は庭に出る。

棺は上段の座敷(奥座敷)でその家の一番よい座敷から出る。(大笹)

午前十時ごろには坊さんの拝みが終わって、表座敷から棺が出る。この時、行列を組む人の役割を、区長が読み上げる。坊さんがみょうはちを鳴らして合図をすると出棺で、表座敷から直接に庭へ降りる。ヨシで組んで鳥居のようにした門を棺にくぐらせる。このヨシは棺とともに持っていく、埋めてしまう。(千俣)

出棺のときは、棺をかついで、台所のイロリのまわりを右まわりに三回まわってカドへ出す。(門貝)

棺を庭の真中に置いた臼の上に置きここからかついで出る。帰って来るとこの上に水と塩を置き、清める。臼は年を取らないからだといひ、仏は年を取らないように置くともいひ。普段は臼の中にはいると背が伸びないといひ、禁じられている。(今井)

出棺前ふつ坊さん(曹洞宗)は午前十時ごろ来て、戒名を付けて墓標の字を書いてくれる。また、旗の字なども書いて用意し、近親者が立ち合いで、押んでくれる。(千俣)

棺が屋敷を出るとすぐにはきだす。またチヨウベシにオキを上げて門に出す。(大笹)

出棺直後にサンダワラの上に、オキとオハライを立てて、三本辻に出す。(今井)

出棺と同時に、家の者がイロリの灰を取って、俵パンシ(さん俣)にのせて、川ばたへ出して置く。そこは、盆の迎え火をたく場所と同じで



出棺はこの上から、野辺送り後はこの上に塩と水を置き清めに使う。(半出来) (撮影阿部 孝)

ある。(千俣)

仏が出るのとすぐ、タワラッペーシの上に出、おきよせて、三本辻に出す。(齊生田)

ノベ送り 施主である長男が位牌を持ち、長男の妻がお膳を持つ。死者の相手は墓へ行かないで留守居をする。棺をかつくのは、孫やおいっ子などの四人の男、肖像写真が子供が持つ。棺に付けるならし紐は、ここでは付けない。庭先で勢ぞろいして墓地へ行く。この時ろうそくを三本ずつ、棺の前と後に持って行く。(千俣)

子供のノベ送り 子供が死んだ時には、ノベ送りに母親は出るが、男親は行かない。(千俣)

葬列 とうろう、小旗、竜頭、花輪、花かご、棺、位牌、膳、そでかぶり、会葬者の順で、位牌はあととりが、膳はあととりの妻がもつ。(西窪)

位牌は長男が、膳は長男の嫁が持つ。棺は孫か甥がかつく。その人達のはく花むすびゾリーは穴掘りの人が片方ずつ作る。婦りに途中で捨ててあとははだして帰ってくる。

ヨシかオガラで作ったコンゴウ杖に近い親類に持たせる。紙に川の名を書いてまきつける。二十〜三十本用意した。墓穴に一緒に埋める。(袋倉)

天蓋 天蓋は、仏を鳥などにねらわれないためのごまかしである。

これを持つ人は、仏に一番木の近い人で、親の場合でも子どもでなく、仏の弟などが持つ。

天蓋の木を棺にとくようにしておく。墓参りにはその木をゆすつて「じいさんきたよ。」などという。また、その木に水をかけるとそれは死者にとどくといい。

- (1) 弔旗 (役場からもらう。死者の名の入ったもので、最近のこと)。
- (2) 燈籠 (弔旗のない昔はこれが最初)。(3) 六地藏。(4) 竜頭 (前) 一本。
- (5) 五色の旗 (前) 二本。(6) 花籠 (七十才以上の人の場合)。(7) 位牌。(8) 遺影。(9) 花 (造花も生花もある)。(10) 導師。(11) お膳。(12) 机。(13) ソデカブリ。(14) 棺。(15) 天蓋。(16) 竜頭 (後) 一本。(17) 五色旗 (後) 二本。(18) 墓標。(19) 参列者。(録原)

- (1) 弔旗。(2) 燈籠。(3) 花輪。(4) 竜頭 (奥の前後に一本ずつ。なお、紙の大旗がやはり奥の前後に一本ずつ)。(5) 位牌。(6) お膳。(7) 机・遺物。(8) 遺影。(9) ソデカブリ。(10) 奥 (孫がかつく。孫のない時は喪主以外で一番親しい男の人。例えば死者の甥など)。(11) 天蓋 (仏に一番近い目下の人)。(12) 墓標。(13) 会葬者。(大笹)

棺かつき 棺を担ぐ人は孫たちで、小さいときは担ぐまねをする。孫のないときはごく近親の者とする。この人たちは、一本箸で、汁かけめしを食ってから、素足にわらじをはく。婦りに道中で脱いではだして来ることになっている。(録原)

金剛杖 ヨシに紙を巻いたもので長さ三、四十センチほどのものを金剛杖として、腰に挟んで行き、墓地に置いてくる。棺といっしょに埋めてやる。(千俣)

和尚が書いてくれた一字のある紙を、一尺二、三寸のヨシに巻きつけて終りはノリでとめる。袖かぶりをした人と、棺を担ぐ人など近親者に渡し、野辺送りまで持って行き、埋葬のとき一緒に埋める。(録原)

葬列の服装 男は黒紋付、女は江戸づま (褌模様) の着物を着た。白無垢を着るのは施主の膳を持つ人や、子供たちくらいだった。最近黒

の喪服がふつうになった。はき物には白紙を挟んだが、白紙は墓地へ乗
て行く。(干俣)

袖かぶり、野送りの時、近い親類の目下の人が、さらしの左の袖をか
ぶる。あとで洗ってしまっておく。弘法大師が、雨にあって、左の袖を
かぶってしのいだからという。(曹生田)

死者の子どもや兄弟たちの女の人は、白いさらしの布で袖を作って頭
にかぶる。子どもの白のさらしじゅばんの袖を、そのまま頭にかぶって
もよい。これはあとで、もとに戻してやる。長命で亡くなった人の場合
には、大勢の婦人たちが袖カムリをする。(干俣)

袖かぶりは半端で、さらし一反で二枚つくる。丈やかっこうはどん
なでもよく、左の袖をかぶり右袖はふっかけておくだけにする。サラ
仏より目下の女衆が葬儀に参列するときは全部袖かぶりをする。サラ



ソデカブリ (西窪) (撮影青木則子)



葬式の穴埋めの組の人たち (半出来) (撮影阿部 孝)

シでつくった襦袢のようなもので、片袖のほうを頭にかぶり、他方の袖
は帯にはさみこむ。(鎌原)

白サラシ一反でじゅばんを作って身内の女がかぶって、行列の最後に
ついてゆく。

すむとしまっておいて、また葬式のときにかぶる。最近の若い人は、
着物の形につくらず、適当な長さで切ったサラシを二つ折りし一方のミ
ミをぬうだけの簡単なものをかぶるようになったが、必ずかぶる。(西窪)

死者より目下の女衆は全部かぶる。サラシで作った羽織のようなもの
を裏がえして左のソデを頭にかぶる。八十歳、九十歳という人がじくな
ると、ソデカブリは何十人にもなる。(大笹)

ゼンの綱 サラシ一反興に結わえてあり、それをゼンの綱という。そ
れにソデカブリの人がつかまってい。(大笹)

葬列の本道 墓へ行く道は近道をせず、道祖神のわきの
昔の本通りを行く。帰りは必ず同じ道を通る。(西窪)

墓地からの帰り、和尚と区長が先に帰ることになってお
り、あととりの嫁も先に帰る。嫁は和尚の接待と仏のめし
を用意するためである。(鎌原)

の(墓地)には、すぐじをさげ本通りを行く。すぐじは
近道のこと。(門貝)

オガンショバタ 死者の着物をもって川端にゆき、さか
さにしてふりながらか何か唱えごとをいってオガンショバタ
シとする。(鎌原)

願ばたしは、出棺のあとにする。お金を入れた水を各部
屋にまいて歩く。(門貝)

穴掘り 穴掘りはオタンマで各組から二人ずつ計八人出
て当り、手ダワの柄を短く切って使う。土を掘って、古俵
で作ったコモに土を入れて運びあげた。終わったあと、手ダ
ワは刃先だけ外して持ち帰り、柄を置いてくる。コモも置

いてくることになっている。

墓地へはボヤをしょって行き、穴掘りのそばで火を燃やす。(冬でも夏でも)

使用する道具やボヤは組の人が用意する。十時ごろ、酒、茶菓子などが出て、掘り終って昼食を食べる。(干俣)

本村だけで十四組ある。二組ずつが協力するようになっている。一組に不幸があると二組が手伝う。二組には一組というようになっている。

三、四組、五、六組も同様である。三升の米を炊いて二十個のむすびとして穴場の弁当とした。また、二升の清酒を浄めとして出す。酒の肴としては、天ぷら、キンピラ、つけものをつける。十人位で穴を掘った。(大笹)

当日、遠い親せきを六人頼んでやってもらう。掘った穴にはお寺からもってきた野幕をかけておく。

穴掘りには酒一升と天ぶら、むすびを出し、残さず処分してもらおう。墓場へ捨てる分でも持ち帰らない。(鎌原)

ジゴクテンマ 穴掘りデンマは、組から十人出て、バンテン交代に、入って掘る。お掘りにお酒を持っていく。お掘りは、二つあてで、残り

墓穴を掘る役。組には関係なく、親戚でない人が十軒一組となつて出る。マケの多いところでは、すぐ番がまわってくる。(門見)

土かけ 穴を掘った人がやる。(西産)

焼香(告別式) 寺につくと、左回りで三回まわる。和尚の前に興をつける。司会者が「これから告別式を行ないます」という。導師引導とい

つて和尚は引導の経をあげる。

最初は喪主焼香。この時棺をかついだ人が木で作った簾で棺の回りを左回りに三度

回す。一回目はそのままの形で回し、次に柄を抜いてこわして回す。簾は十廻位の



浄土(干俣) 墓地にある堂をいい、仏像や棺道具を保管 (撮影関口正巳)



浄土場(干俣) 右下に見える石のまわりを棺を廻したという (撮影金子隼一郎)

もので鉄の部分は墨で黒くぬっておく。

次に司会者は弔辞と弔電の話。会葬者焼香。遺族の挨拶。司会者閉式の辞。(大笹)

焼香は施主、家族、近親者、一般の順ですませる。狭いので、香箱を持って歩いて焼香してもらったりする。その後、親族代表の挨拶があつて、一般は解散する。(干俣)

インドウ渡し 墓地でムシロの上に棺をおいてお経をあげ、焼香をする。お経の初めと終りにホッスを振り、クワ(ヒナ形)を振りまわしてなげる。(西産)

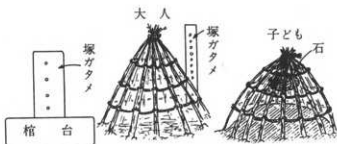
葬列が墓地に着くと、広場で三回左回りに回ってから、棺を石の上に安置して、その前に供え物を置く。和尚さんがごうりをはいて拜み、こ

こで引導を渡す。(干俣)

木でくわの形をしたものをつくっておき、引導わたしにして使い、穴の中へ投げこんでしまう。(鎌原)



浄土共同墓地のエンシマ堂をいう（大前）
（撮影関口正巳）



葬式場 式場は共同墓地の「浄土」の前の広場に、穴掘りの人がゴザを敷いて用意しておく。ゴザは俵をホズして広げたコモで、和尚さん用のわらぞうりをそばに置く。入口の六地藏にはろうそく立ても持って行って、六本に火をともししておく。

共同墓地にあるお堂を浄土という。中に仏像や、棺道具が入れてあり、葬儀の時には借りて用いる。そこにある穴明き石に耳を当てると、地獄の音が聞えるという。（千俣）

土葬 一―五才までの子どもと大人の土葬は異なる。子どもの土葬は山犬に掘られないようにと木の枝を弓なりに土盛りの上に美しく、木



墓地
唐傘の柄を真中ほどで切っておく（下袋倉）
（撮影阿部 孝）

と木の間を縄で結び中央に石をつるす。

大人の場合は、普通棺台を置くか、枝を四方から立てかけて、その間を縄で結ぶ。

墓標のことを塚ガタメという。穴掘りに用いた鎌は、最後に柄を切つて、使えないようにして土盛りの上に立てておく。昔は鎌の金具のみはずして持ち帰った。塚ガラ、カンガラとして土盛の上に立てた。（今井）

北向きとする。棺の四すみにつけた綱でおろすと、刃物で下から上へ向けて綱を切る。この役は相続人の役である。

金剛杖をみんな穴の中へ入れてから、近親者はひと鎌ずつ土をかけ、その後を穴掘りの人たちが土まんじゅうをつくる。天蓋を持って行った木は棺の上に立てておき、お墓参りに行ったときにこの棒をゆする。水もこの木にかけることにしている。（鎌原）

相続人が棺（昔はたて棺）を穴場まで背負っていく。穴掘り組の人が穴に入って、棺をだきおろして北向きにしてくれる。棺についている荒縄（普通のと違い左によつてある。）をほどいてやる。そうしないと仏が



墓地 棺の四方に49連の札を立てる。囲りに棒をさして、縄で編んで山犬を防ぐ囲いとする。(千俣) (撮影関口正巳)

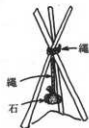
うかばれないという。普通、棺は石で釘づけするが、この部落ではフタには釘をうたない。

親しい人から順に一锹ずつ土をかける。あとは祖の人にお願ひする。土饅頭の上にモガリをする。モガリは四十九日の墓なおしまでそのまましておく。(大笹)

棺付きの四人とおテンマの人が力を合わせて棺を取り出し、北向きにして、しばった縄で穴の中へ吊り下げる。縄は鎌の手が届く限り長くして下から切り放す。棺の上へ近親者が一锹ずつ土をかける。葬列の持ち物を一緒に埋めてやる。土をかぶせきると、土山の回りに持って行った棒をさし並べて、棺に付けてきた縄でぐるぐると巻いて、山犬を防ぐための囲いを作って置く。穴掘りに使った鎌などは囲いの中に入れて置く。当日の墓は他人が作るのだから、あとで家の者が行って穴を埋めた土山の上には芝草を乗せ墓直しをする。墓標を真後に立て、奥を据える家もあり、回りに四角の四十九連の札がつく。前方に膳を並べて、水とタンゴ六個(ふつうの粉で丸い形に作る)を供え、茶碗にご飯を盛って、箸二本をさして置く。脇に灯籠を立て、一週間は毎晩あかり(ろう)



新しい墓 「山犬除け」として石を吊り下げる (大前) (撮影関口正巳)



そく)をつける。(千俣)

墓の供えもの、お墓に供えたいいろいろなものは、早く下げると成仏が早い。(鎌原)

もがり 大飢饉の時、人がじくくなって埋葬しようとしたが、腹がへっていて穴が掘れない。浅く埋葬したために山犬(オオカミ)が死体を食べた。山犬が掘れないように「もがり」をする。石がブラブラして山犬の顔にあたるから逃げる。土饅頭の山の峰にあたる位のところ、石をさげる。高さ一米位の木を三本、縄で結わえて、そこからまた縄で石をつる。(大笹)

イヌツバジキ 土まんじゅうにしたまわりには、木を曲げて、なわでからけておく。イヌツバジキというもので、タツガシラ、ハナカゴハタなどを持って行った棒をこれにあてる。数は十本以内で、ヤマイヌがう



墓地 葬死のぞうりが石段の下
にぬぎ捨ててある(下袋倉)
(撮影阿部 孝)



ボチ(埋め墓)(田代)(撮影池田秀夫)



オハカ(詣り墓)(田代)
(撮影池田秀夫)



縄で結わえる。

んと出て困ったころからやった。
電頭などの木を使って作る。花籠を作ら
ない人(若者)の場合は二本の木と組み合
わせるだけである。木は多くても十三本以
内である。

四十九日たつと大ッバジキをはずす。

(鎌原)

ガンブタ イヌヨバジキをした上へのせ
てくる。昔はガンブタは借りたのでその日のうちに返したが、いまは四
十九日まではのせておく。(鎌原)

カツギ棒のついたカンダイの上に棺が上っているが、穴を掘って棺だ
け入れ、土で埋めてその上にとっておいたガンブタをおく。(田代)

テンコロが墓を掘るのをふせぐために石を沢山のせる。テンは犬に似
たもので、死んだ人をおくと信じられている。

また、鎌の柄を短く切って立てる。

イヌヨケとして、ガンブタをのせ、まわりに竹を立てて縄でしばり、
石をつるす。(西窪)

墓地は明治九年より共同墓地になった。(門貝)

墓地は西の山の日あたりの良いところに六カ所ある。(西窪)

墓制 第一次墓地をボチ、第二次墓地をオハカという。ボチはインツ

カワラに近いところにあり、(田代で三ヶ所)地区別に共同墓地となつて

いる。ボチは、この地には古くから山犬が多く、これが死体を掘るので、

埋葬した上に丸石を山と積み上げ、その上にガンブタをおく。あるいは

埋葬した上に杭を立て、その上にガンブタをおき、その四隅に縄を張る。

これらはイヌヨケだといっている。このボチは何年もたつと形が判らな

くなるので、お詣りしなくなるという。

第二次墓地のオハカは、組別で松本組、戸部組、橋爪組、宮崎組、黒

岩組、干川組とマケ毎に作られている。他所から新しく入ってきた者

は、墓地の管理者である区長の許可を得て埋葬し、オハカも新しく作

る。

ボチとオハカは約一キロ程離れているものもある。

死者があると埋葬した翌日、三尺位の塔邊をオハカにおさめる。そして死人の髪、毛、爪などおいて、その上に川の石をおき、大体は年忌のときその上に石塔を建てて、

葬儀後は、ヒトナノカにお詣りするだけで、四十九日に家族、近親者で詣り、ダンゴ、菓子、花を供える。

年忌、彼岸などにはボチとオハカの両方に詣る。

死後一週間は毎夜灯をつけに行く。そして三七日位までお詣りする。一年忌は昔はやらなかったが、埋めたところと先祖様にお詣りする。埋めるところ(ボチ)は共同墓地で、石を置くがなくなると、自分の祖母とか父母と判るまではお詣りする。それらが判らなくなると詣らなくなる。(田代)

キヨメ 墓から帰った人は、タチウスの上に塩をおいて、これでキヨメをする。袖かぶりをした人と、棺を担いだ人には手ぬぐいを一本ずつくれる。(鎌原)

葬式から帰ると、立ち臼の上に塩と水を用意しておき、それで身を清める。(今井)

墓地から帰ると、家の入口で塩をふりかけて身を清め、立臼をさかさにした上においた水を汲んだ洗面だから、手を洗う。家に入って本膳について昼食を食べる。和尚さんにも食べてもらう。和尚さんは「百かん日」というお経を上げる。(千俣)

仏のめし 墓から帰ったあととりの嫁は、仏に本膳をつける。和尚が膳の上から茶わんをとってさし出すのでこれに盛りつけて出す。そのとき和尚はふつうのしたくになつていて拜んで終る。(鎌原)

和尚のさしき 和尚が経を上げ、「仏のめし」をすませると、区長、近親者が出て、キヨメの酒を和尚にすめる。接待をする女性は、墓から一番先に、嫁と一緒に帰っている。(鎌原)

お寺参り 和尚が帰ると近親者がお寺参りに行く。お布施(お布施、お茶代、お伴代、御遺物代——着物でもよい)と米、仏に供えたものと

和尚への引出物を持って行く。もとは花輪も持ってゆくのがきまりだった。

お布施は、昔は居士で二円から三円くらいだったが、いまは居士三万円、院居士五万円以上で、田代などでは十万円と聞いている。(鎌原)

キョウカタバiraといっしょに三角袋を縫って、米を一升入れて葬式の翌日寺へ納める。(西窪)

お墓参り お寺参りから帰ると家に入らずにお墓参りに行く。このとき大塔婆と小さいダンゴを持って行く。ダンゴはゆであげたときに生米の中にころがして米粒をつけたものをつくる。(鎌原)

とまり米 米を三角袋に入れた死者の出た家を持って行き、また持ちかえしてお寺参りの時、寺にあげる。

三角袋に米を一升、大せいの人ですくいこんだのを墓地までつるして行き、これを持ち帰ってお寺参りに持って行く。(鎌原)

キチアケ 葬式の晩がこれにあたる。近親者で葬式を手伝ってもらった人を招ぶ。招かれた人はいくら持って行くきまりで、昔は十銭、現在は千円くらいになる。このときの引出物はマンジュウである。(鎌原)

忌中払いは、近親者の晩飯に酒が出るか、次々日の寺参りのあとに清めを出す。(千俣)

香典 親が死んだ場合は、子に対して、子どもの数だけつつむ。昔は子どもたちが金を出し合つて葬式を出したので、香典と位はいは子どもの数だけ(ヒトになった数だけ)つくった。(鎌原)

亡くなった人に子供が三人いれば三人に香典をつつんだ。五人なら五人につつむ。しかし香典がえしは一つである。(大笹)

コウヂイ(香典)は施主とその兄弟あてにそれぞれ出した。葬式の費用は兄弟(女も含めて)で頭割りで負担した。香典で足りない分はふところから出さなければならぬ。金が出せないで位牌がもらえないという話もあった。(西窪)

お悔み 昔は千俣の村じゅうから、多少なりともシルシを持ってお悔

みに行った。戦後はかたまりことになり、本村だけで、親戚でなくも顔出しするようになった。(千俣)

トウツケ 昔は一般の人は葬儀に会葬しないで、葬式の出たあとの夜、挨拶に行く。これをトウツケといひ、引き物は出さない。(引き物は親戚だけ出す)長野県ではトウナカという語で呼んでいる。(千俣)

葬儀費用 昔はある程度、子供たちで折半した。今は施主が一応負担して、兄弟にあとで分担金を出させる方が多い。(千俣)

ソウシキシンルイ イトコくらいまでの範圍をいう。(門貝)

トモライ念仏 葬式の晩にやる。七十人から八十人くらいで、よばれた人は手ぶらで行くが、よばれない人は最近では百円くらいもってゆき、念仏をあげる。若し者は後の方にお義理に座っている。

この人々には夕飯を出し、まんじゅうを包んでやる。

葬式のハタはトモライ念仏のときに切って分けてやる。(鎌原)

埋葬のすんだ晩、村の年寄りが寄って念仏をあげてくれる。「今晚、午後何時から念仏をお願いします」と、回覧板を両隣りから回すと、村の五十才以上の女衆が四十、六十人ほど集まってきて念仏を三時間くらい上げてくれる。念仏は女衆の役目である。(千俣)

葬式を出した日に、女衆が集まってイリ念仏という念仏をとなえる。男の仏に対しては「シンギョウ」を、女の仏に対しては「血の池念仏」となえる。

初めから真中までを五回くり返し、真中から終りまでは三回くり返してとなえる。

男念仏はない。(門貝)

三月の法事 葬式の翌日に近い親戚だけでやる。坊主をよんで経をあげてもらい、墓参りにはお重にダンゴを一抔持っていく。

そのダンゴは六地藏様にあげたりして、そのあまりは行った人に食べてもらおう。それが虫歯の薬になるといふ。(大笹)

門 碑 居士、院号の場合には作つたが、信士の場合には作らない。

昔は四十九日まで立てておいた。旅僧が供養をしてくれればお布施をつんだ。ドウシンボ(乞食坊主)にもやった。今では三月の法事に片づける。(大笹)



戒名のいい家だけたてておく。一週間の間は門ペイを立ててあれば、だれがたずねて来ても食事を出した。現在は葬式の翌日に初七日をすませてしまうので、その時に墓へもって行ってしまふ。(鎌原)

四十九日位にモンペを板で作り、戒名を書いておく。縁側に出しておき、近所の人誰にでもおがんでもらう。(袋倉)

位牌分け 新宅に出た男の子には、位牌を分けてやる。女子には分けない。位牌分けに伴なう行事はない。(千俣)

位牌は、葬式の日または翌日に子供にわたす。

位牌は葬式のあと子供にわたす。(西窪)

四十九日まで自宅の祭壇に位牌をかざしておく。位牌は結婚した子には分けてやるが、独身にはやらない。位牌は裸で持たしてやる。(大笹)

仏の子どもたちは、四十九日が終わったときにもらってゆく。相続人が渡す。(鎌原)

一七日 一七日まで夕方になると墓の燈籠にロウソクをつけてくる。子供がいく。(鎌原)

一七日(ヒトナノカ)の間は、家族がお参りに行っては、線香と水を上げ、毎夕、灯明を上げてくる。(千俣)

葬式の日から一週間は、お寺に灯明あげにゆく。(鎌原)

初七日に親類の人が集まって拜む。今は葬式の翌日にやる人が多い。(西窪)

七本とうば 七日間墓参りに行くときとうばをもって行って、かんだいのところを立ててくる。七日のあいだ、毎晩墓へ行って六地藏にばかりをあけてくる。これはだれでも家のものが行ってくる。七本とうばが終るまで仏様は屋根の上について、七日たつと、安心して墓地にかえるという。

現在は略して忌明け(葬式)のときにしてしまう。(三原)

七本塔婆を葬式の翌日、お墓へ持って行って上げる。(鎌原)

忌明け 四十九日たつと忌明けになるので、親戚に案内を出す。施主の家で四十九日の餅をつくが、この杵の音を聞いて、仏様がこの家を離れるという。寄った人に四十九日の餅(あん餅)を出す。昼食後、墓参りをする。寺参りには先に行つて来る。(千俣)

魂 四十九日まで仏は屋根の棟にいるという。(大笹)

七七(四十九日) お墓参りをし、イヌツバジキをとる。

上段の間においた位はいを仏だんに納める。(仏だんに入るといふ)

クンチモチとよばれるもちをつき、ヒキモンとした。

集まった人たちにはお膳をつくり、酒を出して食べてもらう。(鎌原)

三十五日 弔い上げまで、月のまたぎになってはよくない。三月がかりでよいけないというので、ふつう四十九日まで置かないで、三十五日で弔い上げをする。(千俣)

三ヶ月にまたがってはいけない。一月三十日に死ぬと四十九日目が三月中旬になるので、操りあげて二月中にやっつけてしまう。(今井)

四十九日の餅 死後四十九日に餅をついて、四十九コの餅を重箱につめてお寺へもって行った。また親類にも餅をもって行った。

柱のまわりに四十九りんとういうのをたてた。四十九の本ずつにお経が書いてある。それを墓地へもって行って埋めた上に立てておく。四十

九日のあいだ毎日墓まわりに行つて、それを毎日一本ずつぬいてくる(ぬいたのはかんだいのところにおく)。このようにして、四十九日たつと、四十九日の餅をつく。

四十九日のあけるまでは、仏様はあの世へ行きかねているから、墓参りをするものだという。(三原)

カタミ分け 四十九日に分けてやる。七日のときに出してもしまつておいて、四十九日になるのがふつうである。(鎌原)

葬式の次ぐ日を初七日といひ、この日に旗を分けてやる。(千俣)

ヒヤツカンニチ(百ヶ日) うちうち(家内)くらいでお墓参りをする。てんぶらをつくるていど。(鎌原)

アラボン ポチ・オハカ両墓に掃除に行く。家はきれいに飾るが、墓は普通の掃除だけである。アラボンのときは、お寺に十五日に行くのが普通のお盆と違う。迎えるときは川の淵や家の出入口で火を燃す。送り盆は、川の淵で半分燃して、半分は川へ流す。(田代)

一年忌 あまり大きくはやらない。

三年忌 (イッセイサ)

七年忌

十三年忌

十七年忌

二十三年忌

二十七年忌

三十三年忌(カキアケ) 塔婆に枝がついているものをあげる。(鎌原)

一年忌、三年忌、七年忌、十三年忌、三十三年忌が弔い上げとなり、行事が終る。墓参りをして、寺から書き物を貰つてきて、塔婆を立てるが、葉付き塔婆は立てない。(千俣)

四十九日までは、七日、七日に法事をする。その後は、百か日、一年忌、三年、七年と法要をし、三十三年忌で弔いあげとなる。(大笹)

一、三、七、十三、十七、二十三、二十七、三十三年忌には仏の供養として墓地にとりばをたてる。

三十三年忌はともいあげといい、これからあとは、供養しなくともいいという。(三原)

回忌 ナゲトリーバを墓に立てる。お寺でトリーバは書いてもらおう。(今井)
エダ塔婆 三十三回忌のトムライアゲに立てる。上部に枝のついた木を伐って来て立てる。(袋倉)

オサメ 三十三年目は供養納めだが特別のことはしない。(西産)
重なつた不幸 不幸が二つ続いたときは、キネをもつて行って埋めて墓をつくる。(鎌原)

一軒で一年に二人死ぬと、薬人形を埋め、墓を三つ作った。
杵を縄につけて、見せしめのために、二度とこんなことにならないように、引っぱっていく。(吾生田)

同じ家から年内に葬式が二回も続いた時には、二回目にもう一回寺参りに来たり、一人が門を引き返してもう一回寺参りをして、三回すませたことにする例もあり、厄おとしという。人形を棺に入れることはない。



幼児の墓(大笹) (撮影近藤義雄)

(千俣)
同年のものが死ぬと、茶碗・お碗のふた、または団子を作って、耳をふさぎ、「耳聞くな、耳聞くな」と、三回いう。「耳ふさぎ」というものもある。(吾生田)

殺生 死者のあった家では、一週間ぐらいは動物などを殺さないほうがよいという。死者の霊が、蝶や蛾になってくるという話はない。(千俣)
無縁仏 人にならない独身者の仏をいい、一人前の葬式を出して、親の石塔の脇に文字を刻んでやる。

盆の時には、一段下げた所に無縁仏の分を供える家もある。(千俣)
ハジキ 子供が死んだ時にする。生木を伐ってきて、組み合わせ、真中に石を吊しておく。山犬が掘らないように。(袋倉)

メッパジキは子供が死んだ時にだけ作る。

(今井)

お産で亡くなった人

一尺角位の赤い布に和

尚さんが字を書いてくれ

る。その四隅を竹でとめ

て川におく。そはに柄杓

をおいておき、赤い布が

白くなるまで水をかけ

る。流れ灌頂といったか

どうか記憶にない。(大笹)

死者の着物 洗って日

蔭干しにする。(大笹)

死者の生前の着物は、洗って日蔭干しにする。



ラントウバ(木の向こうの平) 馬や牛の死がいや棄てた物を煮てた所という(千俣) (撮影関口正巳)

内側に向けて干せといわれる。汚れた物や始末に使ったものは、家の外に持ち出して焼いてしまふ。(干俣)

忌み 死者のあった家では、神社参りは一年ぐらいは遠慮する。正月の松飾りもしない。(干俣)

ラントウバ 干俣の共同墓地の向こうの下がった所に、古い石塔があつて、ラントウバという。昔、馬や牛の死んだものを棄てた所という。

(干俣)

年中行事

はじめに

碓氷村は地理的にも経済的にも信州との関係が深く、人間の交流もあるため、年中行事には信州の影響が現われているものがある。たとえば、道隆神像やカンジン様、十日夜のカカシアゲなどの風習は、きわだって興味深い。以下、特色を示す行事に触れてみよう。

正月の年神棚には新しい松枝を使用したというが、きこりやこびきの盛んであった地域の事情をよく表わしている。また、寺から坊さんが年始に各戸を回る日が、四日と限らず部落ごとに二日なり、三日なりと決まっているのは、雪の中に散在している部落をめぐらなければならないから、そうなるものであろう。

六日年を「馬の年取り」といって、餅などのごちそうを馬にくれる風習があった。これは、十二月一日の川流れ餅を馬にくれたのと相呼応して、馬をたくさん飼って山道の輸送に使っていた生活のために、よく残っていた行事であらう。

小正月のモノヅクリに、ヌルデの木を六本ずつ二束にして、米・ヒエなどの俵の形を作って台所の梁に供え、古いものを燃やしてミソ豆を煮たり、その木の焼けぐあい、毎月の天候を占ったりする行事もあった。また、道隆神像を男女二体、ヌルギの木で作る風習は、吾妻地方によく残っている。

小正月のマユ玉を「サクノハナ」「百姓ノハナ」と呼んでいるのは、秋のみのりを予祝するもので、マユ玉飾りが必ずしも糞虫の当りを願う縁

起物ではないことを示している。マユ玉の形もマユ玉だけでなく、丸形、宝珠、大や鳥の形など、さまざまであり、原料の粉も五穀でつくるとい、米・アワ・ヒエ・キビなどで作っているのも興味深い。マユの豊産だけ祈るものなら、色の黒いマユ玉は汚れたマユを示すので、嫌われるはずだからである。

道祖神祭りの主役は子供たちで、幣束を付けたカンジン棒を持って、家々を回りお松や米を集めているのは、ほかの地方では崩れた子供組の祭り形式をよく残している。ドンドン焼きは盛んだったが、同じ吾妻郡の中之条地方のような鳥追い行事があまり現れないのは、どうしてであらうか。ドンドン焼きのいわれが、厄病神の幟面を焼くためという伝承は、興味深いものである。

今年の豊凶を占う筒粥の神事が多くの神社等で行なわれていることは、一つの特色であらう。千俣・大前・田代・西窪・門貝・三原・鎌原・芦生田等で、村人の手によって行なわれ、作物から経済一般にわたって占っているのは興味深いものである。

二十日正月に二十日ゴウセンを供え、年神棚をはずす風習は、この日が小正月の終りとなるくぎりの日だったのであろう。

ミソカマユ玉がさかんなことも特色があり、ヒエ・ソバなどのだんごを窓にさして、鬼ノ目玉などと呼んで、鬼を防ぐ呪いとしている。暮の大晦日にする所と、正月三十一日にする所とあるが、暦の変動によって分かれたものであろう。利根地方でサマダンゴ、甘菜地方でツジウダンゴなどというものと、同様の供え物であらう。

節分の豆まきの豆をいる時に、十一月の大師粥のカヤの箸を取って置

いて、三角形に折ってかき回すことになっているのは、両者の関連を暗示している。

ヒナの節供に女の子の仲間がヒナ様を持ち寄って、料理を作って供えたり、食べたりする風習は、多野郡上野村のオヒナガユを思わせる。

念仏が盛んで、とくに彼岸には年寄り衆がお堂にオコモリして、念仏を唱えたり話の花を咲かせたりしているのは、年寄り天国の感じさえいだけせるほどで、老人衆は村の長老として大事にされていることがわかる。

諏訪神社の春祭りが八十八夜ごろ行なわれているのは、気候ばかりでなく、山開きとの関連もあるのだろうか。

ショウブの節供のいわれとして「口無し女房」の昔話がよく残っているのも興味深い。

また、半夏についての昔話が、かなり精しく語られているのも珍しいことである。

七夕飾りをほとんどしなかったことは、利根郡片品村などと同様である。七日は盆の用意として、墓掃除をする日になっているのは、七夕と盆が一連の行事の日であることを示している。

盆棚を作るのに、モミジやホウの枝を使用するのは、土地からであろうが、ヨシを二本ずつ盆棚の四隅に立てるといふのは、なぜであろうか。葬儀の際の飾り付けにもヨシが使用されるところを見ると、ヨシは霊と結びつく阿かが連想されるのであろうか。

盆の送迎にカド火をたきながら「盆サン・盆サン コノ明カリデオイデ オイデ」「コノアカリデ 行ッタクレ」などと唱えるのは、いかにも祖霊を迎えて送るにふさわしい愛情のこもったことばである。

なお、ボタ餅を、鍋餅、煮餅、半殺し、などと呼んでいるのは、作り方を表現しているおもしろい。

秋の取り入れが終わった後、十日夜に庭へ立白を出して、栗ポッチを作ったり、カカシ餅という新米の餅を作って供えたりしている。大世・鎌原・

芦生田・袋倉・今井などでは、カカシアゲの行事が残っているのは興味深い。庭にカカシを出して、餅などの馳走を供え、「カカシ様の立ち振舞い」をするので、芦生田では、十五夜・十三夜に比べて、十日夜が一番馳走を供えているという。収穫を感謝して、穀物の神であるカカシ神を、丁寧に送り出す気持ちがよく表われている。

なお、十日夜に、山の神の十二様の前に集まってお祭りする今井・石津の例は、多野郡上野村のように、十日夜の行事が、山の神となって帰る神を送り出す意味を持っていることを示している。

秋の刈り入れの終わりを、「鎌アゲ」というのは具体的で、さらに広げた庭先の収穫物を取りこんでしまおうと、庭コログガシ・ネコツバタキなどと呼んで祝うのも、作業に密着したことばである。

暮のすずはきを「ヨゴレ年」「スス年」といって、新しい笹や竹でほろきを作ってやるのは、単なる大掃除でなく、年神を迎えるための用意であることが、よく表われている。

大節粥の行事が少ないのは意外で、わずかに、足跡がくしの雪が降る話、門貝に残っていただけであった。

以上、ざっと拾ってみても、同じ吾妻郡内の六合村ともかなり異なった風習が見られることは興味をそそられる。

各項の中の排列は、奥の方の部落から低い方へと、川の流れにそって並べて、その変化が見られるように配慮したつもりである。(関口正巳)

一 月

元 日

年神 年神様はいっ来るというときはきまっていない。年神迎えの歌などもない。お札のくるるときで、十二月三十一日が「年取り」というから、このときまでにはくるのであろう。卯の日の卯の刻に帰るので、何

日も年神様のいる年はあまりよくない。元日が卯の日で早く帰る年などは神様に失礼なことがないのでよい。(大笹)

歳徳神様という、この神様は、卯の日の卯の刻に来て、卯の日の卯の刻にかえる(あがる)という。天から下ってきて、天へのぼっていくという。(芦生田)

年神棚 別につくらないで、平素神棚のあるところへお飾りをする。

お松のほかにお供えものとして山海の産物を吊す。柿、みかん、頭付、するめ、木炭、山鳥、鳩などもあげる。(大笹)

お棚板は松の木を六尺にひいて、三階といつて節(ふし)の三つある板を選んで使ったものである。

神棚の前に並べたり、脇に出したりして、あら縄で吊るす。年徳神のせ、お松を飾りお供えを供える。(干保)

昔は新しい板で正月棚を作った。松板をコビキで引いたもので、このお棚板は長さ六尺、幅八寸、厚さ五分と決まっていた。今は製材所から買う人もいる。お棚板は二十日に外して、鍋蓋を作ったり、自由に使う。

正月棚は神棚の隣りに並べて、スベ縄で吊るし、神主が作ったキリハギの年神様を乗せ、松飾りをする。(大前)

お棚用の板は毎年新調した。五種の飾り物をさげる。コブ、イカ、ユウシ、ミカン、干柿。しめ飾りをしてお供えの白餅を供える。(西窪)

むかしは、新しい板を製材所から買ってきて、おかざり板といつてかざったことがあった。巾一尺、厚さは五分、長さが六尺の一枚板であった。

松かざりと同じ日に、正月棚をかざった。正月棚にかざったものはつぎのようなものであった。

尾頭付(いわけ)がふつう、するめ、くし柿、みかん、こんぶ、豆木、栗、七色かざるのがふつうであるが、尾頭付、するめ、くし柿、みかん、こんぶの五つは必ずかざるものとされている。このほかに、手拭をかざる家もある。また、おそなえもちもかざるが、これは、かざらな

い家もある。

お正月中はお灯明は、朝と晩にあげる。

三が日のあいだはかみのほかに、朝と晩にこちそうをおそなえする。これは年男の仕事である。四日の朝そのこちそうをさげて、おかゆにして食べる。これをお棚さがしという。(芦生田)

オタナイタを買って正月棚を作る。オカザリには、イワシ、ミカン、イカ、串柿、コンブなどを供える。(今井)

カド松 カド松には、七・五・三の十五本のわらで編んだヤセツボを付けて、正月の供え物をその中に供えた。松飾りは今もしている。(干保)

シメ縄 わらで棒ジメを作ったり、七五三に縄から紙を下げたりした。

(大前) 飾り物 ミカン・スルメ・イワシ・串ガキ・コブ・カチ栗などを、しの竹に吊るして、神棚の前に飾った。お松の枝に掛けて飾る家もある。

(大前) 供え物 米の餅の上に栗の餅をのせて、重ね餅にして供えた。今は上

下とも米の餅。

門松にわらで編んだヤセツボを付けて置き、三元日に年男が朝晩めった食へ物を供えて置く。これは、大や鳥が食べるに任せる。(大前)

オカザリ 正月のオカザリのときには、豆の木と炭をかざる。ママでスミ(住) 良いようにというので、現在もやる。

書初めを三十数本も書いて交換し、親せき中に配ったりした。エンピツ一本ぐらいいもらった。(鎌原)

年男 長男が年男になる。女の子ばかりのときは主人がした。(大笹)

家の中年の男が年男になる。(小さい子供ではない)。年男は朝早く起きて、井戸から若水を汲むが、アキの方を向いて汲むだどという。若水

で茶をわかつて神様に供えた。これは女衆にはさせなかつた。(大前)

家の主人が長男が年男になり、元旦に若水を汲み、お茶をわかつて供えた。供え物は内の神様に供えてから、カド松などの外の神に供えた。

(干保)

年男はお元日の朝、若水を汲みお茶を入れて、お粥(供へる)。

三元日の食事の支度は男がする。家によっても異なるが、三元日のうち「なべかけはしない(ご飯はたかない)」家もある。(西窪)

三が日、七草、十四、五日の料理は男がやるものになままっている。元日には新しいシヤク(柄杓)を買って若水をくみ、タキツケには豆木を燃して一年中マメ(健康)でいるようにとて料理をした。(鎌原)

年男は、ふつうはその家の主人がなったが、妻帯者でないほうがいい。といった。若ければ若いほうがいいという。けがれないからだという。

年男の仕事は、年取りの晩からはじまって、正月の三が日まで、ごちそうの用意は女衆ですが、それを煮て食べられるようにするのが年男の役目であった。

年男の役目は、おたなさがして終った。(養生田)

年男にはあととりがなり、元旦に最初に起き、鉄ピンを洗って若水を汲んで来てお茶をわかつて、年神様などに進げる。

若水を汲むには、塩で口中を洗い、身を清めてから、若水おけてふだん使っている流れて汲む。さかさ水といって、下流から上流には汲まない。(今井)

若水 主婦が汲んできた。朝早く四時頃汲みにいく、汲む場所は部落の清水のどろとで、そこには飯綱大権現がまつられてあり(黒岩助太夫がお札をうけてきた)、水元の家ではオシメを飾っておくので、そこへ近所中の主婦が汲みにいった。(大笹)

元日になつたらすぐ、年男が井戸から汲んでくる。これでお茶をたてて、正月棚にあげる。また、新しい水で正月の煮たきをした。(養生田)

頼願息子が年男になり、誰よりも早く起きて、塩で身を清めてから若水を汲む。ふだん使っている井戸や流れから汲む。その時さかさ水を汲まない。又、外柄杓はしない。

若水でお茶を入れて、オタナの年神様を始め、エビス、便所、かま神、

湯殿、倉、水小屋、物置、井戸などにお茶を進せる。(袋倉)

朝湯 もとは特別な家で朝湯をたてた程度で、ほとんど朝湯はたてない。(大笹)

朝湯をたてる家もある。大晦日の夜十二時過ぎるとわかつて入る。一時ころには近所へ「はいりに来う」と呼びに来たので、風呂を借りに行った。昔は風呂のない家もあった。「おめでとうございませう」と挨拶して、行った順に風呂に入った。身体を清めてから初参りに行く。(大前)

元日に朝湯をたてる家もある。(養生田)

朝参り 除夜の鐘がおわるのと家中で氏神様(諏訪神社)へお参りにいった。末社も一廻りした。(大笹)

初詣りをすませるまでは「人と口をきくな」とて、兄弟でも口をきかない。今でもほとんどの人がお詣りに行く。(田代)

もとは旧正月で、一月遅れの二月一日から正月をした。一月は雪が少ないので仕事をかせぎ、二月は雪がどつさり降るので、正月をして休んだ。雪の中を氏神の諏訪神社へ朝参りするので、ももひきや足袋を付け本支度をして、頭を布で包んで出かけた。

米を紙に包んで行き、神前でオサゴとしてまき、手を合わせて、「家内安全」「村中安全」などと口の中で唱えて捧いだ。(大前)

元日になるのをまって諏訪神社へお参りに行く。家族のうちの誰でもよいが、年男がいくのがふつう。イの一番を期して先を争ってお参りに行く。一番のりは一年中の幸福がくるといわれている。お参りに行ってロースクをたててくる。おさく行くこと、ロースクが何本もたっていることになる。おまいりに行くときは、おさくを紙につつんでもって行く。おまいりに行って帰ってきてから、お茶をのんだりして、ゆっくり休む。(養生田)

年始回り もとは区長の家へ年始にまわり、区長の家では酒を用意しておいた。そのあと親類知己をまわった。いまはみんながクラブに集まっ

てすませる。(大笹)

大正時代までは、村中が全部出て家々を全戸年始回りした。諏訪神社（氏神）にお参りして、村の下の方から太神宮・天神・お大日・金毘羅様と回り、各戸を回る。昔のことで、ワラジばきで雪の中を押し回った。全部揃わなくても、行った順に回り始めた。区長の家などでは、縁側にむしろを敷いて、お神酒をくれた。

昭和になってから、区長がふれて神社に寄って、八時から区長の祝辞があり、お神酒を飲んで解散するようになった。村回りはしなくなつたが、隣組では最近まで年始回りをしていた。（大前）

むかしは、一日の朝からはじめて、正月中は年始回りに歩いた、むら内、名主の家へ一番先に行つてから、各家をまわつたという。順番はとくにきまつていなかった。なにももつていかなかった。「おめでとうござんす」といつてまわつた。親戚をまわるときには、手拭とお菓子（さざれという菓子）をもつて行つた。

現在は、一日の朝、公民館にあつてあいさつをかわし、それで年始回りの代りとしている。（芦生田）

親戚同志では、菓子や手ぬぐいなどを持って年始に行つたり、お返しに来たりして、お酒をこちそうになる。（大前）

元日は男の御年始。親せきぐらいまわる。（鎌原）

正月十五日前にジシギにくれば、ご年始扱いをする。しるこ、あべかわ、ぞうなどを出すことになつていた。（西窪）

もある。三日日は雑煮を食べることに決まつている家がある。ご飯の家もある。

大晦日の晩から三元日の間は食べ物を神様に供える。雑煮にして供えるのが本当だが、略して餅の切っぱしをフライパンで煎つてあげる。三元日は鍋を煮てはいけないともいう。また、朝は餅を食うのが本当だともいう。

三日ごろトロロ芋を食う家例がある。一年中に食う物を、正月中にみんな食つた。（大前）

この村には、とくに三が日の縁起をいう家はない。

正月三が日のあいだは、四つ足の肉を食べなかつた。その肉があつたとしてもこの間は食べなかつた。ウマとかウシは家族のようなものだったので、食べなかつたのである。（芦生田）

雑煮にはカネコモチと言う、餅を細かく切つたものを入れる。（今井）

初絵売り 元旦の夜明けに、三原あたりから初絵を売りに来る。朝早く来ないと、縁起物なのでヤシマルで暗いうちに来た。今年は一枚二百円だった。石の上に立つ女神の重神様などの絵を買つて神棚に貼つた。（大前）

だるま売り 二日ごろ、初だるまを車に積んで売りに来る。昔は籠に入れてかついで来た。登りだるまを買う方がよいので、村の下の方から登つて来るのを買った。年々大きいものを買ひ、またやり直す。ドンドン焼きに燃やす。（大前）

門付 祭文は五十年ほど前まで来た。越後から来た。万才は三河万才が来た。今年来たのは長野の人で、一人でやつて来た。今まで主にやつて来たのは、三河の人で、二人で来た。

ゴゼは越後から、目の不自由な人が来た。今から五十年ほど前まで来た。（芦生田）

二 日

仕事始め 仕事始めというが、トロロ汁を食べる位でこれというきまつたものはない。三元日はあそんでいた。

商店、運送屋は仕事をはじめ、初荷が通つた。初荷の車は材木、雑貨を積んでいて、車の上からミカンを投げてくれた。（大笹）

何でもよいが、自分の仕事をした。鎌や鎌の柄をすげたりした。（大前）この日は仕事はじめの日、とくに仕事をするのでなくとも、鎌なり、鉈を手にした。ふつうは、山とかはたけへ行つて、すこしばかり仕事を

してきた（はたけへ行つて、ひとつくわでも、ふたつくわでも、さくを

きつてくる。

この日のごちそうは一日と同じ。(芦生田)

山入り オマイ玉の木にするミズブサや、道ロク神のノルデを切りに行つた。どこの山でもよい。(大原)

山入りは二日に炭ガマの所に行つて、カマニワを掃いたりした。

オサゴを供えて木を伐つた。その時は方角を見ていい方角をやる。厩に出ている。ミズブサか山桑のマイダマ木を伐つてくる。(袋倉)

正月四日山入りの日で、道祖神の木(メエダマの木)をとりにゆく。十二さんに上げたおそなえを下げて、一つくらい食へてから山に行く。

いまは正月より前にとつてくる。(鎌原)

山入りは五日(四日にする家もある)。

山へ行つて、小正月の花木をとつてきた。とつてきたのは、ミズブサの木で、道祖神さまとか、小正月のまいだま木につかつた。(芦生田)

女衆の御年始 二日が女衆の御年始の日といわれ、ヨメゴが御年始に行く。(鎌原)

カマ神 正月にオシメを上げ、正月のお供えものを上げていった最後

にカマ神さん上げる。(鎌原)

三 日

三 日

三 元日の食事

元日 朝祝一ぞうに、しるこ。夕食一そば

二日 朝食一ぞうに。夕食一そば

三日 朝食一ぞうに。夕食一そば(西窪)

四 日

オ棚探シ 家よってきまつていない。

嫁の正月などということもいっていない。(大世)

「棚ザライ」ともい、三が日に年男が神棚へ供えておいたものを下

げて、オジャヤにして食つた。(大原)

四日はオ棚サガシをする。朝食にオジャヤをつくる。(西窪)

四日の朝、三が日正月棚に供えたごちそうをさけて、オジャヤにして家中で食べる。(芦生田)

四日にはオタナサガシをする。オカザリに使つたものは全部煮て食べる。(今井)

寺の年始 正月二日に坊さんが厩と大般若のお札をもつてまわつてくる。古くは「年量院御年始」などと先触れがあった。(大世)

四日は限らず、正月うちに坊さんが一人か二人オテンマを付けて回つてきて、お札をくれて行く。お札に金銭や米・粟・麦などをやる。

このほか、坊さんは春回り・秋回りをして米麦などを托鉢して、袋に集めて行くことも行なわれる。(大原)

四日は常林寺の二年始で、おしょうさんがくる。もとはザシキのエンサにきて、お札と汁しやくしをおいていったが、いまはダイドコからきて、針と交通安全のお札をくれていく。(西窪)

三日は坊さんの年始ときまつていた。この日は坊さんの年始日だったので、一般の人は年始を遠慮せよといわれていた。坊さんは、壇家を毎戸まわつた。坊さんの年始日は、むらによつてちがつていた。(芦生田)

六 日

六日年 馬の年取りともいい、夕食に白飯を食べる程度である。(大世)

馬の年取りで、馬のために妻、神などを煮て、夜、ごちそうしてくれる。そのころは、馬は台所の土間に飼つていた。

また、馬に餅をちぎつてくれた。馬の肥出しは十二月二十七・八日ごろしたので、この日にはしない。(大原)

この日は、六日どしといつて、年取りをした。大晦日のときと同じように、ごちそうを神様にあげた。お灯明もあげた。

この日のことは、「馬の年取り」ともい、むかしは、ウマは人間の

つきに大事にした。この日の晩に、ヒエとかムギ(両方をまざる家もあった)をにてウマにくれた。ウマにくれるごちそうは、家によつてちがった。(西生田)

六日は六日年とか牛馬の年とよい、家族と同じ食べ物を動物にくれる。(西窪)

六日の日をムイカドシといって、馬の年取りの日になる。(鎌原)

六日ドシは馬のトシトリで馬と牛に御馳走をする。(今井)

六日瓜 六日は「六日瓜」といって、瓜を切る。(西窪)

セリ取り 六日に「セリ取り」をする。(西窪)

七 日

七草 七草がゆをつくる。この行事は信州の方がさかんで、この土地ではずつと以前まな板の上を包丁でたたきながら「七草なすな土の鳥の」などと唱えごとをした。(大笹)

「七草ナズナ」といって、ナズナ・セリ・ニンジン・ゴボウ・大根・芋・長芋など、七色入れて塩味をつけて、ませご飯を作つて食べた。セリタキはしなかった。

「寒粥を食べは根(こん)が瘦れない」といって、七草を取りに行き、粥を煮て食べる人もいた。(大前)

七草はセリ、人参、ごぼう、芋、大根、葉、大豆など七様のものを入れた七草げえをつくる。(西窪)

七草は七いろ入れるというので、にんじん、じゃがいも、ごぼう、ちくわ、などを油でつくつて、ごはんの上にかけて食べた。

セリをとつてきてオヒタシにして食べた。寒いところのセリだから根のほろがよけいで少し青くなつたくらいはセリだ。

七草カユにはあずきを入れるだけで、汁のミの方にナナクサをそろえて入れる。(鎌原)

この日の朝は、元旦と同じようにごちそうをお供えた。

六日にとつておいたセリ(この時分は、野原にはこれ以外の青物はなかった)をよく洗つて、神棚(正月棚)にお供えた。むかし(今から数十年前のこと)は七草がゆをつくつた。セリなどを入れてつくつた。このときの料理は女衆がした。七草をきるときは「七草ナズナ、唐土ノトリノ、渡ラヌウチニストン」というのであった。

現在は、この日のごちそうは白のごはん。

八日に、七日の朝あげたごちそうをさげることになっている。(西生田)

唱え書 「七草ナズナニ何タタク、ホウボウマワツテ、セリタタク、唐土ノ鳥ト、日本ノ鳥ト、舞ヲマツテミセロ。」(門貝)

灯籠 七日の日ににお宮(鎌原神社)にトウロウを立てる。何日か前から子どもたちは夜なべ仕事にして紙をはりかえ、ハナをつけるが、一人百本も紙をよつてハナをとめてつるすようにする。ハナは半紙を四角に切つて三枚ちぐになるように重ね、カンジヨリをさしこみ、しっぽのところをノリをつけてはりつけ、三角になるように折つて、下の方に絵の具をつけてつくる。竹の細く割つたものに巻きつけてハナとし、麦わらにさす。トウロウは七、八寸くらいの太さのカラ松を使い、長さは五、十mのものとし、その先に四角につくられてはいるトウロウをさしこみ、その先を尖らしてハナをかざる。

トウロウは七草から十四日夜まで立てることになっており、毎日夕方になると倒して灯を入れて立て直した。これは子どもたちのしごとで、中学二年生がオヤカタといつて面倒をみた。(鎌原)

ケイヤク 七日は青年会の総会で、初会議を開いていろいろ決めて契約したり、役員が交替した。東部では今でも実行組合がしている。(大前)

十一 日

倉開き 鎌立ての行事はない。(大笹)

倉のある家は倉開きをしたが、外は雪で野ら仕事ができないので、鎌立てはしない。(大前)

十二日

十二日 十二日はバチがあたるから山の木を伐るなどという。この日山仕事を人は十二講をする。十二講はナベで煮たものをすりこぎでついたほちもちをつくる。宿は元福の家であるが、宿のないときは山でやつた。この日は山仕事の職人をよんだ。パンダイモチというのはウルチ米を用い、木の伐り株の上でついたというが、いまはやっていない。(大笹)

山の神さんの日で、餅やぼた餅をこきえて食う。ソマヤコビキの衆が寄ッチャバツテ、ウルチ米をふかして、木の株の上にあけて、マサカリの頭でたたいてパンダイ餅にした。餅はまるめて、ミソをつけたり、アソコやキナコをつける。十二様に上げたり食ったりした。ふつうの百姓はしない。(大前)

十二様のまつりは、きこりなど山仕事関係の人がやる。(戸生田)

十三日

モノゾクリ 十三日は「ノウ(農)をする日だ」といって、ノルデの木で、鎌二本、杵、エンガ、アソコ・ヒーボなどの農道具の形や、道コト神(二体)などを作って、小正月の供え物にした。また、タワラといって、ノルデの木を長さ三十センチくらいに切って、月の数だけ十二本そろえ、三本・二本・一本と重ねて六本ずつ束ねて、縄で三所しぼりの俵のようにした。一方は木の皮をむいて米俵とし、他方は皮をむかず、アワ・シイ(俵)など雑穀(ソウゴク)の俵にした。(大前)

ドウロウ神さんの像をつくるるとき、「五穀の俵」というので、適当な長さに切り、米の俵は皮をむき、ヒエの俵は皮つきのままで各六本、計十二本つくる。ほかにエンガ、テンガ、ハラミバシをつくる。タワラはなわでしぼって馬小屋の前に一年中掛けておき、鎌をさしたるという。(このタワラの木でミソをたくときに燃すとミソの味がよくなるという。小正月のものつくりの日、この日にヌルデの木で女神、男神をつくり、

ドンドン焼きのとき持参していった。そのほかアワボ、ヒーボ、はらみばし、エンガ、カユカキ俵などもつくった。

まゆ玉つくりもこの日にした。道陸神にあげるのはミズブサの木にさし、家の内にはヤナギにさしたものを飾った。松の替りに家の内外の神々に供えた。(大笹)

小正月は「農家の年取り」といい、十四日から二十日まで。俵やエンガなど農具を作ってお飾りをした。山くわのボクやミズブサなどにマイダマをさして、にぎやかに飾った。(西窪)

ハナはあまりつくりたくない。(門貝)

一月十三日に、おまいだまをこしらえた。家によつてはまいだまと白もち(のしもちにした)の両方をついた。

また、この日には、ヌルデンボウの木で、道陸神の像とか、農具類(鎌、えんが、きね、つちの形などにしたもの)をつくった。まゆだまとか、あられをつくって、山桑とかミズブサの木にさした。ヌルデの皮をむいたもの六本で米俵というのをつくり、皮をむかないのも六本つくり、これをアワ俵とした。これを六本ずつ束ねて、その束に鎌、えんが、つちなどをさして、それを馬小屋の前につるしておいた。

十三日についた餅のことをワカモチといった。とくにまゆ玉のかたちにつくって十六コ桑の木にさして茶の間にかざった。これを「十六まいだま」という。これは、宝珠の玉のようなかたちのも(湯のみ茶わんぐらいの大きさ)を八コ、マユのかたちよいもの(三〜四センチぐらいの大きさ)を八コ、合せて十六コつくった。またこれをオシラさまのまいだまともいった。(戸生田)

小正月の飾りかえ 門松やお松をとって、そのあとにおめえだま(まゆだま)をさした。おめえだまは、ヒエとかトウギビの粉でつくった。それを山桑(ミズグサ)の枝にさした。大きな枝には、一斗とか二斗分の粉でつくったおめえだまをさして、茶の間にかざった。このおめえだまは、「サクノハナ」といい、まゆのかたちにかざった家もある。その



小正月のタワラ 6本ずつしぼり、1方は皮をむく。
左は去年のもの。台所の棟木に吊る。(大前)

(撮影金子隼一郎)

ホダレはスリデンボーを使い、ホダレナタで作った。門松をさした所全部にさした。
ハラミバシもスリデンボーで作って置いて神棚に供えておく。田植の時にそれで親父とシンドリ(マンガを持つ人)とハナドリ(馬をひく人)が食べる。(袋倉)
天気占い スリデンボウの木で新しいタワラを作って、十三日の夜台所の内馬屋の端の梁に吊し、一昨年古いタワラを下してイロリで燃やす。タワラの木が十二本あるのを、一月から十二月までに見立てて、イロリの火の回りにさして置く。火を燃やしているの、しだいに焦げて木から水が出たり、蒸気がシューと吹いたりするのを見て、何月が雨が多いとか、風が吹くとか占なる。閏年には十三本作る。

年のみのりをたとえたもので、まゆだまが割れておちると、今年はみのりがいいといつて喜ぶ。
おまいだまは乾燥してとっておいて、夏のこじよはんには食べた。
さげたお松は、子ども(カンジンボウ)が道除神焼きのところへひいていった。(菅生田)

大正月のオカザリを下げて小正月のに飾り代える。マイダマ、タワラギ、ホダレ、ドーロクジン、カユカキ棒、ハラミバシ、アワボ、ヒエボ、百姓の道具をかざった。

ホダレはスリデンボーを使い、ホダレナタで作った。門松をさした所全部にさした。

ハラミバシもスリデンボーで作って置いて神棚に供えておく。田植の時にそれで親父とシンドリ(マンガを持つ人)とハナドリ(馬をひく人)が食べる。(袋倉)

天気占い スリデンボウの木で新しいタワラを作って、十三日の夜台所の内馬屋の端の梁に吊し、一昨年古いタワラを下してイロリで燃やす。タワラの木が十二本あるのを、一月から十二月までに見立てて、イロリの火の回りにさして置く。火を燃やしているの、しだいに焦げて木から水が出たり、蒸気がシューと吹いたりするのを見て、何月が雨が多いとか、風が吹くとか占なる。閏年には十三本作る。

ホダレはスリデンボーを使い、ホダレナタで作った。門松をさした所全部にさした。

ハラミバシもスリデンボーで作って置いて神棚に供えておく。田植の時にそれで親父とシンドリ(マンガを持つ人)とハナドリ(馬をひく人)が食べる。(袋倉)

天気占い スリデンボウの木で新しいタワラを作って、十三日の夜台所の内馬屋の端の梁に吊し、一昨年古いタワラを下してイロリで燃やす。タワラの木が十二本あるのを、一月から十二月までに見立てて、イロリの火の回りにさして置く。火を燃やしているの、しだいに焦げて木から水が出たり、蒸気がシューと吹いたりするのを見て、何月が雨が多いとか、風が吹くとか占なる。閏年には十三本作る。

ホダレはスリデンボーを使い、ホダレナタで作った。門松をさした所全部にさした。

ハラミバシもスリデンボーで作って置いて神棚に供えておく。田植の時にそれで親父とシンドリ(マンガを持つ人)とハナドリ(馬をひく人)が食べる。(袋倉)

天気占い スリデンボウの木で新しいタワラを作って、十三日の夜台所の内馬屋の端の梁に吊し、一昨年古いタワラを下してイロリで燃やす。タワラの木が十二本あるのを、一月から十二月までに見立てて、イロリの火の回りにさして置く。火を燃やしているの、しだいに焦げて木から水が出たり、蒸気がシューと吹いたりするのを見て、何月が雨が多いとか、風が吹くとか占なる。閏年には十三本作る。

ホダレはスリデンボーを使い、ホダレナタで作った。門松をさした所全部にさした。

この火を燃しながらマイ玉を作る。
小正月のタワラには五穀豊穣・家内安全を祈って、木で延銀(ノベタワ)や杵を作ったものをさして、カマドの頭に置く。

イロリで一昨年のタワラの木を燃やす時、毎月の天気を占う。水が出る月は雨が多い。アワが出る時大雪、蒸気が吹くと風、そのまま焦げると天気良好、何も出ない月は天気はよいが日でりになるなどと判断する。

(大前)

タワラは「サクノ花」といって、ノリデの木でアワボ・ヒエボの俵を作る。長さ五十センチほどのノリデの木を六本ずつそろえ、一方は皮をむいてアワ俵、他方はそのままヒエ俵としてしぼり、カマドの上や土間の天井のはりに吊るして、サクを折る。その俵にノリデの木でタワラ二本、スキ二本、エンガなどの形を作ってさしておく。この俵の木は翌年マユ玉を作る時に、取り替えて、ふるい、十二本を月別にいろりにさして燃やす。木が燃える時に、水が出ると雨が多い。煙が出る時風が吹くなどと各月の天気を占う(干俵)

スリデンボーで、皮をむいたもの十二本を束ねて米俵とし、むかないものを雑穀俵にし、鎌や鍬の農具をかたどったものを差しておく。前年の米俵を14日にオマイダマを作る時に燃やす。十二本のスリデンボーに一、二月まで書いておき、水をふき出したものにより雨を占う。三月と書いてある木が水をふき出せば三月には雨が降る。(今井)

屋敷神 正月十三日までは、屋敷神さまをおがまない。(西窪)

マユダマ 正月十四日・小正月に柳の木にヒエ・ソバ・米のダンゴをさし、二十日までさしておいた。これをメーダマといい、神棚に飾った。

養蚕は昭和十五・六年頃までやった。

ドーロクジンはオンボヤキとあった。(田代)

マユ玉は十三日夜、米(白)、アワ(黄色)、ヒエ(灰色)、ソバ(ねずみ色)、モロコシ(黄色)など、色とりどりのだんごを作った。形はマユの形、丸い形、宝珠の玉、犬の形などで、カワバタヤナギの枝を五〜七

の形、丸い形、宝珠の玉、犬の形などで、カワバタヤナギの枝を五〜七

の形、丸い形、宝珠の玉、犬の形などで、カワバタヤナギの枝を五〜七

の形、丸い形、宝珠の玉、犬の形などで、カワバタヤナギの枝を五〜七

の形、丸い形、宝珠の玉、犬の形などで、カワバタヤナギの枝を五〜七

の形、丸い形、宝珠の玉、犬の形などで、カワバタヤナギの枝を五〜七

本取ってきて、さしておく。大きなボクに飾ることはしないで、年徳神の棚に供えてある松飾りと、十四日の朝取り替えて供える。(千俣)

マイ玉は、十四日に女衆がつくるがマユ形や宝珠の玉の形、鳥・鶴・犬などの形も作って、木の枝にさした。大きなボクにさして、居間に飾った。

マイ玉を五、六個さした枝を、お松と飾り替えるため家の内外の松飾りを供えた所へ、交替に供えた。

十五日のオンボヤ焼きの時道ロク神に供えたマイ玉を枝ごと持って行って、ドンドン焼きの煙にあわせてあぶって来て、家中で食べる。ほかのマイ玉は、二十日の朝エビスの時に下げる。(大原)

まゆ玉は十三日に作り、十四日にミズブサにさし、松をおろしたところにさす。米、アワ、ヒユ、トウキビなどで一、二升つくる。形は丸、まゆ形、ほうし形にして、割れて落ちると実ったとよる。(大原)

まゆ玉は百姓の花。さしたまゆ玉は、二十日の朝コナシッコスルと言って手早くとる。まゆ玉をとるのが遅れると、とり入れが遅れる。「遅れっ煙のも早くまとめろ」と言う。(門貝)

オシラ様 オシラサンには、一升でまゆ形に十六個つくり飯ツギの中にわらを敷いて入れて年神様の下におく。(門貝)

オシラ様は蚤神でお姿はない。マユ玉を十六個大きく作って、ボク(桑の株?)にさして、都合のよい所へ飾った。大黒柱へ飾り付ける家もある。座敷のカドや神棚の下にも飾る。(大原)

オシラサマのマイダマは十三日にオマイダマをつくるが、大きくマイの形に十六個つくて、桑の枝を切ってきてさす。この木は使った後もとっておいて、初午のマイダマをつくったときにもさして使った。ほかのマイダマは五穀でつくるというて、アワ、ヒユ、キビなどでつুক্তた。

(鎌原)
オシラサマノマイダマは、十六メーダマと言う。重箱かおひつの中にワラを敷き、松の枝をしてその上に十六のマイダマをのせて遊せる。



オシラサマ 歳玉の下に下っているのはオシラサマの御幣。神棚向って右手に飾っている。(鎌原昭29)
(撮影都九十九一)

オシラサマの掛軸等は出さない。(袋倉)

オシラサマノメーダマは、大きいマユの形をしたマユダマを十六個作り、オヒツの中にワラをして、その上にのせる。(今井)

まゆ玉を正月中は団子というとおこられた。(門貝)

ナリスモコ 十四日 梅、桃、梨など実のなる木に「おまえは成る木か成らぬ木か、ならなきや元からぶっ切るぞ」とたたいて、まゆ玉のゆで湯をかける。(門貝)

道祖神

オ松引キ 小学校三年以上の男の子や青年シヨウウが、十二日に「オ松オロセ、ヨイ」と村中をがなつて回り、松飾りを集める。それを村の中心のお墓のある道路の広い所の煙に持ち寄って、道ロク神小屋を立てる。(千俣)

道祖神のために、オテンマの人や子供たちがお松集めをする。(昔は高等一年の子が総大将だった。)家々から、正月の松飾りを家の前に出しておくと、子供が集めて回る。この時、子供は各自カンジン棒という長さ約一メートルのミズブサの棒に、オシメや弊束を吊るしたものを持って振りながら門付けをする。「ヨメヨメ、マイヨメ、福ノ神、マイヨメ」と唱えて、家々から米を集めて袋に入れる。米は、十四日、十五日と二回集めて、売って子供たちの報酬にした。お金をくれる家もある。

松飾りが集まると、オンボヤ作りをする。「オンペンヤ作り、出ートタレ」



道隄神小屋 大小2つの小屋が川原にたっている。
大きい方の頂きに書初めがしばってある。(西窪昭
29) (撮影都九十九一)

昔は十五日早朝、時計が十
二時をすぎると間もなく「オ
松ヲオロシヤッシャレ」とい
つて子どもたちがまわってき
た。十五日ガユを煮て供えて
から松をひくことになってい
るので、しかもおかゆは男衆
が煮るので大変なさわぎをし
た。また松かさりも多かった
のでひくのもさわぎだった。
最近では、十四日のうちにオ
サゴを上げておいて、十五日
の朝にはおろしてしまいうよう
になった。(録原)
オンボヤ作り



道祖神—嘉永六五年(西窪)
(撮影中村和三郎)



道祖神—安永八亥天八月吉日
(門貝字鳴尾)

(撮影中村和三郎)

といつて、青年を呼んで、村外れの川原などにオンボヤを作ってもらう。
また、マキを各戸から二本ずつもらい、たきつけももらって、オンベ

以前は松の丸太を共有林から三本伐ってきて、道祖神小屋の骨組を作った。青年たちが出て、回りに松飾りをたけたり、モミの枝を中につっべしこんだりした。子供がモミの枝を二束も三束も集めたが、山を荒らすので止めになった。笹の葉は、各戸からカマダキ(たき付け)にして、いれるものを、一束ずつ集めて、小屋の中に詰めた。お供えをのせた紙を集めて「幣束を作り、棒に付けて立てた。書初は棒に付けて、外側へさして飾った。オンボヤは大小二つ作った。(千僕)

三原では、ドンドンヤキを、一月十四日と十五日との二日にわたっておこなった。これは、三原が中居村と赤羽村の二つのむらが合併してきたことによると考えられる。旧赤羽地区では十四日、旧中居地区では十五日にドンドンヤキをした。

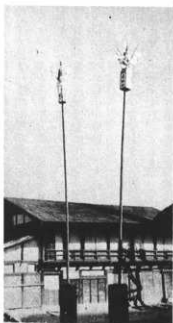
ここでは、旧中居地区の場合について記すことにする。



道隄神小屋 正面の山は白根山 (録原昭29)
(撮影都九十九一)



道隄神のボンデン (録原昭29)
撮影都九十九一)



道隆神祭の万燈 万燈の文字には向って右「奉納道祖神」左は年月日らしい。(鎌原昭29)

(撮影都九十九一)

十五日の朝、おかざりをはずしてまとめておく。それを子どもが来て、ひっぱっていく。子どもたちは、それをドンドンヤキをする場所へ集めておく。青年団は、農家からムギワラ、山からモミの枝を切ってきた。(山持ちからもらってくる。小屋の一番上には古いダルマとか、書初などをかざりつける。小屋の中にはムギワラを入れる。まわりにはモミの枝をならべる。(三原)

道祖神小屋は、もとは観音堂の手前どころ、現在は上と下の二か所につくる。小屋をつくるのは親たちで、木も多かったからモミの枝などをおろしてきて大きいのをつくった。(鎌原)

カンジン棒 子供が松飾りを集めたあと、お供えのシメ縄にさした弊束を取って、長さ一メートルほどの棒に付けて、カンジン棒を作った。一人一本ずつ担いだ子供が、各戸を回って祝い物を集めた。「十銭 一升」といって、お祝いの金銭や米をもらうと、「福ノ神、舞イコメ、舞イコメ」と、お祝いのことを言ってお帰る。金銭や米や書初をそれぞれ預けてくると、米は世話人の家でお金に替えてもらって、子供たちで分けた。宿で煮たきはしない。(千俣)

子どもたちは、十五日に、ヌリデで作った棒をいぶし、さらに墨をぬつ

て、先にシメタベイをつけたカンジン棒をかついで、「カンジ、カンジ」といいながら家々の縁側をたいて歩く。子供の生まれた家、縁とりした家、引越してきた家などに行つて「しゃく、一升(一銭一升)」をもらってくる。

子供がまわった家では、オミゴタといって米、金、月の数だけさしたまゆ玉をくれる。(門貝)

青年団が小屋をつくっているあいだに、子どもたち(小学生一年から六年まで)はカンジンボウをする。おやかたが、ボウの先におしめをつけて、それをもつてあるく。おやかたのあとには、子どもがついてあるいた。おやかたは金袋をさげていて、毎戸まわつてお金をもらおう、その中に入れた。子どもたちは、「カンジンボウ、カンジンボウ」といいながらまわった。三原では、二組に分れてまわった。お金とかミカンなどをもらうと、「福ノ神マイコメ」といって、おしめをなげこんだ。ほとんどみなお金をくれた。なにもくれないと「貧乏神、マイコメ」という。むら内をまわりきると、集会所のところへあつまって、もらってきたお金は子どもたちが平等にわけた(以前は年令によって多少の差があったようだ)。それぞれ小づかいにした。ミカンなどは安く売つてお金にかえた。子どもたちは、そのお金をもらうのが楽しみであったという。この行事は昼間。

道祖神には、村の祭りの所をみんな持つて行って、豆がらを集めたりする。そのあと子どもが村めぐりをする。正月の御幣束をつけたものをつき、「カンジンボー、カンジンボー」といって廻る。今井では、男のものを作つて廻る。(三原)

十五日の夕方、子供たちはカンジンボーを持って、各家の座敷のマイダマをつついて歩いた。(西窪)

道祖神の勧進は、十五日の早朝、お松をひいた直後、子どもたちがやつて来て「ハライタマエ、キヨメタマエ」と唱えて色紙でつくつたセモノカミをくれると、そのあとで幣束の丸く固めたもので玄関口をたたきな

から「ドウロクジンのカンジ セエノカミノカンジ、サケイッショウウドンブラコ、コメコメ、アワアワ、オマイダマオマイダマ……」と叫ぶ。

子どもたちは各人が、米、アワ、キビ、オマイダマ、ヒキワリなどときまった袋をもってまわっているの、くれる方も子どもの数に合わせてオマイダマなどを分けて入れてくれた。集まったものは公売し（大人の役員が手伝って、売上げた金は平等に分けてやった。最近はおヤカタというが余計にやるようである。いろいろの家のものがまじっていてうまいというので買っていく人もいた。（兼原）

芦生田では、一月十四日の夜ドンドン焼キをした。ドンドン焼キの中心になったのは、昔は小学生（一年から六年まで）で、かれらのことをカンジンボウと云った。親方は小学校の六年生、十四日の朝三時ごろから、それぞれ竹の棒をつきながら一軒一軒おはらいしてまわった。竹の棒の先には色紙とか扇をつけた。これをオンベといった。親方（隊長）は棒に金紙をまき、十二色配合した御幣を持つ。副隊長は銀紙をまいたが、そのほかのものは何もまかない竹を持って歩いた。なお、親方は金の袋を首から下げていた。子方は「カンジンボウ カンジンボウ」といながら「カゼノ神ハライ出セ、ヤクビヨウ神ハライ出セ、福ノ神マイコメ」といながら、毎戸まわった。各家では、以前は米を一升と金一錢を子どもたちにもやった。当時はこれを「シヤク一升」といった。シヤク（百）とは一錢のことであった。米のない家では、お松をとったあとにさすまい玉を一升やった。最高十錢くらい出した家もあった。金などの出しつづりの悪い家があると、竹の棒で廊下（縁側）をはいたという。もらい集めた米は金に代えて、三段階ぐらいにして各人に割って、カンジンボウの連中で分けた。今はよしたが昭和三十年ぐらいまでやった。

カンジンボウは、各家をまわりながらお松を集めた。集めたお松は一か所に集めて燃やした。これをドンドン焼きと云った。その場所は諏訪神社へ行く途中の道祖神塔の立っている近くの田であった。今は松集め

だけしている。お金は平均に分ける。（芦生田）

この日にカンジンボウを作る。スリデンボウの木で、直径20〜30cmで、二尺近く、男根を形どる。村中安全、大伏戸、正月吉日、と墨書する。十五才以下の子供がそれを持ち歩いて、全戸の縁ばなをたたき歩く。「ドウロクジンのカンジンボー ダンゴ一升、米一升、ドウロクジンノカンジンボー」とがなりながらやる。各家では用意しておいた錢・米・マイダマを子供たちにやる。子供たちはそれをくれるまで縁ばなをたたいている。それを貰うと、その家の人数だけマイダマをおいていく。最後に集めたマイダマを女衆がゆてみんんで食べ、その他のものは集めて売って金を分配する。一人で二千元位になる。

このカンジンボウを叩きはじめるのは、必ず熊川肇家（屋号はカジヤ）と決まっている。

カンジンボウはドンドン焼きで燃してしまふ。毎年上手な大人が作ってやる。（今井）

道陸神像 木で道陸神の男女の像をつくる。十四日の夜は、道陸神はイチキヤクだからとて、床の間に据え、お高盛りの膳を供える。また道祖神はオオマクレー（大食い）だから幾日も置くわけにはいかないとて、十五日の夕方ドンドン焼きの時送って燃してしまふ。（田代）



道陸神へのお膳 道陸神には向って「奉納男道祖神」とあり、右は女道祖神。（西窪昭29）

（撮影都丸九十九）



道陸神像（西窪昭29）
（撮影都丸九十九）

なるべく小さいのがよい。道陸神焼きの唱え言

「ドーロクジンノバカガ、一升飯クラッテ……(忘れた)」(大笹)

十三日夜、オッカドの木を高さ十〜十五センチに切り、男女二体のドウロク神の姿を作る。皮を削って墨で顔を描くが、男はつり目にして強そうにし、女は垂れ眉にしてやさしくし、丈も少し小さくする。ドウロク神は年徳神の下に台を置いて飾り、食べ物も供えたり、マユ玉を供えたりする。

ドンドン焼の時に、ドウロク神を持って行って、火に投げこんで焼いてしまう。木のカカシ神は作らない。(千俣)

ノルデの丸木を削って顔や着物を墨で書いて、あごを付け、夫婦二体の道ロク神を作る。男はヒゲを書き、女はやさしい顔にして少し小さく作る。ふつう径十センチ、高さ十五センチぐらいの大きさで、太いもある。床の間に飾って置くが、「道ロク神ノ一夜泊り」といって、十四日の夜一晩泊めて年を取らせ、ご飯・魚などを供えてごちそうし、おマイ玉も前に飾る。前夜と翌十五日の朝夕の三食供えてから、十五日の夕方出してドンドン焼きで燃してしまふ。

道祖神は風の神だという。鳥追い行事はしない。(大前)

ヌリデの木を切って来て十四日に男と女のドウロク神さんの像をつくる。箕の中に立て、俵も入れてかさった。ドンドンヤキで燃すが、ドウロク神は天にあがったという。(鎌原)

すきすきに、道陸神の顔を木に書いた。「道祖神」と字を書いて、ドンドン焼きに持って行って燃す。(芦生田)

ヌリデンボーで男女二体の人形を作った。台の上のせて酒、飯を運んで、その晩のドンドン焼きで燃した。

ドーロクジンは兄妹で夫婦だという。(袋倉)

ヌルデの木で五寸ぐらいの長さの道祖神を毎戸がつくった。絵を書いたり、道祖神と文字を書くだけのものもあった。(西窪)

道陸神焼き 村の上、中央、下の三か所で松飾りを燃す小屋をつくつ



道陸神焼き (芦生田昭29) (撮影部九十九一)

た。松は子供が集めてくるが、小屋は青年が山から伐ってきたやつた。

この日子供達は、家々を回ってオミキ代をもらってきたので、これを年長の子供が分配しない。子供組には特に役はない。小屋は十五日の晩燃す。このとき子供達は「オンボヤ」と大声で伝えあるき、書初めなども燃した。この日の煙が村をまくと伝染病など出る。縁起が悪い年になるといい、煙が村の外へ流れるとよい年だという。マユ玉は煙にあててきて、家で分けて食べ

た。病氣除けという。(大笹)

以前はオンボヤを大小二つ作った。十五日夕方四時ごろ、小さい方に火をつけて、村中へ知らせる。「オンボヤ、タキツ、始メタゾ」というので、村の衆がマイ玉だんごを柳の枝にさしたものを担いで集まってくる。ドンドン焼きの煙にあって、一年中マメ(丈夫)になるといい、この火でマユ玉を焼いて食うと無病息災になるといふ。

煙が大原の畑の方へ行くと今年は豊年だとい、村の方へかぶさると悪い病気がはやるというように、煙のかえり具合で占う。

オンボヤの柱は家へ持ってきておいて、春先にミソたきをする時に燃やして、ミソ豆をたくと、ミソが色よくできるといふ。(千俣)

オンボヤは村はずれのあき地や川原などに作る。山から伐ってきたモミの木をシントウに立てるが、上は葉付きのまま、下枝を払い、下の

回りに、枝や松飾りを開むようにかぶせて丸くする。子供の書初やキリハギなども中に入れて置く。書初を焼くと、手があがる（上手になる）という。

川原の上下二か所にオンボヤを作って、十五日夜、村中が出てドンドン焼きをする。家々からミズブサの枝にマユ玉を七五三にさして、担いで行き、その火にあぶって食べたり、家に持ち帰ってカゼをひかないように家中の者が食べる。

最近、厄落しとのミカン投げをする人も出るようになった。（大前）
オンボヤは十五日の夕方、もとは須原の墓地でやったが、今は河原でやる。

モミの木を柱にして、松・竹・モミの葉をしばって焼く。柱にするモミの木は区長がくれる。

オンボヤの風にあわせると、風邪をひかない。

まゆ玉をけふにあわせて焼いて食べると病気が直る。（門貝）

ドンドンヤキに松やオシメを寄せて燃してこのケブにのってお正月さまは帰ってゆく。（鎌原）

小屋に火をつけるのは夕方である。そのときには子どもたちはみなドンドンヤキの場所にあつてきた。火をつけるときになると、火をつけようとするグループと、火をつけさせまいとするグループに分れて争った。つっこくりっことなした。ドンドンヤキをする場所はきまっていた。むかしは川原で焼いたが、現在は東中学校の庭でおこなっている。火をつけると厄男がその場所でミカンをまいた。また、小正月のまいたまをミズブサの株の先にさして、その火でいぶす。これは家へもちかえって、家中のもので食べる。一年中病気にならないという。

ドンドンヤキのときに、道陸神の像（木でつくったもの、男女一対）をなげこんで焼く。道陸神像に十四日どしの晩に、ごはんをしんせてから、翌日もついてもやす。

子どもたちは、このときに書初をもつていって焼いた。

現在では、各家庭から区の方で五十円ぐらいずつあつめて、子どもたちに分けてやっている。おまつは現在でもやっている。（三原）

ドンドン焼きにおまじりに来た人たちは、この火でオマイダマ（棒の先にさしたものを）をやいてたべた。これをたべると風邪をひかないとい

す。また、このとき、スルデの木でつく



った道祖神さま（道祖神）と字を書いたものもあつた。をもつてきて、お松と一緒に焼いた。この道祖神さまは、前の晩に家でこちそうをあげてお祝いをし、ドンドン焼きのところへもつてきて

焼いたのである。また、子どもたちは自分の書初めをもつていって、焼いた。

オンベをさした竹を利用してわりばしをつくって、それでカイコの糞座のときに、カイコをはさむと、カイコがあたるといわれた。

カンジンボウは、昭和三十年ごろまでやっていたようだ。そのあとに、お松があつめて焼いているが、子どもたちには、伍長が各戸からあつめた金をわけてやっている。

一月十四日はドウロクジン焼きで、子どもたちは、お昼（昼食）を食べると家を出て、ドンドン焼きの準備をはじめた。おしめやお松をつか

つて、円錐形の小屋をたてた。小屋のことをドウロクジンヤといった。小屋をたてたところは、今から五十年ほど前からは一カ所となった（諏訪神社の近くのドウロクジンの石像の近くの田の中、俗称でドウロクジンと

いう）が、それ以前に、二カ所焼いた。他の一カ所は観音様のわきの北坂というところであつた。

小屋は夕方までに立てて、夕飯を食べてから火をつけた。このとき、古いお札をもやした。また、各家で、スルデの木でつくったドウロクジンさんをもつていってやした。このドウロクジンさんは十三日につくる家もあるし、十四日につくる家もあつた。夕飯をつ

て、ドウロタジンさんあげてからドンドン焼きにもつていった。

小屋の心棒にはオンベをつけたが、それをむらの若い衆がとりつこ(うばいあい)をした。それぞれまをしたので、大きすぎだった。

書初をもつていってもやした。それが空に舞いあがると、手があがるといつて喜んだ。

まいだまをもつていって、棒の先につけてやいて食べた。

このときの竹もえくじで、糞虫用の箸をつくった。この箸でかいこをはきたでると、かいこがあたるといった。(芦生田)

モミの木を心棒にして燃えやすいた松葉等で大ド、小ドを作る。二〜三つ作った。大ドのミネに一m位のカンジンポーを竹の先につけて立てる。それにおシメをつける。

大ド、小ドに火をつけても、部落に煙が行くと村に厄病がはやると言つて消してしまつて、つけ直す。

カンジンポーのおシメが垂れ下がってくと奪いあう。それをとつて神棚にあげておくとき蛋があたる。又、カンジンポーをしぼりつけてある竹をとつてきて、上座時の箸に使うといふ。(袋倉)

書き初めは、竹の先につけてオンボヤでもした。高く舞い上るほど上手になるといふ。(西窪)

一月十五日の晩にする。十五才以下の子供が中心になる。モミの木を心棒にして、松・モミの枝を集め十メートル位の高さのものを七〜八つ作った。そのため、学校を休んで山へ木を取りに行つたりした。各戸で繩を一房ずつ出した。村はずれのドーロタジンでそれに火をつけて燃やす。年書キ(書き初め)と一緒に燃やすが、そのもえさしを拾うとき蛋があたるというので、奪いあう。年よりが火をつけると子供がそれを消したりして、大騒ぎになる。(今井)

ドンドン焼きの始まり 昔、村中にはやり病いがあつた。何人も死んだ。その時は厄病神が誰を病ませるといふ帳面を作つていて、それをドーロタジンに預けて、その帳面のとおり誰それを病ませると言つた。ドー

ロタジンは、正月十四日に火事にしてその帳面を焼いてしまった。そのおかげではやり病いがおさまつた。そのお礼として毎年正月十四日にドンドン焼きを始めた。(今井)

オンボヤのご飯 十五日の朝、各戸から米を集めて、村はずれの家でご飯を煮てくれた。オンボヤ作りに出た若い衆にオダフウとして、握り飯にしてくれた。ドンドン焼きに行った人たちもオダフウとしてくれたが、これを食べると風邪をひかないといつた。今はご飯をたかない。(大前)

西窪ではオンベヤの時に、宿でにぎり飯を作り、ざるに入れて持つて行き、オンベヤの煙に合せてから、オダフウとして村の人に分けていふ。(千俣)

鳥追い 太鼓をたたいて鳥追いを行なつた。「トリオイダ トリオイダ、二郎ドンノトリオイダ。頭切ッテ、尻切ッテ、佐渡ガ島マデホーイ、ホーイ」と大声を張り上げた。(今井)

カマ神 祭る日は特別にない。正月のシメ飾りをしたが、これはドンドン焼で焼いてしまふ。ルセンギョウという事も聞かない。(千俣)

厄落とし ドンドン焼きのときに厄おとしをした。厄年の人は、女性が十九才と三十三才、男性は二十五才と四十二才、ミカンをもつてきてその場で投げた。むかしは金を年の数にちなんでもつてきたという。たとえば、三十三才の人は、三十三銭というようにして、それ以上はいくらでもいふ。(芦生田)

男の厄は二十五、四十二、女は十九、三十三、十四日の晩に、道祖神の所で年の数だけ金を(現在はみかんなど)をまいて厄を落とした。現在は十五日にオンボヤでする。(西窪)

男は廿四才、四二才、女は一九才、三三才の人が、正月十四日、小正月に神社に詣り、お祓いする。(田代)

厄落しは舊州別所の八日堂に出かけて蘇民将来を買つてきた(大前)。ドンドン焼きの場所には厄年の人がきてむかしは金を投げた。金額は

十九才の人なら十九銭というように、厄年の人の年令にあわせた金額であった。それをドンドン焼きに来たものがひろった。最近では、ミカンをなげるようになった。(声生田)

女は十九、三十、男は二十五、四十二の厄年の時は、信州別所の北向観音に、正月初詣する。カンジンボーの時、蜜柑を配る。(三原)

諏訪神社の宵祭り 正月十四日の夜は宵祭り、簡粥があるので、村人が大勢お参りに来た。大門通りには露天商人が店をたくさん並べてにぎわった。テンブというくじ(バクチの一種)をやる人もいて、六本の短い縄の一本のもとに天保銭をつけて、六人が一本ずつの縄のくじを引いて、当たった者に六銭分の品物をくれるものであった。運否天賦の語から来たらしく、「テンブ安い、テンブ安い」とがなつて人を集めた。明治中ごろはやっていたが、学校に出るころ(明治三十五年ごろ)止めた。(干保)

十五日

十五日ガユ 吹いて食べると田植に風が吹く。釜をハツツイにかけてあったのと同じ向きにおろして、ノリデン棒でつくったケイカキ棒を入れて、「世の中、上の原、須原……」とあっちこちつつく。

ケイカキ棒は神棚へあけておいて、五月の作付の頃に割って畑へもって行ってムシヨケにさす。(門貝)

一月十五日の朝小豆がゆをつくる。かいかき棒(二本)をなべの中のかゆ(いろりのかぎ竹につるす)に入れる。なべの東西南北をきめて、なべをそのまま下ろし、さましてから神さまに進げる時に、炉ばたで、かゆにかいかき棒をさしてみる。その時の固さによって、その年の陽気と判断する。これをするのは主人。かゆが固ければ、その年は陽気がいという。(三原)

十五日カユはあずきを入れずシラガユとする家が多い。どうでもアズキケエを煮る家もある。(鎌原)

正月十五日前にオカユを煮ない。

七草前にオジャをしなない。(袋倉)

十五日の朝、十五日がゆをつくった。このかゆは、かいかき棒(ドウロクジンと同じ日につくった。二本つくる。棒の先を四つ割りにする。)でかきまわす。そのあとかいかき棒は神棚にあけておく。

十五日がゆは熱いからといって、ふいて食べてはいけないとされた。ふいて食べるのと田植に風がふいて、苗をふっころがすという。この日は早起きしてかゆがさめてから食べるというのである。

(カイカキ棒は、苗代の上に、たねまきをしてから、苗間の水口のところ)二本たてた。この棒の上に、焼き米を熊野神社の千羽鳥のお札(カラスゴウ)で包んでしんせる。このとき、コメとママをいって、あつまってきた子どもたちにくれた。なお焼き米は、カラスの口を焼くといって、カラスよけのために供えた。)(声生田)

粥占い、粥かき棒を鍋の中にさしこんでみて、東方が固ければひでり、柔かければ平年。南方も同様。西方、北方ならばこの反対。(田代)

カユカキ棒 ヌリデンボーで2本作る。上端を十文字に割る。十五日ゲエをそれで食べる。ネーマの木にさす。(袋倉)

ノルデの木の先を削り、上を十文字に割って、カユカキ棒を作り、十五日の粥が、柔かいか固いかをかき回してみる。

あとで田の水口に立てると、苗のタチがいいという。(大前)

正月の十三日の朝山に行き、ヌリデンボウの木を切ってきて、長さ一尺ぐらいのもの四本つくり、神棚にあけておく。また、このときはらみばしをつくるが、これは、秋になって稲の穂がよくはらむようにとの意。正月十五日の朝、小豆入りのかゆをつくり、かぎに掛けた鍋の位置をかえずにそのまま神棚の下へもっていき、けいかき棒で、鍋の中の東西南北をついてみて、かゆが固いところは、陽気がいい、やわらかいところは陽気わるいとした。

そのあと、家中のもので、はらみばしでかゆを食べて祝った。なお、

このときかゆをふいて食べると、苗代種まきのときに風が吹くといわれている(種まきのときは、晴天無風がもつともよいとされている)。(三原) ケーカキ棒に「豊年万作、五穀成熟、年月日」と書く。神棚に供えておいて、ネーマをこしらえる時に神棚から下げて水口に立てる。上に十文字の割れ目を作り、そこに米つぶをおく。(今井)

ハラミ箸 家人数だけ作り、そこに米つぶをおく。(今井) ハラミ箸 家人数だけ作り、そこに米つぶをおく。(今井) にする。ハラミ箸は集めて、ドンドン焼きで燃やす。

オミタマ様は聞かない。鳥追いや成り木責めの風習も聞かない。(大前) 十五日ゲーはハラミバシで食う。スルデでハラミバシとカイカキバシをつくる。(西窪)

小正月のときにはらみばしをつくるが、これは桶の穂を意味している。これを家族の人数だけ作り、これで十五日のおかゆを食べる。(三原)

十六日

農具休み やぶいりとはいっていない。この日は地獄の釜のふたの開く日で、道具休みの日という。成り木責めはやっていない。(大笹) 仏の日 十六日はお墓参りをして、線香や菓子供えてくる。女衆がノメシ(なまける)をする日。(大前)

十六日は仏の日で、墓まいりをする(西窪) やぶ入り 奉公人の休み日で、お盆の十六日と同じ行事である。(芦生田)

十七日

馬頭観音

馬持ちは何かして祝ったが、別にお参りはしなかった。(大前)

十九日

マユカキ おかざりをさげる日

この日は、おかざりをさげることになっている。これは、マユカキ(マユ玉を取る)を意味している。

十九日にまゆ玉をさげる。これはマユカキになぞらえたもの、サタノハナは秋の収穫になぞらえて二十日のお正月の最後の日にとった。

まゆだまなどは、あとで家のものがこじゆはんのときなどに食べた。(芦生田)

二十日

二十日正月 まゆ玉をこの朝もぐ、まゆかきという。このちまゆ玉は夏までとっておいてヨビル(小鼠)に食べた。(大笹)

えびす講 朝えびすとい、餅に金を入れてお供えした。えびす様にあげた食事は縁遠くなるから子供に食べさせるなどという。(大笹)

正月と十一月の二十日。春は働きに出かけるので御馳走のほかにカレンダー、また金もうけするようにあり金全部を財布に入れて供える。秋は金は供えない。

なおえびす様は、一人もんで通したので、縁遠くなるから供えたものは子どもに食べさせてはいけない。また他家の者に分けてやると福を持ってゆかれるから、食べさせない。(田代)

一月二十日は「朝エビス」といって、エビス様がかせぎに出るので、資本金として一升ます紙を敷いて全財産を入れて供えた。十一月二十日にはエビス様が帰ってくるので、夜、お金を餅に入れて供えて置くと、お金が餅一杯になっているという。白米を二飯を山盛りにして、頭付きのサンマを一、二匹供える。(千保)

エビス様を朝様に出すため、座敷に机を出して、エビス様を乗せて、お膳を供える。お膳にはご飯、頭付の魚を盛る。また、餅にお金を財布ごと入れて供える。ケンチョン汁は作らない。魚は中折れの紙をノシに畳んで乗せた。(大前)

この日には銭を使つてはいけない日で、準備するものは前日に買って

おく。この日は早朝にマイダマを下げるという。「二十日ゴースン」というので豆をいって神さまに上げてからマイダマをとり、オタナを下げた。まごまごしていると貧乏神が巣をくむ——入りこむから早く外してオタナ板を縁側に出してしまふ。貧乏神が入っても座りこむ板がないから入れないのだといわれた。二十日ゴースンの豆は、オイベスサンが一年中マメにはたらくように供える。

あずきめしで、ツボ・ヒラや酒をつけた正式のお膳で供えることもあり、オイベスサンの小使い銭というので(モトデ)一升ますに入れて金を供える家もある。(鎌原)

あさげ「お朔(正月朔)をおろして、早く庭にほうりだせ」といった。この日えびす講、えびす様が仕事におでかけになる日なので、朝げにお祝いをしてやるものだという。朝えびすという。

この日のごはんは、「エビスモリ」といって、大もりにして供えた。(芦生田)

エベス講は飯を山盛りにして膳を作り、銭をのせて進ぜる。進ぜる時もおろす時も別に何も言わない。

エベスにあげたものはカカア買うまで食っちゃあいけない、エベスは一人もんだから。(袋倉)

この日はえびす講といい、これでお正月は終りだといった。この日えびすさんの像を出して祝った。(芦生田)

エビス様が縁ぎに行き日。朝、ごちそうを一つの膳に二人分作る。エビス、大黒の兄弟の分。わらしを二足分進ぜる。有金全部を膳に乗せて進ぜる。小遣銭として持たせてやる。(今井)

観音参り 正月二十日にオメエダを下げて、馬を曳いて観音さんにお参りに行った。(鎌原)

この日は観音さんの御年始といつて、ウマヤの前になたてであるオシメをとって馬のしっぽにしぼりつけ、観音さんに参拜してから堂のまわり松の木などにしぼりつけてくる。好きな人はとばせたりした。(鎌原)

二十一日

馬頭観音のご縁日 朝、馬をひいて、富蔵の観音様へおまいりに行った。(ふつうは、十七日が観音様の日だが、このむらだだけは二十一日に観音様をまつている)(芦生田)

二十八日

しまい正月 言葉はのこっていない。鳴岩の不動様の日で「奉納大日大照不動明王」と書いた旗を奉納した。(大笹)

三十一日

ミソカマユダマ またオニメダマ、オニメーダマなどといい、一月三十一日、一本の串に二つずつ鯛玉をさして、門、窓、外から入ろうとする場所、神仏全部に供える。(大笹)

みそかまゆ玉をつくり、それをヤナギの枝にさして家の入口に飾る。悪魔が入らないようにという。(大笹)

三十一日に米・ソバ・ヒエなどの何かの粉で、茶碗ほどの大きさのミソカダングを作った。カワヤナギの枝に二個ずつさして、「鬼ノ目玉」

「鬼ノ目玉」というのを作った。これを家の入口やカド、すべての窓などにさして、悪魔除けとした。鬼が来た時に、そのダングを見て鬼の目より大きいので、おそれをなして帰ってしまうという。(干俣)

正月が終わった三十一日の夕方、ヒエやソバで大きいダングを作って、マユ木木の残した枝に二個ずつさす。重ねてさしたり、二またに並べてさしたりする。これを「ミソカダング」「鬼ノ目」ともい、家の入り口や外の窓にみんな飾る。鬼の目玉より大きいというので、鬼をおどかし、鬼が恐れをなして逃げるように飾るもので、今は米の粉で作って飾る家が多い。子供がミソカダングを下げて歩くが、橋を渡らずに十二軒

集めると、キジの卵が見つかるといわれる。ミツカダンゴはあとで焼いて食べる。(大前)

二 月

三 日

節分

豆まき いった豆を柵に入れてまく。福は内は二声、鬼は外は三声、全部で五回唱えた。この豆を自分の年だけ拾って食べると病気除けになるという。

残った豆は紙に包んで自在かぎに吊しておき、雷除け、風邪除けにした。

豆のいりかたは、声の長いはして、はじめ三つに分けていったものをまた一つにしている。(大笹)

豆をほうろくで煎って、柵に移してはまた煎って、三回に分けてよく煎る。その時にカヤを三角に折つたもので、かき回して煎る。豆を神様に供えてから、おろしてアキの方からまき始める。神の部屋、座敷、勝手などを順々に豆まきして「福は内、鬼は外」と唱える。家の外にはまかない。

また豆を子供が年の数だけ拾って、川へ流して厄流しとし、一年中かぜをひかないようにする。まき残りの豆を、一つかみに自分の年の数だけつかみ取れば運がいいといいて、運だめしにつかんで、その豆を食べる。

残った豆は紙に包んで保存し、初雷の時に食べる。

豆茶はしない。ヤカガシも聞かない。(千俣)

「福は内福は内、鬼は外鬼は外、福は内」と唱えながら、座敷・台所・蔵・便所などに豆をまく。この豆を自分の年だけ拾って食うとカゼを

ひかないという。

ヤカガシはしない。(大前)

節分の晩に豆投げをする。

ホウロクで豆を炊いたが、すこしも縁起のものとして、豆木をもやして豆を炊いた。豆を炊るときには、アキにむかって豆を炊れといわれた。なお、豆を炊るのに、カヤでつくった長い箸をつかった。

豆を投げるのは家のものだれでもよかった。唱えことは「鬼は外、福は内」、これをくりかえす。豆を投げる順序は、神棚(歳徳神)―上段の間―お勝手―茶の間―土蔵―便所―納屋の順(家によって若干ちがう)。(芦生田)

節分の豆 豆をいる時は、ヨシ(芦)を三角形に折って二本重ねておらで縛つたもので、かき回しながら煎り上げる。「ママデヨシ(丈夫である)」という意味だが、名称は不明。豆は一回いって柵にあげては、三回繰り返している。豆を半紙二枚に包んで、ヨシといっしょに縛って神棚に進げて置く。イロリのカギサンへ下げて置く家もある。この豆は初雷の時に食べる。(大前)

節分の豆はダイシサマの箸でいる。

節分をカギサンに結びつけておいて、初雷のときに食べる。(門貝)

節分の時の豆を、茶袋に入れて、鍵竹の上の方につけておいて、初雷の時に食べて食べる。(三原)

節分に投げる豆を炊る時は三度炊る真似をする。又、ヨシの箸を使う。

豆は初雷に食べる。(袋倉)

「ハツイ」にホウロクをかけ、ボヤを燃して豆をいる。十一月の太子講のときに使ったカヤの長い箸をとっておき、これでかきまわして豆をいる。この箸は三角に折って、お茶袋に入れた豆と一緒にカギサマに下げおき、雷が鳴ると食べる。(鎌原)

投げ終ったあと、ママは袋に入れて、いろりのかき竹につるしておいた。このとき、ママと一緒に、カヤを三角に折つたのを結びつけておいた。

なお、初雷のときに、このマメを食べると、雷除けになるといわれている。(芦生田)

豆まきは曆でアキの方をみて、その方からまいて右の方へまわりながらやる。「福は内、鬼は外」といながら部屋の間隅にまく。(三隅の家もある)年老りは、トリツカチ(早い者勝ち)だから「福は内」は先にガナルゾといひ、おそければ福がなくなるといった。(鎌原)

俄占い 一月十四日につくったタワラ(十二本)を節分の晩にこはんを炊くとき、薪と一緒にくべて、その燃えをあいで各月の豊凶を占った。これは主人が判断する。その結果は覚えておくか、メモしておいた。(芦生田)

八 日

コト コト始めは二月八日、コト納めは十二月八日。良いコトあるようにと、コトの餅をつくる。(門貝)

龍を立てる行事はない。(大前)

針供養 話ではいすが実さいには何もやらない。(鎌原)

針供養は、むかしより現在のほうがさかんである。コト八日のことは知らない。(芦生田)

初午(午の日)

稲荷祭り 屋敷稲荷へ塩、ゴマメ、米、酒をお供えし、お日侍は初午の前日にした。

この日子供達は小豆飯をたく家(屋敷稲荷)を回り歩いて食べた。(大笹)

初午は稲荷に供える。ワラチャワンを作りそれに赤飯などをのせて供える。(今井)

明治四十三年の山おしによつて、稲荷様が流されるまでは、むら中で、初午のときに稲荷様をまつた。山おし以後は、神さまがなくなつたので、祭典もやめになつた。(芦生田)

マユ玉 初午のマイダマは、正月十四日のオンボヤ(ドンドン焼き)の芯をとつておいて、モシキに混ぜてたく。(西窪)

初午にマユの形のオシラサンのマユダマをつくり、正月にさした桑の木に十六個さして大黒柱にしばりつける。このマユダマは米にきまつていて、三晩たつて四日目の朝、一升ますの中にもく。(鎌原)

ヤシウマ 初午には、小米の粉(麦・稗・粟なども使う)に大豆を入れて、ヤシウマを作つて食べる。小米の粉を熱湯でこねて、大豆をふかして入れてからみ、カキ餅のように細長くして、箸を三方に押し付けてくぼませ、花形にして、マッチ箱くらいの厚さに切つて置く。イゴマ(イダサの実)や麻の実やノリなどを入れるとうまい。茶受けやおやつにして食べる。(大前)

火早い 二月の初午の日は早い年は、「火早いから火に気を付けろ」といわれた。この日に馬を出して、往還を運動させた。マユ玉は作らない。

(干俣)

獅子舞 初午はヒノエ午、キノエ午は嫌つて、この時は二の午にする。獅子舞が出る。あばれ獅子で悪魔払いを目的とする。

昭和40年頃の獅子頭を高崎から買ったがその前は村で作つた。糞を二つ合わせたようなもので作つた。毎年少色を塗り直した。中に二人入る。オオガシラと言う。

座敷・台所で舞つた。頭を振つて、はねて、人をかじる真似をする。獅子の次に蚤神が家に入る。青年が女装をして、お白粉を塗つて入る。

次に馬頭様が入る。馬の面をかぶる。最初に山崎長雄家(屋号、ヨコミチ)に行つてから、各戸をまわり、最後に稲荷神社で舞い納めて、頭等の道具を神社に保管してきた。今は公民館に保管している。

延や太鼓がつき、各戸に行くとき口上ぶれが「東西、東西、またまたオオガシラが参りました、隅から隅まで悪魔をおつばらいます、酒代をドサリもらいます。」と言つてから始める。



春祈禱のお札（西窪）（撮影青木則子）

これを始めたのは今から七十年位前からである。（袋食）
春祈禱 お正月から二月、三月末にかけて春祈禱をして、家内安全を目的として、神主をたのんで、家ごと、あるいは何軒かが組んで祈禱をしてもらった。神主といっても素人神主（行者、法印とよばれている）。おとくいのような家がある、その家と法印が相談をして、日をきめた。正規のやり方でやれば護

摩という、これは戦前の行事。（芦生田）

天神講（二十五日、日曜） 学校っ子が宿に集まり、米三合持ち寄って、五日飯を現に作ってもらって食べた。トウワを煎って混ぜたトウワ飯にもした。十杯以上もよく食べた。各自が習字の用意をして「奉納天満宮」「天満天神宮」などと書いて、天神様へ奉納した。近ごろは、日曜日にしている。（大前）

三 月

三 日

オヒナ祭り 女の子の祭りで、各自が仲間の宿にヒナ様を持ち寄って、ヒナ段に飾り付けて祝う。米や銭も持ち寄り、一日中遊んだり食べたりする楽しい行事で、今も続いている。昔のヒナ祭りの頃は、外は今の三倍も雪が積もっていた。

家ごとにヒナ飾りをして、菱餅を進めるが、昔は坐りヒナで、数も少なくて古いヒナを出して飾っていた。ヒナの贈答もあまりしなかったが、最近はやや豪華になった（大前）

ひな祭りは四月にする。ひしもちをつくり、豆をいってひなさまに上げる。

初子には男の子のときは天神さん、女の子には座りびなを買い（ウチで買う）一緒にかざる。五月にはかざるない。初節供のひなさまは昔はよそで買ってくれたかったが、最近はお孫におばあさんが買う。（鎌原）
お正月を二月にしていた頃は、四月にお節供をしていた。現在は新暦の三月三日。

おひな様のかざりつけは三月に入ればすぐにした。都合のいい日を選んでかたずけた。

ごちそうはすし、もち。もちはひしもちをつくらせておひなさまにお供えする。

古くなったおひなさまは、一月のドウロクジンのときにもっていった。

初節供のときには、おひなさまを親戚などからももらった。嫁の実家へはゼンノモチを二枚もっていった。これに対するおかえしはめいめい、品物をえらんだ。

この辺には、ひな市はなかった。（芦生田）

三月、五月の節供にはボタモチ（餅）をつくる。（西窪）

オヒナメシ 桃の節供には、女の子が回り番の宿に米や野菜を持ち寄って、料理を作ってヒナ様に供えたり食べたりする。年令は自由だが、年配の同じくらの子や、近所の子が寄り合ってグループを作って集まる。娘たちも集まり、今でも盛んにやっている。（千僕）

古いひなさま 古くなったひなさまは神社に納めた。天神さんには天神さんのひなさま、女のひなさまは弁天さんに納めた。（鎌原）

奉公人の出替り 三月三日で、この日は奉公人は一日休ませ、仕着せ

もやった。給金もこの日にきめなおしをした。(大笹)

彼岸

墓参り 寺参り、墓参りをした。寺参りはお水鏡とウドン二把程度、墓参りは水、ダンゴ、花、酒などを持ってお参りした。

この日女衆の老人が集まって和讃なども説いた。(大笹)

入り口は別にしない。

お中日と明け口にはお墓参りに行く。ジャガイモでんぶらやだんごを作って供える。中日から明け口まで、村の年寄り衆(女性)が観音堂に寄って念仏をする。その年に子馬の生まれた家は、お神酒一升上げたり、赤飯や餅などを持って行く。念仏の人が分けて貰う。(大前)

彼岸には墓参りをした。だんごをこしらえてもっていった。

彼岸には、おはぎをこしらえて、親戚とか懸念な家にくばったり、また先方からもらったりした。

身内ものとか、懸念なもののはじめての彼岸(新彼岸)のときには、万障くりあわせても墓参りに行った(たとえみづの彼岸のときに墓参りに行かなくとも)。彼岸のとき、以前は、人口から中日までの三晩、三夜と称して観音堂でおこもりをした。女の人(老人)が主で、この三日間は昼夜念仏を唱えていた。現在は彼岸中(七日間) 観音様で念仏を唱えている。(声生田)

回り念仏 彼岸は一週間念仏をする。干俣が上下に分かれているが、上のほうから、順に各家を回り番の宿にして、七日間に七、十軒も回る。老人クラブに一三二人いるうち、年寄りの女衆が宿に集まって、お昼を食べてから、午後四時ごろまで念仏を唱えたり、おしゃべりや歌を歌ったりしている。年寄りをいたわり、ご馳走することもある。戦時中は止めるところまでいった。夏を除いて毎月十六日にも回り番で念仏をにぎやかにしている。(干俣)

彼岸のおコモリ 春彼岸のイリクチに、村中のおじいさん、おばあさんが集まって観音堂で、世話人と一緒にダンゴをつくる。丸いのと宝珠

の玉の形のものとし、これをカヤノミゴをとって俵をつくらせてさしたのを観音さんに上げる。米は各家から集めて粉にした。年老はその日から一週間、家には帰らず、観音堂におこもりをし、女衆は和讃やお念仏をあげ、男衆は「トウネ一升」や運送ひきの上げた酒などをあがって楽しむ。

春彼岸の観音さんのおこもりは村中の大祭りで、男衆はおこもりで泊り、女衆は昼間お堂に行き、念仏を申し、和讃を唱えてごちそうになる。夜は家へ帰る人が多いが泊る人もいる。

おこもりの間は、村中のどの家からも思い、思いのごちそうを、どこからも上げるので一週間好きなものが食べられる。他所へ行っている人が帰って来て上げたりトウネ一升とか有志が金子で上げる人もいるので酒などは飲みきれない。堂の中でいるうちに大きく火をたくのであたたかだ、ねんねこぐらいいがまんできるので泊っても心配なく、飲める人には楽しみなおこもりだった。(鎌原)

観音堂に春秋の彼岸一週間、入り口からはしり口までおコモリする。中日にお念仏を唱える。数珠にさわれば、丈夫でいられる。おコモリしている間、村のものが、御馳走を持って来てくれる。(声生田)

念仏の鉢 石津の観音堂にある。女衆が寄ってお念仏をする時に使った。百万遍の数珠、念仏のキンもある。キンは鐘であり今は落ちて地の色で真黒になっているが、昔は金箔で光っていたのでキンと言ふ。

鉦の銘文「上州 語(吾) 妻郡石津村中 天保二年二月吉日」
キンの銘文「奉納 干俣門員両村仲馬中」(仲馬についての伝承はなかった。(今井))

社日

地神待 彼岸の社日に希望者がお日待ちをやった。地神様は百姓の神様で、この日は五穀と初ものをあげる。現在はやっていない。(門員)

社日の日は、春、秋の彼岸の中日の前か後、地神さんが早くあがると陽気がいいという。おそくあがると、陽気があるという。地神さんが

おそくまでいると、地神さんがいろいろと案じて（心配して）早く帰れないのだからという。地神さんはたねまきの神、百姓の神である。（地神さんは、地神さんというたねをまくのだという。）（芦生田）

四月 月

春祭 鎌原諏訪神社は八十八夜にする。（鎌原）

大前諏訪神社は四月四日。（大前）

芦生田諏訪神社は四月一日。（芦生田）

千俣諏訪神社は四月五日。（千俣）

熊野神社は四月九日。（門貝）

八月 日

お釈迦様 子供がお寺で甘茶をもらいにいった位である。（大世）

観音様でヤシャウマを作って、参詣人にくれた。米の粉に黒い豆を入れて三弁の花形に作った。（千俣）

四月八日は釈迦の誕生日、子供がお寺へ甘茶をかけに行く。（芦生田）

甘酒祭り 諏訪様の祭りの時、昔は甘酒を参拝者全員に出した。この甘酒は二・三人の女の人がこうじ作りから始めて仕上げるまで一貫して行なう。材料は村中から集める。この甘酒がその当時の唯一の楽しみで、出来具合が一番の話題になった。老若男女多数がお参りに来てにぎやかだった。（今井）

五月 月

一日

山開き 牧場の山開きで、放牧するために、馬や牛を牧場へ引いて行っ

て放した。（大前）

春祭り 五月一日、鎌原神社と諏訪神社の春祭りはもともと八十八夜のわけだが都合で一日にきめた。織の先にモミの木の葉をつける。神社のお札は春だけに出す。親せきなどがお客に来るのでにぎやかで、獅子舞は三十日にやる。五月一日には青年団が演芸会をやったもので、今年（四十七年）も公民館の新しい広間でやった。（鎌原）

二日

諏訪神社春祭り 八十八夜が鎮守の諏訪神社の祭りで、神主の都合で一日がヨイ祭り、二日がお祭りをする。（大前）

八十八夜 むかしはこの日はおまつりのようなもので、ぼたもちをつくって、神棚にお供えた。「八十八夜のわかれ雷」といって、これからは、霜は降らないとしていた。（芦生田）

九十九夜 ここでは、とくに行事はない。（芦生田）

五日

五月節供 ショウブとヨモギを軒にさして厄除けとした。夜は菖蒲湯をたてる。この日子供に菖蒲をつけて、こいて腹をむぐし、腹の虫除け、虫きりになるともいった。

初節供の家はノボリなどを贈った。もらった家では赤飯など配ったが、

一般には常の食であった。（大世）

男の節供はあまりしない。（千俣）

昔は六月五日に一月遅れの節供をした。そのころでないとショウブが伸びなかった。「ショウブの屋根ふき」といって、家の表と裏の屋根下にショウブとヨモギをさして飾った。七五三にさせといひ、五、六箇所にさした。昔、鬼に追われた人が、ショウブとヨモギの間にかくれたといふので、悪魔除けの意味である。（大前）

ショウブとヨモギを軒下にさすことについては、つぎのようない伝

えがある。

欲ったかりの主人公が、ごはんを食べる嫁さんをもらえば、金ができない(金がたまらないこと)から、口のない嫁をほしいといって物色していたら、たまたま、口のない女が尋ねてきた。是非嫁さんになりたい。そこへまっつてましたで、その男はその女と結婚した。ところが、その嫁さんのことだが、その嫁は、口がないのではなくて、口は頭の髪を結んだ中にある、旦那が山へ行った留守に自分でこちそうをこしらえて、頭(髪)をといて、でかい口をあけて、三升ふかしの赤飯を一度に食べていた。それをたまたま、旦那が山で家の方をながめていたら、家からさかんに煙が出る。これは不思議だと思って、旦那はそつと山から帰ってきた。そうして、裏から家の中をのぞき見た。そうしたら嫁さんが、おこわ(赤飯)をふかして、頭のでかい口の中に入れて食べていた。それで旦那は驚いて、知らないうちに逃げるつもりでいたところ、一方は神通力でそれを知ってしまった。旦那は逃げたが、嫁は旦那を生かしておいてはならないというので追いかけた。旦那は追いかけて、かくれ場がなかったので、ショウブとヨモギの草が沢山はえていたところへとびこんだ。旦那はそのかげにかくれていたのでお化け(嫁)は旦那を見失ってしまった。旦那はそのためにあやうく助かったという。当日はたまたま五月五日であった。ショウブとヨモギのために一命を助かることができた。それ以来、魔除けとして、五月のお節供にはショウブとヨモギをかざるのだという。おかみさんは鬼であったのだという。このはなしはおばあさんから聞いたものである。(養生田)

ショウブとヨモギを軒にさす。農作を折り、魔除けにする。(鎌原)

ショウブ湯 ふろをたててショウブを束ねて入れると、身体にウジがわかないという。ふろに入って、ショウブの葉を腹に結びつけてピーピーとしごとく、腹の虫が切れて退治できるという。(大前)

ショウブ湯は旧六月にする。腹の虫がわかないようにする。(鎌原)

ショウブ酒 ショウブの葉を刻んで酒に入れ、ショウブ酒を作り、その

香りを飲む。(大前)

鯉のぼり 昔は紙の鯉のぼりを自分で作って立てたり、買って立てたりした。のぼり旗はふつうの家にはなかった。武者絵のぼりは特別の家で飾った。座敷のぼりもなかった。(大前)

子どものある家は、のぼり、ふきながしをたてて祝う。軒下にショウブとヨモギをさす。夜はショウブ湯をたてて入った。こちそうは赤飯をする家が多い。

初節供の場合には近い親戚のものが、のぼりとか、こいのぼりをおくってくれた。吹きながしは嫁の里からおくられるが、これには、紋所をいれるならわしである。むかしはこいのぼりが五月の節供の最高のおくりものであった。(養生田)

柏餅 ウルチ米でシンコ餅をこねて作り、あんこを入れて柏の葉に包んでふかすと、柏の葉のいい香りがうつる。(大前)

旗竿じまい 五月の節供の旗竿は、五日から三日目ぐらいにはたいていします。(養生田)

花祭り 花祭りは五月八日、女衆だけお寺へ行く。甘茶とキビでつくったハナクソダンゴをくれる。いまは米でつくったダンゴになった。(鎌原)

六 月

マンガ洗イ 田植えが終ると一・二束の苗を持って来て神だんな——地神さんへ上げる。おかげでよくなったというのでお礼のためと、またとれるようにという祈願のためである。(鎌原)

各自の家で、田植えの終えた晩に祝う。サナブリとはいわない。(大前)

一五—二十日

農休み 農休みは十八日で、この日は区長から指令もだされた。この

日などに働くと「ものぐさ者の節供働き」などといつてきられた。

(大笹)

村中の田植えが終ると、区長がフレを出して、二日間仕事を休む。もとは六月二十七、八日だったが、最近は十五日から二十日までの間に休む。(大前)

農休みは六月のうち、村中の田植えが終ったときにすることにきまっていた。おこわをふかしたりまんじゅうをつくった。(鎌原)

田植が終ってから、三原全体一斉に農休みをした。日取りは、三原の田植が全部終るまでまっている。そのためにあまり手間をとる家は、農休みのさまたげになるといわれたものである。(三原)

六月には特別の行事はない。

田植が終ったあと、一日おいて、区長のフレによって農休みといつて、むら中で仕事を休んだ。この日どりは、田植の終りぐあいできめた。以前は、六月二十四日、五日の二日間か農休みとまきまっていた。そのころは、田植が、六月二十日ごろからはじまった。現在では、農休みは六月十一、二日ごろである。(芦生田)

鎌の里がえり、むかし、田植が終ると、嫁を里がえりさせた家もあった。よそむらから来た嫁は、里がえりのときは、ふつうは泊ってきた。

(芦生田)

夏 至 特になし。(大笹)

七 月

二 日

半 夏

ハゲン正月 半夏に天氣がよくないと穀物がとれない。土用から天氣がよくなったのではこの附近では作物はよくない。(大笹)

ハゲン正月は七月二日。ナベッコスリモチをつく。ネギ畑に入らない。ハンゲさんが、片足を田圃、片足を畑で立ち往生して死んだから。ここではこの頃までに田植は終了している。(今井)

ハゲン様 半夏の日には、ネギばたけにはいるなという。これには、つぎのようなはなしがある。

ハゲンさんはうんと働いた人という。ハゲンさんは、ネギばたけへ入って、ネギを食って、ネギばたけで死んだという。

むかしは五日照つて一日雨降りというようにきまっていた、雨降りは休みとされていた。ところがハゲンさんは働きもので、蓑と笠をつくって、雨降りの日も休まず仕事をした。そのために、天の神さまはおこって、雨をいつでも降らせるようになったという。

べつのはなしもある。

ハゲンさんは働きもので、ネギばたけにいて、もうすこしではたけの仕事が終るといふときに、お天道さまが沈みかけた。ハゲンさんは、どうしても仕事を終わらせようとして、お天道さまにもうすこしいてほしいとかいった。すると、お天道さまはひきかえてきて、そんなに働いていて、またその上仕事をすると働きすぎるとおこって、ハゲンさんを働きころしてしまつたという。

もうひとつのはなし。

ハゲンさんは働きてで、十二丁の鎌をつかきってしまったという。そうしてネギばたけで死んだ。半夏の日は七月二日で、この日には、ネギばたけに入つてはいけないという。(芦生田)

七 日

七夕 七月七日は七夕さん。七夕飾りは川へ流す。(西窪)

鎌原では七夕はあまりやらなかつた。学校の子どものためのものだった。

(鎌原) 七夕の日に、朝早く起きて、百色の草の露にあえば病氣にならない。

(門具)

青物の手入れで忙しい時期で、昔からやっていたいなかった。今でもほとんど飾らないが、子供が学校でつくる程度である。(千俣)

オネンブリ流シ 七夕には女衆が川で頭を洗う。どんなアカでもこの日に洗えば落ちるといふ。

オネンブリ流シと言つて、朝早く川で体を洗うと、一年中ねむたくなくなると言ふ。(今井)

土用の丑の日 丑湯をたてて、この日は肉を食ふ。(大笹)

土用のうしろの日にウナギを食う程度で、特別の行事はない。病人は土用になると弱るといふ、土用すぎれば、体は丈夫になるといふ(病人は、土用うちもては丈夫になるといわれている)。(芦生田)

祇園 祇園は夏祭りの中心で、七月二十六日の行事である。この日昼間神社へむらの人たちがあつまつて会食をしておまつりをした。この日はこしをむらのわかいしゅうがかつた。この日は、作物の豊作をねがうおまつりである。天王様は大日様のわきにまつられているが、この日

には、中井屋旅館の近くに飯宮をたてて、そこから出発してむらの中をまわりながら、その通路にあるはたけを荒した。はたけを荒す場合は二通りあつて、ひとつはお祝いの意味をこめて、もうひとつは、日頃のうづ

ぶんをはらすためであつた。天王さまのみこしはたけを荒される場合はその年は豊作だといつて喜ばれた。うらまはたけを荒される場合はべつに深いわけがあつたことではない。たとえば、その家に娘があつて、その家へあそびに行つたときなどにその家族のものに邪険にされたといふような場合であつた。また、祇園の日に働いているような場合

に、そこへ山車がかつきこまれて、ツバはたけなど荒されたといふ。

この日、キュウリのはつものを天王様にあげるものとされているが、それまでにキュウリをあげられるものは、むらでも二、三人しかない。

だから、この日天王様にキュウリをあげられるものは、むらの人たちに

自慢できた、そのために、なるべく早くキュウリをまいた。(三原)

アオバシの食いぞめ 七月二十七日に新しいカヤで箸をつくり、諏訪様に供えてから使い始める。その日より前は新しい箸をつかつてはいけない。(門具)

八月

一日

オカマノクチ ウシノトのマンジュウを作り、塩あんで、砂糖を入れずに、丸めてふかした。(大前)

オカマノクチは旧七月八日のことで、浅間焼けの日にのたる。まんじゅうをつくつて仏さまに上げる。(鎌原)

オカマの口は八月一日。地獄のかまのふたが明く。小麦の粉でマンジュウを作つて、一日中マンジュウを食ふ。(今井)

八月は養蚕の仕事が忙しいので、とくべつの行事はない。

七夕も、むかしからあまりやらなかつた。(芦生田)

オカマの口は九月一日、「オカマの口をあけないと仏様が来ない」と言つて一日まんじゅうをつくつて、口をあける。

白菜のオロスキを油でいためて塩味をつけてあんこにした菜まんじゅうが多い。(門具)

別に何もしない。まんじゅうも作らない。(千俣)

九月は盆月である。九月一日は「カマノロアケ」といふ、まんじゅうを作つて食ふ。また、この日は草場刈りに行く人もあつた。(芦生田)

陽気祭り(十七日) 以前は九月一日だったが、今は八月十七日に陽気祭りをする。ノボリを立て、赤飯をたいて、陽気がいいように祝ふ。その年の景気や豊作をお祝いする。



紙園の花がさ 大笹神社
(撮影都九十九一)

俣

九 月

一 日

個々の家では時に行事はない。この日から秋祭りの○(丸一)の神楽獅子の練習がはじまる。(大笹)

旧八月一日

八朔といふことは、ことばには聞いていたが、とくに行事はない。家によってはほたもちぐらいはつくったようだ。(養生田)

ナベツカリ 嫁は米を持って里帰りをした。嫁は酒を持って帰る。(門貝)

二百十日(一日) 荒れる日で、神社にお参りした。(千俣)
ススキの穂を神棚に連れて、ススキ(カヤと同じ)の葉を箸にして、

朝ヶ(朝食)を食う。(大前)

二百十日の祭りには、午後三時頃チョウヤに集ってお祭りし、酒を飲む。(西窪)

この日は厄日として、嵐が来ないようにお祝いをした。神社へむら中の人たちが寄っておまつりをした。神主はたのまなかった。酒を飲んで好きなことを言っておまつりをあつくする行事であったが、のみすぎてけんかをするものもあった。大正の末ころまではおこなっていた。(養生田)

墓そうじ(七日) この辺は個人墓地なので、めいめい適当な日に墓掃除をする。(千俣)

七日に墓地で自分の持ち分の草を刈って、盆の用意をする。この日は七夕ではないが、墓地の草刈りをする日になっている。(大前)

墓そうじは七日にしなければならぬとされている。(西窪)

墓の掃除は七日、九月盆、七日以後は、仏さまの足を切るといってさける。(門貝)

九月七日はマンジュウを作って、子供は年の数だけ食う。水あびをした。(西窪)

二百二十日(十日)

カヤノハシ 二百二十日は九月十日ときめている。蚤の上履の関係からこの日にお祭りをする。この日にカヤのハシを使って神さまに上げると、それ以後は山へ行ってカヤのハシで食事をしてもよいことになっている。織にはススキを十本くらいさす。(鎌原)

十五夜(旧八月十五夜) ダンゴに枝豆、大根、栗、すずきなどをかざる。もとは、十五夜の夜は畑につくってあるものを盗んで食べてもよいといわれ、野外窃盗公認の日。このため他人のものを盗んでくること「十五夜をしてきた」という。(大笹)

お月様にススキや大根や枝豆を運ぶ。縁側へ出さないで、月のさしている方の屋根の上へ投げて供えた。

「十五夜には糞りあるとも、十三夜には糞りなし」といった。十五夜に晴れると大妻がよくでき、十三夜に晴れると小妻がよくできるといふ。

十三夜は別に祭らなく。(干俣)

豆・大根を抜いて来て、屋根へスッポ投げて月に供える。(大前)

十五夜に他人の作ったものを取ると、病気にならない、厄除けになる。

(三原)

ハジキ豆(枝豆)と大根を必ずずとつけて上げて。庭先の植木の上や縁側にごちそうと一緒に上げる。この日はカボチャでも何でも盗んでもオンカだった。(鎌原)

月見の行事 ぼたもちをつくってうつわにもって、外へ供えた。ほかに、枝豆、サツマイモ、大根などを供えた。それを子どもがさげに来た。お供えしてあるのをさげるのが子どもたちの楽しみであった。供えものは子どもにさげてもらったほうがいいといった。(青生田)

秋祭 九月十六日の送り盆の日が宵祭で、十七日が本祭、十七日には神主が幣束をもって村中をまわる。十八日は陽気まつりともいい、諏訪神社に御神酒をあげて祝う。(大笹)

十一日は諏訪神社の秋の例祭。(青生田)
オクンチ 九月九日、十九日、二十九日をいう。とくに何ということはない。(大笹)

オクンチは、旧九月九日、もちをついた。この日はお節供のひとつである。厄日と称した。(青生田)

お盆(十三—十六日)

盆月 以前は九月に一月遅れでしていたが、昭和二十一年に新正月に変わった時に、八月に変わった。(干俣)

盆は九月十三日から九月十六日まで。(門貝)

盆中の草刈り 九月十三日から盆となるが、この日までに墓場刈りを忘れた場合には、十三日に墓場刈りをしてはいけないといった。この日に墓場刈りをすれば、仏様の足を切るからだという。この日にほかのと

ころの草刈りをしてはかまわぬ。(青生田)

盆は九月十三日から十六日まで、盆棚といって特別に作らないので、盆ゴザも使わぬ。仏壇に盆花をあげ、なすやうりにトウモロコシの毛をつけた馬を供え、に餅を作つてあげる。盆うちは朝晩ご馳走をあげる。以前はほうの木で四本をたてて盆棚を作る家もあった。大笹ではモミジを使うという。キキョウ、カルカヤ、オミナエシを盆花といつて、一キロくらい離れている原(現在はコーチ)まで取りに行った。(西窪)

盆棚 昔から盆棚はあまり作らなかつた。作る場合はモミジの枝を四本立てて段を置き、盆ゴザを敷いた。ヨシ二本ずつを四隅に立てて、花を飾つた。ふつうは、仏壇の前にモミジの長い枝を二本立てて、ヨシ二本ずつ両方に付け、花を供え付ける。(干俣)

ヤグラの上に雨戸を台にして乗せて盆ゴザを敷く。ヨシ(昔)を二本ずつ四隅に立てる。ぼた餅・うどんやナス・キユウリ・トウモロコシなどの野菜・果物を供える。最近では盆棚を作らない方が多くなつた。(大前)

盆は九月十三日から十六日まで、盆棚は新盆の家以外は別につくらぬ。樺の木と葦を仏壇の前に飾る。もとは秋の七草を山から取つてきて前に飾つた。

新盆の棚も簡単なもので、粗末のことを「盆棚のようだ」といふ。(大笹)

仏壇の前に二本のハンの木を立て、それにヨシを結びつけてボンダナを作る。お膳をその前に置き、テンブラ・水・ローソク・線香・お菓子・果物を供える。(田代)

盆棚は十三日に仏壇の前に竹で作る。盆ゴザを敷き、キキョウ、カルカヤ、オミナエシなどの盆花と、カシワツバにカボチャ・飯をのせ、汁を供えるが箸はつけぬ。

「魚を食べないと、仏様が口をすう」と言つて盆に魚を必ず食へる。が、供えない。

ナス、キユウリは供えるが、ウマはつくらない。

ミソハギで水をあげる。

盆タケはどこのを取っても良い。

盆棚は茶の間につくる。馬はつくらない。鬼のカチンナワはさげる。

無縁仏は宿なし仏といひ、未婚者で仏になつた者をいう。

ある家で盆棚を作らなかつたら、その夜仏壇がたがたゆれ出したので、盆棚を作つたところ音が止んだといふ。(門具)

盆だは十三日の夕方、ホウの枝をとつて来て四方の柱にして台をおき、ゴザを敷いて段をつくり、仏さんを仏だんから出して座敷にかざり、おかざりする。(鎌原)

十三日の昼間盆棚をつくつた。山から青木(ホウの木、竹、モミジ、

ハギなどいろいろの木)を四本切つてきて棚の柱とする。棚は別にある。

盆ごは買つてきて、棚の上にしき、その上に位牌を行くところの、先祖さま

をまつた。下座にはガキの座敷を設ける。ガキとは行くところのない

仏様のことで、こういう仏様をご先祖様があらわれてつれてきたものと

いう。ご先祖様の位牌と同じ列の末席にならる。ごちそうはご先祖様

とはべつにしんげる。提灯は棚の前に二つする。棚へは、キユウリと

ナスで馬をつくつて供える。(芦生田)

盆棚に位牌を全部出す。仏壇は空のままにしておく。ダンゴ、キユウ

リやナスで作つた馬、菓物、花等を供える。ヨシで4隅に柱を作り、ヨ

シの繩を張る。幣束等はつけない。

送り盆の16日に朝食を進めてから、盆棚はとる。午後9時頃までには

とつてしまふ。遅れると盆様が泣くと言ふ。盆棚の供え物は幕に持つて

行く。(今井)

盆花 ミソハギを必らず上げる。オミナエシ、キキョウを盆花という

が、キキョウなどは最近では開免されてしまつて二番ボキでもなくなつた。

(鎌原)

盆花は十三日までにとつてくる。キキョウ、アワバナ、ワレモコなど

の花を山からとつてくる。(門具)

盆迎え 迎え火として、わらを川端でたいて、その火をろうそくに移

してきて、仏壇に供える。盆提灯に火を移してくる家もある。盆様を家

に連れこむため、ふつう子供にやらせる。唱え言やしぐさは、別にし

ない。ふつうの盆迎えには寺へ行かないが、新盆には必ず寺へ迎えに行

く。寺へは十五日にお施願曳に行つてある。(千俣)

迎え盆は、妻わらを三束位、門口としてたく、この煙で仏がくるとい

ふ。寺と墓参りは、新盆の家以外は十三日とは限らない。十三日から十

六日までの間ならいつでもよいとされ、彼岸のときの程度のお参りかた

である。(大世)

十三日が迎え盆で、妻わらを家のカドでたいて、盆様を迎える。墓地

へは行かない。この時に唱えることは。

「盆サン盆サン コノ明カリニ来テクレ」(大前)

十三日はむかえ盆、夕食前にワラや妻ワラでむかえ火をたき、子供た

ちは火をたきながら「ボンサンボンサン コノアカリデ オイデオイデ」

と唱える。夕食はうどん。(西窪)

迎え火は十三日の夕方、家の入口で妻わらをもす。墓までは迎えに行

かない。

子供が「ボンサン、ボンサン コノアカリデオイデ」と言つて迎える。

十三日に妻わらで盆さまの迎え火をたき、「仏サン仏サン コノアカリ

デオイデ」と唱える。(門具)

迎え盆には、昔は夕方川端(用水端)でヒデを燃して「ボンサンボン

サン コノアカリデオイデ オイデ」と子どもがよんだ。最近ではヒデで

なく妻わらを燃す。(鎌原)

ほんさまは夕方むかえる。ムギわらの門火をたくが、仏様をむかえる

と、子どもたちが「ボンサン、ボンサン、コノアカリデオイデオイデ」

と子どもがうたう。(芦生田)

盆迎えはワラ束を燃して迎え火を門口でたく。たきながら「盆サン盆

サン、コノアカリデ来トクレ」と唱える。

迎え火からローソクに火をとって、先祖様を迎えてくる。お寺、墓には盆迎えに行かない。(今井)

盆参り 本家の盆様へお参りに行く。(千俣)

新宅は本家の盆様へ、線香上げに行く。(大前)

新盆 新盆の場合にはお寺まで行って、お施餓鬼をした。新しい仏さまも、同じ盆棚にかざる。新盆見舞には、身内のものが来る。悪意な人はお見舞に来てくれるが、近所の人はず来ない。もつてくるものは、果物など。(菅生田)

アラボンには、どんなことがあってもおがみに行くが、持ってゆくものは決まっていない。(門見)

新盆には親せきから線香上げに来る。昔は粉とかうどんをお櫃に入れてもつて来た。最近はおの好きだったものとかいろいろの物を持って来る。盆ちょうちんをくれるところもある。

十五日にお寺参りに行く。「おせがき」に行くといひ、ローソク料、回向料として金をもつてゆく。(鎌原)

セガキ 新盆の人がおがんでらう。市がたつので子供達でにぎわう。

(西窪) 施餓鬼 新盆の家では、十五日に長野原町小宿の常林寺(大笹を除く)

大部分が檀家の寺)へお参りに行く。(大前)

十五日の朝はセガキ、お布施は十三日前に伍長が集めて、区長がお寺へ持って行く。露店も出て、もとはにぎわった。(西窪)

施餓鬼は十五日に常林寺でやる。和尚さんが沢山よって、大般若経などのお経をあげてくれる。村中の人がお参りに行き、賽銭などをあげる。

別に何も買つて来ないし、賽銭以外に用意もしない。(今井)

無縁仏 棚の下の、ゴザのかげにまつる。子供で死んだ仏、宿のない仏を無縁仏と言っている。特にそなえものはしない。(門見)

害仏 無縁仏のようなものだが、行く所のない仏を、家の仏が連れてくるといふ。お盆の時には、盆棚の下にまつる。進めるものは盆棚の

のと同じにする。(今井)

送り盆 仏壇の前にお供えしたものの一部を持参して野送りをする。野送りは村に上・中・下と道陸神のドンドン焼きと同じで場所がきまつていて、そこで火をたたく。

盆中の食事は、ナベ餅(ボタ餅)とてんぷら程度である。

新盆参りはウドン二把と線香をもつて行く。(大笹)

果物やだんごなどを作って、盆様の弁当として紙に包んで、お墓参りに行き、めいめいの墓にお供え物をして、盆様を送り出す。

お墓参りの後、夕方、仏壇からともし火をつけて出して、川端でわらをたいて送り火とする。わらはないてから川へ流してやる。(千俣)

送り盆は十六日の朝飯を供えてから、座敷の盆棚に飾つてあった物をまとめて、送り出す。川原へ行く道はたや、墓地の入り口に、供え物のナス・キュウリ・トウモロコシや菓子・せんべい(だんごのかわり)などを出して置く。盆花は墓地に供える。

夕方、送り火を家のカドでたたく。この時、「盆サン盆サン コノ明カリ ニエツクレ」と唱える。(大前)

十六日は送り盆で夕食を早めにとつて送り出す。夕食はウドン。仏さんの弁当だといひ、天ぷらとタンゴを作って、線香、花を持って行く。

送り火をたたく、「ボンサンボンサン この火のあかりで おかえりおかえり」と唱える。(西窪)

送り盆は十六日、ボン竹、盆花を墓へもつて行く。供えたものをカチナワ(そうめん)でしばり、線香、三角の団子、オサゴを持って墓まで送る。

三角団子をつくるのは、ヤドナシ仏に団子をくれくれと言われたとき、指の間にはさんでかくせるように三角にする。丸いとかくせない。丸い団子は葬式の時だけ作る。

十六日の朝めし前に、盆さまを送り出す。送り火は、晩方もし、「仏さん仏さん、このあかりでいっとくれ」と唱える。

十六日の朝めし前に、盆さまを送り出す。送り火は、晩方もし、「仏さん仏さん、このあかりでいっとくれ」と唱える。

「ボンサン ボンサン このあかりで行つとくれ」と言つて墓まで送る。

送り火を燃さないと言ふのがみえる。(門貝)

送り盆は川端で妻わらの舟のようなものをつくり、その中に妻わらをとめて、火をつけて燃しながら川に流す。長く燃えているほうがよいといふ。唱えごとはない。(鎌原)

九月十六日がおくり盆 この日の午前中、かざつたものをまとめて(キヌウリ・ナスの馬も一緒に)、墓へもつていった。おそい家でもお昼ごろには盆おくりをする。夕方にムギわらをつかつて門火をたく。このときには唱えごととくにない。(芦生田)

キヌウリやナスで馬を作つて盆棚に供える。16日の朝盆棚をくずし、この馬は墓に持つて行つて供えておく。この馬に乗つて、先祖様は帰つて行く。

盆送りは迎え火と同じように、門口でわら束を燃して送り火をたきながら「盆さん盆さん、このアカリで行つとくれ」と唱える。(今井)

盆の食事 ぼた餅やてんぶら(精進揚げ)を作る。(千保)

十四日の朝に、仏さんが喜ぶといつてムギ粉の大きいマンジュウをつくる。夕飯はうどんかそばにする。

十五日の朝はボタモチ(に餅)か赤飯をつくる。夕飯にはうどんかそば。

「盆ノボタモチ 甘イカ スイカ」(西窪)

十四日、うどん、天プラ、十五日、十六日、ボタ餅か赤飯。

「盆のボタモチ 甘いかすいか」「盆のボタモチ 彼岸の天プラ」と言われるように、盆にボタモチを作つたが、この頃は赤飯のほうが多い。

(門貝)

盆中のごちそうはぼたもち、うどん、すしなど。「盆のぼたもち」とか、子どもの目かくしの歌に「盆のぼたもちあまいかすいか」というのがあつたように、盆にはぼたもちがつきものだった。(芦生田)

ガキノ首 盆の十五日はガキノの首も助かると言つて、この日は悪いことをしても許された。(西窪)

墓参り 盆の十六日に墓参りをするだけ。盆棚のダンゴ等の供え物をおいてくる。(今井)

ヤブイリ 一月十六日。盆の十六日、奉公人の休日。(西窪)

盆踊り 終戦後、昭和二十二、三年ごろから盆踊りがはやり始め、十五日晩にやったが、昔は、しなかつた。(千保)

昔は盆踊りをしなかつた。(大前)

盆おどりは昔はなかつた。昭和八、九年ごろから婦人会、青年会がやるようになった。最近では体協主催になり、嬬恋小唄、八木節などをレコードでやる。ゆかたでは寒いくらいの時期になる。(鎌原)

むかしは、よそむらでは盆おどりをさかんにやったがここではやらなかつた。ここで盆おどりははじめたのは、戦後のことである。(芦生田)

山の口 馬を沢山飼つていた頃は、お盆が終つてから草刈りをはじめた、この草は、干草にして冬の馬糧にあつたものである。山の草を刈りはじめると、山の口といひ、お盆の終つた翌日(十七日)が、山の口で、草の刈りはじめの日であつた。(芦生田)

地神さま 秋の地神さんが早くあがれば陽気がいいといひ、おそくまでいると、陽気が悪いといひ。地神さんは百姓の神様である。(芦生田)

秋の彼岸 秋の彼岸は盆が終るとすぐにやる。アケタチに必ず墓参りをする。(鎌原)

春のお彼岸よりは質素で、仏様にかわつたものを供える。(芦生田)

十月

十三夜(旧九月十三夜) 近所の六、七軒で三夜待の講をして、回り持の宿に十三日の夜集まつて、夜食にミソマンジュウを作つて馳走した。青豆・カボチャ・芋などを煮て食う。豆の煮付けやオカラの煮付け

も作る。トウワも作る。豆の煮付けには豆・芋・大根などを鍋で煮た。

(大前)

月見 十五夜と同じようにやる。ふかしまんじゅうをしてお月様にしんげた家もある。むかしは、焼きもちをつくってあげた。庭のなにか物の上に、おぼんとかどんぶりに入れて供えた。そなえものは、十五夜の場合と同じようなもの、このときも、供えものを子どもがさげにきた。

(芦生田)

十五夜と十三夜 十五夜に曇りあれども十三夜に曇りなしといわれている。

十五夜るときに晴れば、大妻はあたりという。十三夜に晴れば、小妻があたりという。曇ればはずれという。(芦生田)

十一月

旧十月 旧十月は神なし月という。この月神様は安心して出雲へかえって、二カ月休んでくるといふ。(芦生田)

熊野神社の秋祭りは十月三十日。(同頁)

十日夜 十日夜はかかしさんのまつりである。かかしが一年中作物を守ってくれたので、その感謝のために十日夜をするという。かかしは、はたけのものを荒すのを防ぐためにたてたものであるが、そのもとは、十日夜のかかしであるという(十日夜のかかしをかたどって、はたけに立てたものという。十日夜のかかしが親方で、いわば子分のかかしがはたけに立っているものといわれている)。十日夜はまたお月様のまつりでもある。

十日夜のかかしは庭などに立てた。そこへごちそう(十日夜にはもちをつくものであるとされている。もちに鏡餅をあげた)を供えた。(三原) トオカンヤ、朝ソバキリニダンゴ、タメシ食ッチャアハラダイコ。と唱えた。またミョウガをしんにし、あわからでまいたトオカンヤをつくつ

て、地面を叩き歩いた。

なお畑にかかしを立て、餅は、そのかかしに直接ではないか「カカシサマニアゲマス」と唱えた記憶がある。(田代)

十日夜にはかかしをつくって庭先にまつた。この日もちをついて、もち(あずきのあんをいれたものを二個ならべて)を皿にのせてしんげた。これは、かかしさんが農作物をよく守ってくれたお礼の香味である。十日夜には、わらを藤のつるでまいたものをつくって、これで子どもたちが、はたけをモグラがおこさないようにとはたきあらいだ。そのときの唱えごととは「十日夜、十日夜、十日夜はよいもんだ。あさそばきりにひるだんご、ようもちくって、ほらだいこ」

ムギまきは、十日夜までにはすませろといわれた。(同頁)

米・アワ・ヒエ・ジャガイモなどの餅をついて、庭の月の光のあたる所へ立白を出して、その上に、二、三個の餅を供えた。別にカカシには供え物をしてないが、「カカシの年取り」といふ。

子供はミョウガの葉をしんにして、アワがらを入れて藤の根で巻いたトウカンヤを作って、モグラが土をおこさないように地面をたたいて回った。この時、「十日夜ハヨイモンダ 朝ソバキリニ 昼ダンゴ 夕餅食ッチャ腹太鼓」と唱えた。

夕飯に餅をついたが、鍋餅といって、モチ米を鍋で煮てすりこぎでついてまるめて、アズキあんをつけておはぎにしたりする。朝食にはソバ、昼飯にはダンゴを食べた。(千俣)

餅を二日くらいついて、のし餅とあん餅を作って食べた。月には進ぜない。

子供はミョウガのからをシントウにして、わらでぐるぐる縄をぐるぐる巻いて縛った「トウカンヤ」を作って、地面をひっぱたいて歩いた。モグラが家を掘り起すからたいて防ぐのだという。

「十日夜十日夜 十日ノ晩ハヨイモンダ ヨイ餅食ッチャ 腹デロー」と唱える。(大前)

十日夜にはカカシ餅をついて、庭先にアワボッチ（四把）をつくり、その上に供える。この餅は翌朝上げて食う。わらでトウカンヤをつくって、子供たちが履敷うちをはいて歩く。トウカンヤのしんにミョウガのからを入れると音がよい。よくはたくとどの家でもお祝い（金）をくれた。十日夜のうたは、

「十日夜十日夜 十日夜ノ晩ニヤ 寝エランネ」

「十日夜十日夜」

十日夜ヨイモンダ

朝ソバキリニ昼ダンゴ

夕モチ食ッテハラダイコ（西窪）

もぐらの穴ぶさげで、十日夜にはわらずとっこを作って村の中を叩き歩く。わらのしんとうにミョウガのからを入れ、クソバのつるでわらをぎりぎりしばってやる。十日夜 十日夜 朝ソバキリニ昼ダンゴ 夕飯食ッチャ腹ダイコ」とうたいながら家の庭でたいたいのもの。（鎌原）

この子どもたちは、わらでつぼり（このことを、十日夜ともいう）をつくって、もぐらもちが土をおこさないようにと、庭先をたたいてあ

るいた。そのときの唄えことは、

「十日夜十日夜 十日夜ハヨイモンダ 朝ソバキリニ 昼ダンゴ ヨウ

メン食ッテゴランシヨ ハラダイコ」

十日夜には、新米のモチをついてあげた。もちほのして、矩形にきっておそなえのように二枚かさねて供えた。お盆の上などにのせて、お月見のときと同じように供えた。家の中にも同じように、二枚のもちをか

さねて、神棚に供えた。

十日夜のことはまた、「大根のとしとり」ともいい、もちと一緒に大根

を供えた。

ここではかかしはたてなかつたが、十日夜は、かかしに感謝するとい

う気持があった。（声生田）

トーカーヤは旧十月十日にやる。「トーカーヤ、トーカーヤ、十日ノ晩

ハ良イ晩ダ、朝ソバキリニ昼ダンゴ、ヨイメンクッチャ ハラダイコ」と子供達がワラズトでたたく。モグラヨケと言う。また、ハランでいる女のいる家ではよく叩く。（今井）

カカシアゲ 十一月十日で、子供がわら鉄砲をつくってたたいてある

いた。藤の皮やミョウガのからなどを入れるとよい音かした。

この日カカシ（案山子）アゲをした。臼を庭先に出して、チョッペン

（さん俵）に供物をあげてそこにカカシをかざった。お供えものはボタ

モチ二個の家と、数は一定していない家とある。（大世）

十日夜は「かかしさんのごころうまつり」で、家の裏にかかしをつく

る。かかしの芯はアワのぼっちを使つてやるとかんだんで寒だった。タ

チウスをさかさにしてその上に、のした餅を三きれか五きれ入れて餅で

供える。これを子どもたちが村中を下げて歩いた。（鎌原）

旧十月十日は十日夜。この日は「かかしのご苦労をねぎらう日」、「か

かしの年とり」という。十五夜、十三夜にくらべて、一番ごちそうをつ

くってあげる。この月は、神様が出雲へ行っている、かかし様にも、

出雲の神様のところへ帰ってもらうのだという。かかし様には、一年中

作物の番をしてもらって、収穫が出来たので、この日は「かかし様の立

ち振舞」という。（声生田）

カカシアゲを十日夜にする。土蔵の米俵の積んである所に、カカシサ

ンの餅（50cm×8cm位の長餅2枚）を箕に入れてあげる。他には何もし

ない。鳥を追ってくれたお礼としてする。（今井）

十日夜はカカシのオマツリでカカシアゲをする。カカシに餅を進せる。

（袋倉）

十二樓祭り 十日夜に十二樓にも餅をあげる。猪退治をしてくれたお

礼としてする。

十二樓の石祠の石津の各家の主人と今井の区長が寄つて、むしろをし

いて持参した酒、二重ねのお供え餅をあげて「六根清浄」とかいうノリ

トをあげた。その後みんなで酒を飲む。行く前には顔を洗つて、身を清

める。

十二様に行くのは男衆だけ。「女が行くと弓の矢をばなす」と言われ、十二様に嫌がられる。十才以下の子供ならよい。(今井・石津)

刈り上げ 稲の刈り上げがすんだ日は、鎌をきれいにし、納めるくらいで、家によつてはボタモチをつくることもある。(鎌原)

刈りこ (稲かき) が終わったとき、夜、家ごとにぼたもちとか赤飯をつくつて、「かまあげ」の行事をした。ごちそうは白い、ご飯以外のものをつくつた。(芦生田)

ニワコロガシ 十一月末のニワコロガシにはぼた餅をつくつた。しなくなつて五十年ほどになる。(西窪)

秋、全部のこなしものが終わったときに、ニワコロガシをした。時期としては十一月の末になるが、このときには、収穫の終わった祝いと、各家では思い思いのごちそうをした。(三原)

ネコツバタキともいうが、ニワコロガシという言い方のほうがふつうである。

とり入れが全部かたづいたときにする。これも家ごとに祝う、おみきでも一杯やる。ごちそうは赤飯とかぼたもち。

このときには、嫁さんを里へお客に帰す家もある。嫁には、「行って二、三日休んでこい」といふ家もある。これは、嫁がまだ来たてで、気がね

をしているところで、もちでも持たせてお里がえりをさせる。嫁が家族のものに返答げえしをするようになると、里がえりをするほどでもないとい

う。里がえりさせるのは、嫁にきて二年ぐらゐまでのこと。むかしは、嫁さんも義理をつくしたし、姑のほうも義理をつくしたものだ。(芦生田)

穴つぶさげ 麦まきが終わったときには、穴つぶさげといつて、家ごとに、ぼたもちをつくつて祝う。「おたくでは、穴つぶさげかね」というこ

とが麦まきの終わったときにきくことはである。(芦生田)

ムギまきが終わったときに、アナツツサゲをした。これはクワアライともい

ぬあらい 麦の作つけが終ると、炊や備中をきれいにし、洗って、きまつている場所におき、ぼたもちをつくつて食べる。(鎌原)

七・五・三 たまにはそんなことは口にしたくらいで昔はやらなかつた。(鎌原)

えびす講 (二十日)

秋のえびす講は夜祝つた。春と同じく茶の間で祝つた。秋のえびす講の場合は、えびす様に働いてきてもらったというので、春よりはごちそうをつくつて祝つた。ごちそうは、尾頭付(イワシなど)、けんちん汁、白い飯(えびすもり)といつて、山かけに、もれるだけもれというもり方をした。えびす講には、家族のものも働き高(ふところにある金)をだして、えびす様の前に供えた。(芦生田)

甲子講(甲子の日)

今から六十年ほど前まで、十一月の甲子の日に、むら中の人たち(おやじが主)が宿(くじびきできめた)にあつまつて甲子講をした。おきごをもつていって、飲み食いをした。その費用はあとで平等割にして徴集した。大黒様は運の神様である。(芦生田)

オヨウカ

十一月八日。(鹿沢)

十二月

川流れ餅(一日)

十二月一日、二月に正月をしたころは一月一日が川流れの日。餅を一ついて一日仕事を休み、餅は牛馬から鶏にまで食わせた。(田代)

十二月に川流れ餅をついた。餅をついて食べた位で他に特にかわつたことはしない。油餅はつかない。(大笹)

十二月一日か一月のころ、川へ流れないように「川流れ餅」をついて食べた。この餅は馬・牛・鶏などにもくれた。(千俣)

十二月一日の川ナガレの朝、ニモチ（ぼた餅）をなべふたにのせて馬にくれる。この日は馬が休む日なので、引き出したりすると馬がけがをする。

釜のふたにポタモチをのせて馬に食わせる。馬を休ませる日。（西窪）川に流されないように「川ヨクコセ、ヨクコセ」と言つて、ナベの蓋にポタモチをのせて馬に食わせる。

ふだんは、ナベの蓋にのせてくわせるという。（門見）

十二月一日の行事、この日餅をついて馬にくれた。馬をねぎらう行事である。（三原）

十二月一日は川ナガレモチ。ナベのフタで馬にアソコをつけたモチをやる。（袋倉）

川ナガレは旧十二月一日。ナベッコスリモチを作る。餅米を煮て、スリコギでついで半殺シにして、アズキをつける。

おソーゼン様に供える。馬の神様。その後馬や牛にやる。あとは家中で食べる。

この日、馬や牛は家から追い出さない。（今井）

川ながれの行事 一月一日の朝もちをつき適當の大きさ（両手の手のひらの間にのせられる程度のもの）にして、これを二口鍋のふたの上のせて馬に食べさせる。川ながれとは、馬が川に流されぬように願った行事と考えられている。（三原）

秋祭り（三日）

十二月三日におこわをふかしてお祭りをした。諏訪神社に神主が来て祭典をしたが、昔は役場に社寺兵事係があり、幣帛料として村長が持参した。村長は神主と同じ礼服を着用したが、京都からとりよせたものだった。

この日五・六人の子どもたちが頼まれて「オ祭りニヨラツシャレヨウ」とがなり歩かされた。お祭りには仕事をする者はいなかった。（鎌原）

秋祭りは五日で、秋の農作業が全部すんだ時にお祝いをした。以前は

うんと雪が降ったので、冬越しの準備にウマヤの梁にマキ（薪）を上げて置いた。それらが済んだあと、お祝いをした。（千僕）

稲荷まつり（冬至に近い午の日）

冬至前にするものというが近年は日替。昔はわらで小さい小屋をかけ、当日屋根をふきかえた。ワラツトッコにつくった中にあずきめしを盛りこみ、カシラツキを二本くらい入れておいなりさんに上げた。上げたあとは後をふり返っていけないといわれ、おいなりさんのめしをいつまでも下げないときは不幸があるといつて、おいなりさんのめしを下げないことを心配した。（鎌原）

屋敷神はある家もない家もあつて、特別に祭る日はない。（千僕）

すすはき

タマ笹で笹簀を作つて、すすはらいに使いあつて棄ててしまふ。（大前）十二月二十五、六日にすすはきをする。すすはきの日をヨゴレ年とも

いう。特別にミゴボウキを作つて、神さんを先にはく。（西窪）すすはきは日を見てやつたが二十四、五日おそくも二十八日までやるもの。大安がよい。ささを刈つて来てしばつてはらい、庭におつたて

ておいた。えびす講の前ではなかつた。（鎌原）

すすはきは暮の二十五日頃からのいい日を選んでやる。その晩タロドシ（年とり）をやる。

又、この日に門柱（ナラの木）と門松を伐つてくる。（今井）

これは家の都合によつて日はちがう。

すすはらいは、十二月二十二日から二十三日ごろ。二十八日ごろが最後のすすはらい。

神棚を払うために、新しい竹を山へ行ってとつてきた。

すすはらいのことを、「ススドシ」といつた。

この日は、ふつうの食事よりすすしい。ごちそうをつくつた。（西生田）

冬至（二十二日）

冬至はとうなすを食べる程度である。（大世）

カボチャやコンニャクを食べる。風呂は別にたてない。(干保)

冬至の日には一年中の食物の砂をはらうために、コンニャクを食べる。これを「砂はらいコンニャク」という。またカボチャも食べた。これを「冬至カボチャ」という。カボチャはこの日のために保存しておいたものを「一年中のカボチャのとしり」という。その年にとったカボチャを最後に食べる日、この日から後には、その年のカボチャは食えないという。冬至の十日前にはつまりきつたという。冬至から米粒一粒ずつ、日が長くなるといった。(芦生田)

太子ガユ(旧十一月二十四日)

聞いたことがない。(大前 干保)

太子講は職人のまつり、十二月二十二日の夜した。ごちそうは小豆めしなど。(芦生田)

大師ヶーは旧十一月二十四日、大師ヶーとカヤの箸をあげる。

大師様が子供と女だけの家にとめてくれと行ったが、食べるものがないからととわられた。それでよその人の軒下からカブとアズキをぬすんできて女・子供に食べさせた。

大師様は足がびっこなので、びっこ足あとが見つからないように、この日は必ず雪がふる。これを「ダイシヤンのあとがくし」という。(門員)

天神様(二十五日)

十二月二十五日は天神様、宿に男の子供が集って、集めた米をたいて夕食を食う。「奉納天満天神宮」と書いたはたをつる。このはたは、すめば焼いてしまふ。(西窪)

歳末諸事

お札くばり 十二月二十日ごろ、むらの氏子総代(神社総代)があつたか、お札くばりをした。氏子総代が伍長のところにお札をとだけ、伍長が各戸に配った。お札は伊勢へ代参が行ってうけてきた。

現在は、神主がとりよせて、配札している。(芦生田)

松飾り 門松きりは二十八日以後にする。シン松の三階松が上等。株におきこを上げてから切る。門柱はならの木を使う。もとはシンを切らず枝つきの長いものを用いた。(西窪)

松は前日あたり「日のいい日」にアキの方から切ってきて松かざりとした。三階松でなければいけない。(鎌原)

山へ行って、正月のお松をとってくる。山へ行く日は家によってちがう。すずしをすませてから、お松をきってくる。二十五日すぎの仕事である。

お松は三階松をみんながねらった。むかしは、門松はしん松といつて、一本木をきってきて立てた。そのあと枝だけを立てるようになった。

家によって竹とお松をあわせて立てているが、このむらに土着のものは門松には松だけを立てている。

お松(門松)はトボロの前に立てた。お松は、家の内外各所に立てたが、すべて小さいながらも三階松を立てた。お松をたてる場所は、便所、井戸、物置、土蔵、馬屋、流れ(せき)、稲荷様。

おしめをかざるところは、茶の間、正月棚、大神宮様(神棚)、かまがみ様、おそうぜん様、墓地、神社。正月棚には八本しめをかざる。大神宮様はおやがみで、ここへ一番先におしめをかざる。おそうぜん様には、外の神様におしめをかざって、前後にかざるようになってる。

(芦生田)

シメナワはもちつき晩につくるもので、手ツバキはつけてはいけないというのでつくるのに苦労した。ひま(時間)はいくらでもかけ、みがきをかけてやるのできれいなものをつくった。

三原では「イチヤカザリをするな」というが、鎌原では「イチヤ(ひと晩)待つてかざる分でもニヤ(二夜)かざるな」といって反対のことをいいた。(鎌原)

餅つき 二十九日は苦になるといって二十八日から三十日についた。餅つきがおわると正月飾りをする。清水屋だけはクシチモチでもかまわな

いでつく。(大世)

餅つきは暮の三十日、正月用の餅は立白の下にわらをしてつく。四十九日の餅は「はだか餅」といって、白の下にわらをしかないでつく。一日三升、七日から十白くらいついた。米の餅よりキミ、アワの餅を多くつくいた。いまはキミ、アワの餅はつかない。二重のフカシドウで餅米をふかしたものである。

のし餅は一日から六十五切から七十切ほどとった。

お供えは白餅。餅は米俵を横にして、俵の胴の一部分をほどして、その中に保存して、随時食べた。

ワタシで焼いて、味噌汁に入れたり、しるこ、ぞうに、あべかわなどにして食べたが、きなこ餅や砂糖じょう油をつけたりして簡便に食うことが多かった。米の餅よりアワ餅の方がアシが強い。(西窪)

もちつきは「タンチモチ(タモチ)はつかない」というので二十八日、三十日につく。うすの下には、ウラ(先)をしばってまわりひろがるようにしてわらを敷く。反動をぬくため(台所が平らでない)と、きよめるためのもの。大家ではたいへんやったもので、夜中の二時ころからはじめて夕方暗くまでかかる。三人でつくもので、途中で女衆がトシマア、シ(裏返しをすること)を三回やった。(鎌原)

餅つきは十二月二十五日から二十八日までのあいだのいい日を選らんでやった。ただ九の日には、苦餅といって、餅つきはしない慣例である。(芦生田)

大晦日

ミソカダンゴ 大晦日にヒユ、ソバでつくるダンゴを三個つけてカド(門)にさす。(鎌原)

十二月三十一日 萱の株に団子を一、二個さして、家の出入口にさす。

(西窪)

ミソカダンゴは旧十一月三十日の晩に、ヒユ、ソバ、アワなどのダンゴを作って、二個カヤの串にさしてトポ口全部にさしておく。鬼がのぞ

こんで鬼の目玉より多いのでこわがって入らないという。(今井)

毎年十二月三十一日の夕方だんごをこしらえ、一本の串に二コずつきし、戸口の左右に各一本ずつきしてかざる。土蔵のある家では同様にして土蔵へもかざる。そして、家中みんなで夕食として食べた。だんごの粉はなんでもよかったが、ヒユ、ソバ等の粉が多くつかわれたという。これは泥棒よけの行事であった。(ここでは二月一日からお正月であった)(三原)

年神迎え 大晦日に年神のご幣束が来る。年神さんを中心に左右に二本のご幣束があり、計三本をわらを巻いたものにさす。それを年神棚に飾る。(大前)

年取り 大晦日は年とりともいい、米の飯の夕食「年取りの飯は骨になる」といい、二度食いなどした。この夜は「早寝をするとしわがよる」といって夜おそくまで起きていた。(大世)

年取りの晩は、白米に酒・肴を付ける。肴はサケの切れ目など。この晩は「シラガが生えるから早寝してはいけない」といって、夜ふかしをした。(大前)

この日にみそかそばは食べるのは、ぜいたくであった。たいがい白いごはんを食べる。大晦日には火を絶やさぬようにした。火を絶やせば不幸がおくるといった。火はいろで燃した。火の番はその家の中心になる男(おやじ)がいればおやじ、いなければせがれ)がした。

また、この晩「早寝をすれば白髪になる」といって、夜ふかしをした。(芦生田)